

# 新井白石 著 西洋紀聞

村岡典嗣

校訂および解説

諏訪邦夫

現代語訳

目次の各項と対応する項目にリンクをつけました。ご利用下さい。

この作品はクリエイティブコモンズです。自由に処理して再配布もご遠慮なくどうぞ。

商品化の場合のみ、訳者に連絡してください。

## 西洋紀聞 現代語訳版 目次

西洋紀聞 訳者序.....	3
解説 (村岡典嗣氏の解説。) .....	7
図 シドッチの持物のうちキリスト関係のもの .....	9
上巻 シドッチへの尋問の記述と処分 .....	10
シドッチ登場.....	10
最初の対面と尋問に際して.....	12
初日の尋問 .....	13
見張りに対するシドッチの注文と白石の議論 .....	14
二度目の尋問.....	16
三度目の尋問.....	16
四度目の尋問 (最終回) .....	16
キリスト教の話になると .....	19
シドッチの違反：洗礼施行.....	19
シドッチの処分.....	20
シドッチの死.....	21
西洋紀聞の成立.....	21
附録 シドッチ上陸前後の事情 .....	21
西洋紀聞 中巻 シドッチに訊く世界情勢 .....	25
地球の全景 .....	26
マゼランの世界周航.....	28
ヨーロッパ諸国：まずイタリア .....	29
ポルトガルは東廻りで東洋へ.....	30
ポルトガル王位をめぐるトラブルとイスパニア王の二重支配.....	31
キリスト教伝来の事柄.....	32
イスパニアは西廻りで東洋へ.....	32
ドイツ (神聖ローマ帝国) と周辺の国々 .....	33
強国オランダの歴史と海戦.....	34
海賊イギリスとローマ教会との断絶.....	34

君主の定め方.....	36
ヨーロッパの言語（方言）.....	37
アフリカ諸国：トルコを中心に.....	38
インドと印度.....	41
日本の東南海に金銀の島.....	44
台湾：オランダ支配を鄭成功が覆す.....	44
シドッチが日本に着くまで.....	45
北回り航路の可能性.....	46
北アメリカ諸国：メキシコと新フランス.....	47
南アメリカ諸国とブラジル.....	47
附 イスパニア継承戦争の経緯.....	48
表 イスパニア王位継承戦争の年譜.....	50
西洋紀聞 下巻 シドッチ個人の問題とキリスト教関係の議論.....	52
シドッチ個人の尋問.....	52
シドッチの立場と航海経路.....	53
日本を紹介するパンフレット 2 冊.....	54
他の国々への布教.....	55
ザビエル関係とローマ派遣使節.....	55
利瑪竇（マテオリッチ）のこと.....	57
軍事の事柄.....	58
植民地支配への意見.....	59
シドッチが日本をめざした理由は？.....	59
日本と中国の差への評価.....	61
シドッチの使命は？.....	61
キリスト教の由来について.....	63
キリスト教の確立.....	66
他の宗教について.....	68
白石の直截なキリスト教批判.....	69
原文テキスト公開に際して.....	73
西洋紀聞 原文 電子テキスト.....	74
西洋紀聞上巻.....	74
西洋紀聞 中巻.....	90
西洋紀聞下巻.....	110
『西洋紀聞』用 干支.....	128

## 西洋紀聞自体の素晴らしさ

新井白石著『西洋紀聞』の現代語訳を何とか完成させました。2011年11月に怪我をして以来、まだ完全に回復しておらず、特にスタミナ不足で仕事を丁寧に仕上げる能力が十分ではありません。しかし、自分で満足いくまで・・・といっていると、今の経過ではずいぶん長くかかりそうなので、ここで一応打ち切って完成とします。

今回最大の収穫は、新井白石という人の作品を知った点です。

『西洋紀聞』は、屋久島に上陸して布教を試みようとしたイタリアの宣教師ヨハン・シドッチ（シドチ）を尋問して記録したもので、シドッチの入国（上陸）は1708年、尋問は1709年末です。

これまで私が現代語訳した3作品（北越雪譜、蘭学事始、菅笠日記）は、程度の差はありましたが、どれも十分に愛読していました。しかし、今回の『西洋紀聞』は少し違います。以前に簡単に目を通したかも知れませんが、しっかり読んだのは今回が初めてです。

そうして、気に入りました。白石という人が、西洋文明の知識を科学はもちろんその他も一生懸命にとりこもうとする一方で、シドッチのいうキリスト教の教義に大真面目に反論して、「キリスト教は仏教の焼き直し、それも下手な焼き直し」と主張し、おまけに「世界を造るほどの万能の天主デウスが不信心者を洪水で溺れさすなど、矛盾している。そんなに万能なら全員に信じさせればいいではないか」と指摘しています。

本書は、シドッチからの知見を文章化したものと書かれ私もそう認識して読みましたが、実際には他に日本に出入りするオランダ人からの見聞、それに外国人で日本に住み着いた他の人の話（ジョセフ（岡本三右衛門））、その他の書物からの知識などを総合した白石の努力と博識の産物です。

作品は1715年に書かれているようですが、作品の性質から刊行はされず、筆写で少しずつ知られ、広まったのは19世紀初頭だそうです。それにしても、白石という人の「知識をとりこもうとする貪欲さ」に打たれます。シドッチは日本語が少しできましたが白石はヨーロッパ語の知識はなく、結局通訳経由のやりとりでした。岩波版を解説している村岡典嗣氏は、不便だったはずのコミュニケーションが両者間にここまで見事に成立して信頼関係を築いているのもたいしたものだと述べていますが、私もまったく同感です。

白石は、シドッチのことを「実に博聞強記」と感心しています。一方でシドッチの立場から見ると、これほどの大人物の尋問を受け、互いに知り合いになれ点で、彼も幸福だったと羨ましい気持ちを抱きます。約束を破って、牢で働く夫婦に布教活動をしたのが大きなマイナスに働いて、それ以後シドッチに対する待遇が厳しくなり、結果的には寿命まで縮めたようですが、とにかくシドッチの名は永遠に残ることになりました。名前だけならザヴィエルが有名ですが、しかしキリスト教自体への認識の乏しい私には内容はわかりません。それと比べると、本書に記述されているシドッチの全貌は素晴らしいと感じます。

江戸時代の作品を次々扱えば『西洋紀聞』にぶつかるのは必然でしょうが、それにしても4つ目に本作品に遭遇した好運に感謝しています。

## 電子ファイルについて

『西洋紀聞』には、公開の電子ファイルがありません。下記に2として紹介した平凡社版が電子ファイルとして商品化されており、一応購入して参照しました。しかし、この商品は自分のパソコンにとりこんで処理することを許しません。したがって、今回の仕事に直接は役立ちませんでした。結局、1の岩波文庫版をスキャンしてとりこんでOCRをかけて元のファイルをつくりました。

この岩波文庫版は特殊な印刷法を採用しています。通常の1行の中に、注釈部分を極く小さい活字で2行に分けて印刷しており、そんな個所が大量にあります。この個所はOCR (optical character recognition:画像を自動的に文字化する技術)が全面的に不可能で、手作業で入力する部分が多くなりました。むずかしい漢字も多く、おまけに私自身の視力が年齢の進むにつれて低下し、さらには使用した岩波文庫版の文字がつぶれているという悪条件も加わって見にくくて大変でした。何とか判読はしたものの、絶対的な自信はもてません。しかし、おかげで入力の際に丁寧に読むことになり、本書を楽しむ基礎として大きな役割を果たしたと慰めています。

原文のテキストをせっかく作成したので、現代語訳に附してそちらも公開します。

## 参照した書籍

参照した書籍に触れます。基本は岩波文庫です。さいわい、校訂者村岡典嗣氏の著作権も切れていると判断できるので安心して扱えました。

他に、下の二書を参照しました。3冊ともすべて古書です。

### 1. 新井白石 (著)、村岡典嗣校訂 西洋紀聞 岩波文庫、東京、1936.

今回の現代語訳を作成する源としました。上にも書いたように、少し変わった印刷で一部は字が極端に小さく、それに私の手元のものは紙型が古い故か、文字がつぶれている場合もあり、文字の精しい参照に苦労しました。高齢者には向きません。

### 2. 新井白石 (著)、宮崎道生校訂 西洋紀聞 平凡社、東京、1968.

電子版があります。しかし、「電子版である」というだけで、パソコン内での処理をまったく許さず、その他の点でも「電子版だから便利」という個所が乏しく、私には電子版商品に対する反感だけが残りました。校訂者は最近亡くなった方ですが、この領域で有名な研究者なようです。

### 3. 新井白石原著、大岡勝義、飯盛宏訳 西洋紀聞(原本現代訳) 教育社新書、東京、1980.

今回の現代語訳で、参考になりました。冒頭に新井白石の紹介・本書『西洋紀聞』の成り立ち、当時の西洋の状況などを紹介する40頁ほどの長い文章が載って、それが特に有用でした。版元では品切れですが、古書として簡単に入手できました。

## 国名、地名の表記

本書の原典は、私たちの現用とはかなり異なる仮名表記を採用しています。そのままでは読みにくいので、原則として現代風に直しました。ただし、一部望ましいと考えた個所では、そのまま残しています。

原典表記	修正したもの
エウロパ、エウロパ	ヨーロッパ
フフランダヤ	オランダ
イタアリヤ	イタリア
フランスヤ	フランス
イスパニヤ	イスパニア
	スペイン

他に、地名も一部変更しました。

当の宣教師の名を「シドチ」とするか「シドッチ」とするか悩み、結局普及確立の度合いから後者を採用しました。

岩波文庫版で細字印刷されている部分は、長文の個所では「細字」と断りましたが、それ以外は単にカッコ ( ) で挟みました。( ) は西暦の年号など他の目的にも使用しましたが、やかましく区別していません。

本書は文語文ですので、もちろん旧仮名遣いで書かれています。当然新仮名遣いに直すよう努力しましたが、私自身が旧仮名遣いから完全に脱却はできていない点もあり、それが残っている可能性もあります。お許してください。

「ゐゑを」は、助詞の「を」以外は原則として「いえお」に修正しました。

岩波文庫の原典には、長い附録がついています。そこからも選んで加えることも検討しましたが、結局止めました。その点もお断りします。

本書も、前の作品と同様に私のホームページに公開します。ご利用ください。

[http://book.geocities.jp/kunio\\_suwa/](http://book.geocities.jp/kunio_suwa/)

ともあれ、新井白石という素晴らしい学者に遭遇し、その名著『西洋紀聞』の現代語訳を完成させて嬉しく感じています。

帝京短期大学 諏訪邦夫

Email : kunio.suwa@nifty.com

2012年3月

=====

追記：

原文と自分の現代語訳をくりかえし読み直して、下の確信を抱くにいたりしました。それは、白石がオランダ語をかなり自由に読んでいたに相違ない点です。

幕閣に列する立場上、表向きはオランダ語を読めるとは白石は言えなかったのも無理はありません。しかし本書を読んでみて、単に口頭での情報交換ではなく書籍を介して情報を基礎にしていたとしか思えません。その位に、白石の西洋文化と西洋文明に対する理解は

際立っています。翻訳のなかった当時、白石が書籍から情報を得ようとすれば、オランダ語の書籍を読む以外になかったはずで、そうすると白石はきっとオランダ語の書籍を読みこなして情報を得ていたとしか考えられません。

当時オランダ語を学ぶとしたら、どんな道があったでしょうか。当時蘭日辞書はなかったか少なくとも普及はしていなかったはずですが、でも蘭語/蘭語の辞書（現代の英英辞典のようなもの）はあったと推測できます。

もう一つ、有利に働いた要素として白石に限らず当時の人たちが漢籍に明るかった点を挙げます。つまり、漢文を読めました。漢文が読めるとは、「外国語を一つ読める」ことを意味します。よく指摘されるように、外国語を一つマスターすると二つ目のマスターはずっと容易になります。おまけに、中国語はヨーロッパ言語に構造がやや似ています。漢字一字は言ってみればヨーロッパ言語の一音節に近く、単語の対応もとれそうです。

白石は何を読んだのでしょうか。西洋紀聞から推測するもの、白石の立場で読みたそうなものが三つあります。物理学・天文学・地理学の三つです。「日本は東洋の端にあって小さい」とシドッチに指摘しているのは世界地理を知っていた証拠ですし、他の植民地問題の議論も同じです。シドッチの知識にいろいろと感心しているのは、彼の物理学と天文学の学識面です。ああ、ここで天文学というのは地動説を知っていたという意味ですけど。

白石は1657生まれで、シドッチを尋問した時は50歳前後です。それまでの間にオランダ語を学習して、上記の領域の書物に触れる機会があったと想像するのに無理はありません。それを基礎知識としてこのすごい尋問と数年後の記録（『西洋紀聞』）が生まれたと、私は解釈します。

『解体新書』の出版は1774年で『西洋紀聞』（1715年）からは60年後ですが、こちらは「翻訳して出版する」のが大変でした。一応自分で理解するだけならずと容易です。読者の方々が中学生高校生で英語を何とか読みこなしていたのと、それを本にして出版するのを比較して下さい。

本当のところはプロの歴史学者にお任せしますが、証拠が見つかることを期待します。

2013年8月15日

岩波文庫版より：

岩波文庫版は著作権が切れていると考えられますので、村岡典嗣氏の解説をそのまま掲載します。(諏訪邦夫)

解説 (村岡典嗣氏の解説。)

当時四十歳なるイタリア生れの宣教師ジュアン・シドッチ(Juan Bapista Sidotti) 即ち、わが国ぶりにヨワン・シロウテが、安永5年11月に、最後の潜入者として薩摩の海島(屋久島)に渡来し、長崎を経て江戸におくられ、終に小石川のキリシタン屋敷に幽囚の身となり、正徳5年(1715)10月21日、47歳で此世を去った生涯の晩年は、我国キリシタン史の大詰を為す一幕であった。当時は島原の乱(1637)から70年を経過し、キリシタンの事はもちろん警戒がゆるんではいかなかったものの、施政者の注意の焦点からは遠ざからうとしていた折で、そこへ丁度響きわたった警鐘であった。このシロウテの我国に放ける生涯の歴史中、最も光彩ある場面は、いうまでもなく宝永6年(1709)の暮、キリシタン屋敷に於ける新井白石(1657~1725)の「吟味」である。白石が53歳の働きざかりを、非常な意気込で事に当たり、単身生命を賭して絶東の異域に布教を志した偉僧に直面して、互ひに些か知り得た異語の覚束ない知識ながら、渾身の智能を注いで、質問応答、相弁じ相駁した有様は、単にめざましい一場の壮観であったのみならず、その結果としては、実にわが国洋学の興隆の端緒ともなった、意義深いものであったのである。

而して西洋紀聞は、白石その人が親しく筆を執り、当時の記録をもととして、その後約7年を隔てた正徳五年(1715)に完成している。当時の状況を見事にえがきだしており、問者答者の面目を故知に躍動せしめる自然の名文として、文学的効果のゆたかなるものであり、記載の内容も、当時初めて国人に伝えられた西洋に関する正しい知識、かねて西洋文化に封する理解等が如何なるものかを、今日に示す貴重なる史料である。

しかもこの書は、事キリシタンに関する為か、久しく秘せられ世に流布しなかつたらしく、写本の序跋は、たまたまその消息を伝えている。したがって出版の事など、徳川時代にはもちろん見るべくもなかった。明治16年に、白石社から大槻文彦の校訂によって出版されたのが始めてで、その後新井白石全集の刊行で、その第4巻に収められた。

大槻本は最初の刊行であるのみならず、修史館所蔵の白石自筆本に拠って、厳密に校訂された典拠とすべきものである。わけて二冊とし、第一冊に原本の上中を、集二冊に原本の下と附録数種とを収めた。この文庫本は、本文は専らこの大槻本により、ままたま東北帝国大学附属図書館所蔵の一写本、及び校訂者所蔵の堤朝風本の写本を参照した。附録は大槻本附載のものを増補し、ほぼ年代によって次第した。その資料は、通航一覧、白石の書簡、上記の写本等に仰いだ。なほ白石が尋問当時における上書一通は、紀聞を補ふ注意すべき文書なるべきが、校訂者所蔵の原本によって載せた。

(なほこの書簡については、「新井白石の一書簡とその解説」として、かつて公けにした一文があり、日本思想史研究昭和5年11月刊に収める。特に参照されむことを望む。)

別にまた、本書の名解説として逸すべからざる、大槻本の「校訂緒言」をはじめ、二写本の

序跋等をも一括して掲げた。

終りに本書の外国語訳、その他について一言する。

シドッチの事は、固より欧州に記録されたので、書志によれば、1717年(享保2年)には、スペイン文の1書、即ち法皇 Clemente XI に派遣された僧シドッチの、Manila より日本への旅行記、Angustin 台下の著。(Relacion del viage, que hizo el Abad D. Juan Baptista Sidoti desde Manila al Japon, embiade par el Papa Clemente XI ;por el Rev. P. Fr. Augtstin de Madrid 1717.)が出て、そは翌年イタリア文に訳し、ローマで出版された。シャルボアの日本史(P. de Charlevoix:Histoile et Description du Japon, 1736。)マルナスの日本耶蘇教復活史(Marnas :La religion de Jesus ressuscittee au Japon)にも、その記事がある。(鮮血遺書また、その後の版に、このマルナスによって記した「若望榎」の一篇を附載している。)

併しながら西洋紀聞が、外国に紹介されたのははるか後で、最初は1865年(慶応元年)である。米国改革教会の宣教師で1859年(安政六年)に来朝し、後、新約聖書翻訳委員長ともなったサミュエル・ロリンズ・ブラウン(Samuel Rollins Brown)が、上海出版の Journal of the north China Branch of the Royal Asiatic Society, New Series II, Decemb. 1865, III, Decemb, 1866.) に寄稿したもので、標題は、

西洋紀聞 Sei yo ki bun or annals of the western ocean, an annals of the translation of a Japanese manuscript.

とあり、第一部に原本上巻(附録は除く)と中巻とを、第二部に下巻を、いずれも全訳したもので、序註をはじめところどころに註がある。序註に、江戸の一古本やで得た日本の一文書を訳したとて、三巻の梗概を述べ、当時の日本政府の対キリシタン態度の伺はれるのを、興味がふかいと言っている。

第二は、1881年(明治十四年)出版の The transactions of the Asiatic Society in Japan, IX. に掲載された、ライト(W. R. Wright) の、

The Capture & Captivity of P. Giovanni Batista Siddotti in Japan from 1709 to 1715. で、これは原本上巻(附録を含む)の全訳である。評者ライトは、英国福音伝播会の牧師で、明治6年来朝、同15年に帰国。即ち帰国前年の訳である。

第三は、その翌年の1888年(明治15年)横浜出版の雑誌、Chrysanthemum Vol IIに、Pare Sidotti in Japan; a condernsed translation from the Sei yo ki bun, とあるので、梗概である。

この三者、いずれも大槻本出版以前の翻訳で、殊に第一のものは明治以前のそれであることが注意される。

本書の校正には、文学士福尾猛市郎君を煩わした。

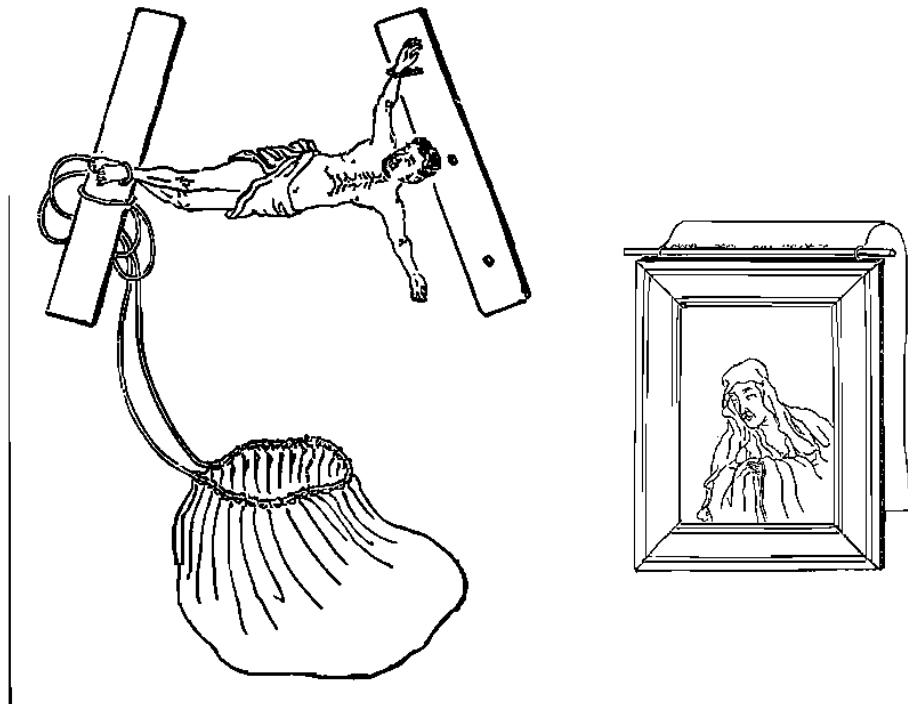
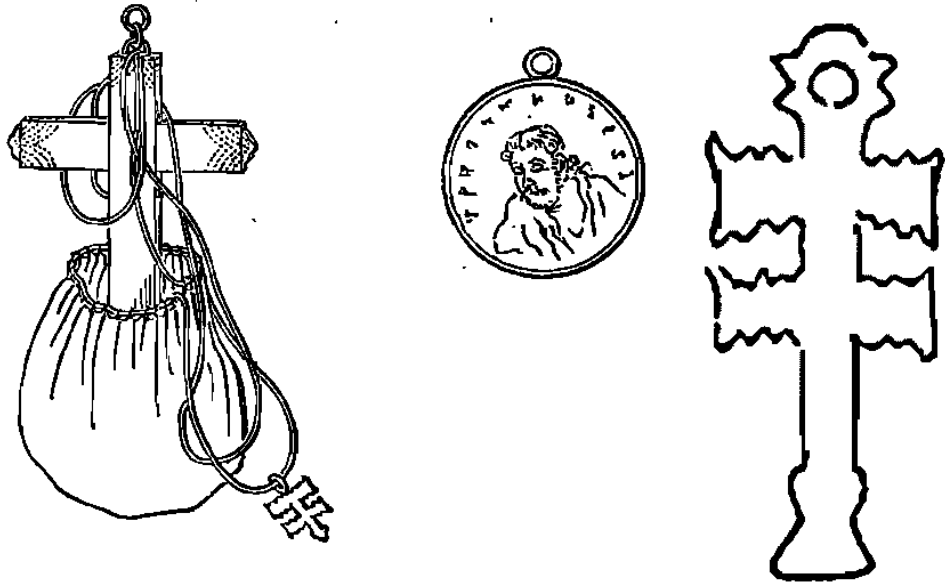
昭和11年7月12日

校訂者しるす

(新仮名遣いに改訂、それ以外はほぼ原文のまま：諏訪邦夫)



図 シドッチの持物のうちキリスト関係のもの（岩波文庫の巻末から一部を掲載）



-----

以下、西洋紀聞 現代語訳版

## 上巻 シドッチへの尋問の記述と処分

目次

シドッチ登場

最初の対面と尋問に際して

言語問題への白石の懸念と主張

初日の尋問

見張りに対するシドッチの注文と白石の議論

二度目の尋問

奉行所と獄屋と二人の奴婢

三度目の尋問

四度目の尋問（最終回）

キリスト教の話になると

将軍家宣の明断

シドッチの処分

シドッチの死

西洋紀聞の成立

附録 シドッチ上陸の前後

シドッチ登場

宝永5年（1708）戊子（つちのえね）12月6日、西邸で伺ったところによると、その年の8月、大隅国の島（屋久島）に、異民族の人が1人来て住んでいるという。日本・江戸・長崎などという単語以外は、言語が何を述べているのかわからない。

自分の手持ちの紙に図を示して、ロウマ・ナンバン・ロクソン・カステイラ・キリシタンなどと述べ、特に「ロウマ」という時は、自分の身を指さす。これを長崎に知らせて、オランダ人に訊いてみると、ロウマとは西洋イタリアの地名で、カソリック教の主がいる所だという。ロクソン、カステイラ等のことは、何だかわからないという。

西邸：江戸城西丸のこと。白石のつかえた徳川家宣は、在職が1709～1712であり、この時点では将軍職を嗣ぐ直前で、西の丸は次の将軍の住むところらしい。

大隅国：現在の大隅半島の部分で、一応薩摩国とは別の扱い。屋久島もこちらに属していた。

また南京（なんきん）、寧波（にんぼう）、廈門（あもい）、台湾、広東（かんとん）、東京（とんきん）、暹羅（しゃむ）等の人に訊いてみたが、キリシタンというのは、禁止され

ている宗教のこととは聞いている。しかし、それ以上の事はわからないということであった。

聞いた限りでは、この人が西洋の国から来たのは、間違いない。しかし、言葉が聴き取れないというのは、理解できない。君（白石の上司、徳川家宣公。この時点では将軍ではなかった）には、かさねてその理由を質問してきた。昔の人のいう事を、聞いたこともある。あの地方の人は、きわめてよく万国のことばに通じており、むかし、ナンバンの人が日本に来た当初、数日で我国の言葉に通じ得て、ついに其教をも伝えたという。

キリスト教が日本に布教したのは昔のことで、ナンバンの人が常にゆきかよっていた。キリスト教が禁ぜられた時点で、我国にはその教に従ったものも、西洋まで派遣された人も数多くいた。したがって、西洋の国々の人は、日本の言葉はよく通じるはずである。何か必要があつて日本に来て、言葉が通じなくては どうやって目的をとげられるだろうか。

もっとも、世界の言語は場所によって異なり、中には古い言語や今風の言語がある。その人が習ったのも、日本の中のどこの人の言葉を習ったのかわからない。その上に、ナンバンの人たちがここに来なくなって、すでに百年近くになるから、今の言葉と違うのも当然だろう。そんな点を心得たものに聞かせれば、何とかその言葉をききわけのものもいるだろう。

そもそも、オランダ人のいうこともおかしい。ロクソンといえ、宋元の代以来、呂宋と書いて来た国（現在のフィリピン）で、そこで出土した壺を日本では葉茶を貯えるに具合がよいといつて、「呂宋真壺」などと名付けていることは誰でも知っている。またカステラといえ、話に出ているイタリヤに近い国で、むかし、そのその国で作り出した菓子を日本に伝えて、今もカステラとして珍重している。こんな程度のことは、自分でさえ名を聞き覚えているくらいで、その地方の人が理解できないとは、逆に理解できないと申しあげた。そうすると、君は私の言い分ももっともだとおっしゃった。こうして、この西洋人は法にしたがつて処分しようということになったが、その年もそのまま暮れ、次の年宝永6年（1709）己丑（つちのとうし）早々の正月10日に、5代将軍綱吉公が亡くなって国葬があり、この西洋人のことは話題にならなくなった。

そのまま年も暮れそうな11月の初になって、前年の冬、大隅国に来ていた外国の人が間もなく江戸にくることになったから、到着したら尋問せよと命令が下つた。

その際、前年長崎の奉行所から送られてきた書類の写しも拝見した。それによると、彼は来日の理由をいまだに明かさないと。実は、その前に私が申しあげてあつたこともあり、それでは尋問しろというので、今度は将軍になった家宣公が私を再度呼び出したのだった。

ところで問題は簡単ではない。日本の言葉なら何とか聞きとれよう。しかし、地方や人名、または宗教となると、方言や専門用語が多いはずだ。特にこの宗教は禁制が厳しいから、オランダ語の通訳などでも解釈できないことが多いと聞いていて、その点でもなかなか難物である。奉行の許にはその言葉など翻訳の資料などあるだろうと、そんな物があり

そうなら拝借したいと申し入れた。この点を執政の人々に君から仰せになったので、奉行のところから書籍が三冊届いた。

それを拝借して見ると、その教法の大要などがあるだけで、言葉を実際に訳したものではない。けれども、中に一つ二つ用の足りそうな所もないではない。そうこうするうちに、例の男が江戸に到着したというので、同じ月の22日に奉行所で対面することになり、前日に奉行たちに来て打合せた。

#### 最初の対面と尋問に際して

横田備中守・柳沢八郎衛門と落ち合い、その日の巳の時（午前10時）が過ぎた頃、当の場所へ向かった。キリシタン屋敷といい、城北の小石川にある。

奉行たちと出合って、かれが携えて来た物をまず検査する。日本で新たに製った金銭もあり、また法衣というのは白布で作ってあるが、よく見ると裏の方に日本の南都（奈良）で織出した布であることを示す朱印があった。奉行たちにも見せ、他の人にも見せると、間違いはないという。理解しがたいことと思いつつ、物を全部検査して、長崎から付いてきた通事（通訳）のものを呼び出した。大通事は今村源右衛門英成、稽古通事は品川兵次郎・嘉福喜蔵という。後者二人の名は聞いたことがない。自分は、彼らにむかってこんなことを述べた。

訳註：キリシタン屋敷の所在は現在の茗荷谷付近。筑波大付属高校・御茶ノ水女子大・拓殖大学などのある付近である。当時、キリスト教は禁令になっていたがそれを捨てない人たちを置いた牢獄でもあった。

#### 言語問題への白石の懸念と主張

むかしナンバン（ポルトガル）の人が長崎にいた頃は、その国の言語のできる通訳もいた。キリスト教が禁じられた当座は、そうした通訳もまだいたろうが、その人たちも亡くなった後は、そうした学を伝えるものが残っている理由もない。禁じられた当初は、まちがってその地方の言葉を口にただけで、厳罰をまぬかれなかったかも知れない。たとえその言語を聞き伝えていても、敢えて口に出すべきことではなかった。

こうして70年～80年も経ったから、今ではその言葉に通曉しているものがいなくて当然である。そもそも、凡そ世界の言語は同じではない。たとえば長崎の人に陸奥の方言を聞かせたら、理解できないことも多いだろう。それでも日本国内の言葉だから、こんな風に言うと意味はこんなことだろうと推測して、あたらずというとも遠くないかも知れない。万国の図を私が眺めてみると、イタリアとオランダは同じヨーロッパの地にあり、距離は近いはずで、長崎と陸奥ほどの遠距離ではない（註）。だから、オランダの言葉で、イタリア地方の言葉を推測すると、七割か八割は通じることだろう。けれども、公の問題となると、大体わかるでは具合が悪い。正しく言語を学ばないで、推量でいうのはまずいだろう。

訳註：キリスト教の伝来は1549年頃で、1600年前後まではかなり自由に布教活動が許されていた。それから少しずつ制限が進み、1637年の島原の乱を最終的な要因として厳しく

禁止されるようになった。シドッチの上陸の1708年は、そこから70年経過している。

当時の日本はオランダの人たちとは接触していたが、ナンバン人つまりポルトガルの人たちとは接触がなかった。言語も、オランダ語はゲルマン系でドイツ語に近く、ポルトガル語はラテン語系である。また、カステイラはスペインの一部（当時は一応別の国）で、ザビエルはこの出身という。

訳註：ローマとオランダの距離に関する議論は、当時の地図が悪かったのかも知れないが、少し乱暴な印象を受ける。

ローマ⇄アムステルダム：1300キロ

長崎⇄青森 やはり 1300キロ

と、両者ほぼ同じ位である。

しかも、日本国内は参勤交代などを通じて、情報交換が行き届いていたとしても、イタリアとオランダは別の国だから情報交換がどこまで行き届いていたか、疑問でもある。

### 初日の尋問

今日のことと前日のことは同じではない。これからの尋問は公式なものではない。自分のために、その言葉を通じさせたいのだから、たとえ彼が云うことに納得できない場合、皆様方が心にきいて推察したとおりのことを私に云ってほしい。私のほうも皆様方が云うことを、彼のいうことと正しく理屈が合っていなければ、信じて採用しようとはもおもわない。したがって、皆様方の推測に間違いがあるとしても、別に非難はしない。

奉行たちも是非聞いてほしい。諸君も簡単には学び得ないことだから、たとえ理解に間違いがあっても、咎めを受ける問題ではないから協力してほしい、と申しわたした。人々も、仰せはよく承りましたと答えた。

こうして、正午過ぎに問題のシドッチの尋問にかかった。彼は、二人の人から左右を挟み助けられて庭まで到着し、人々にむかって挨拶した。坐るように命じると、庭上に設置した榻（しじ、椅子、こしかけ）についた。この役所は南面に板縁があり、その縁から三尺の場所に榻が設置されている。奉行たちは、縁に近く坐り、私は座の上の少し奥に坐っている。大通事は板縁の上で西側に跪いて坐り、稽古通事二人は板縁の上で東側に跪いている。当の外国人シドッチは、長旅を輿の中にならずと座っていたので歩行困難で、獄中からここまでも輿に載せて連れてきた。それが、二人の人がはさんで助けている理由である。榻についた後は、寄騎の侍一人、歩卒二人、その横側と後ろにいて、筵の上に跪いて居る。以後のやり方は基本的に、みなこれに同じ。

註：「この役所は・・・みなこれに同じ。」という部分は、原文で極端な細字で印刷されている。しかし、白石の書いた文章である。

註：寄騎：与力とも書く。奉行などの下で仕事をこなす下級武士。

シドッチは背が高く、6尺（180cm）をはるかに越えるだろう。普通の人とは、彼の肩より低い。頭かぶろにして（童髪で）髪は黒く、眼が深く窪み、鼻は高い。身体には茶褐色の

袖細の綿入れをつけ、日本の紬（つむぎ）の服を着ている。この服装は、薩州の国守が与えたものだという。肌には、白い木綿の単衣を着ている。（坐についた時、右手で額に字を書く様子をした。その後も、常にこれは繰り返した。この説明は後で加える。）

註：頭かぶろ：子供のように髪を伸ばしている様子。屋久島到着時は月代（さかゆき）を剃って、日本人の大人の髪型だったというが、役人の支配に入って髪の手入れが行き届かなくなったものか。

こうして、奉行たちが通訳して質問すると、必ず礼をしてそれから答えた。それによると、気候がもう寒いのに、彼の衣服が薄いからと、衣を与えようとしたが受けないという。理由は、彼の教えでは同じ教えの信者でない人から物を貰うことはしないという理屈である。そうはいいながら、飲食に関しては、自分の果たすべき業務を果たすのには生命を維持する必要があり、毎日食事の世話をして頂いてお国の負担になっています、その上に教義の教えに背いて衣服まで頂戴するわけにはゆきません、という理屈だという。

最初に薩馬の国守から頂戴したものを身にまとしており、これで寒さをふせぐには十分です、気にしないで欲しいと主張しているという。この議論が終って後、周囲の人々が私に挨拶して、是非もっと近づいて話して欲しいと注文した。しかし、この日は私の側からは特に尋問を深めることなく、ただ彼の国や地方のことなど、通訳に命じて質問させて、その返事を聞くだけに留めた。

（世界地図があるので、その図を示して尋ねると、この図は日本語で書かれているので正確には理解できないという。奉行所には西洋語の古い地図があると聞いているから、次回にその図を出そうと約束した。）

揖（ゆう）：お辞儀の一種。身体をあまり屈しない形。

尋問の様子は、質問と答えは、当初懸念したほどわづらわしくなくて滑らかに進行した。ただし、彼の言葉には日本の近畿・山陰・九州・四国などの方言がまざり、しかも彼独特の発音で述べるので、正しく把握できていると思ひ疑う場合もあった。それに、自分の発言をこちらが聞きとれないといけないと思うらしく、必ず言葉を繰り返しているのもわずらわしい。もちろん、あやまって伝わることも、少なくない。

その上に、地名や人名になるとその土地での発音のまま述べるので、こんな事柄はよくよく詳しく訊いて、地名や人名を解明した。

通訳たちはオランダ語を学び慣れて、そのやり方に引かれて、彼の言いたいことを勝手な風に変えてしまうこともあった。こうして問答を2時間ほどした後、私自身が問いかけたり答えたりして日が西に傾いたので、奉行たちに、今日はこれまでにしてまた別の日に設定しようと言って別れた。

見張りに対するシドッチの注文と白石の議論

ここでシドッチは通訳にむかって、こう述べた。「自分がここに来たのは、キリスト教を

伝えて、何とかこの土地の人を利し、世を救いたい気持ちです。ところが着いて以来、多数の人の世話になるばかりで不本意です。日本に着いてもう1年たち、季節はまた寒くなり雪も降りそうです。ここにいらっしゃるお侍方など、日夜私の見張りをして下さるのは、見るに忍びません。私が逃げはしないかと心配されているのでしょうか。」

「私としてみれば、途方もない遠距離を風と波を越えてやってきたのも、受けた命令を何とかしてこの土地で達成したいからです。その狙いでここまで来ました。

「そもそもここから出ても、私には逃げる先などありません。たとえ逃げても、私の風貌はこの国の人とはまったく異なり、どこかに隠れるなど一日でも不可能です。

「といて、お侍の方々は命令で守っているだけで、お仕事を怠るわけにはいかないでしょう。昼は今のとおりでけっこうですが、夜になったら手枷と足枷でもして、獄中につないでくれたら、見張りの方々も安心して眠れるでしょうから、そのように命じて頂きたい」と述べた。

奉行たちも、この言い分を聞き、彼の真情に同情するような気配を示した。

これに対して、私(白石)はこう述べた。「その方は思いもよらず怪しからんことをいう、それが真情とは思えない」と。

それに対して、彼のほうは大いに恨みがましく思う様子で、「そもそも真情を疑われるほどの恥辱はありません。特に空事を述べるといわれるとは、私の教えでも大きな罪です。自分はもの心がつくようになってからこの方、一言でも嘘を言ったことはありません。殿がそうおっしゃるのは何故ですか」と逆に質問した。

私の答えはこうであった。「今、その方のいうところでは、年末になって気候も寒くなり、ここにいる人たちが日夜汝を守っているのが見るに堪えない、とこう云っているのだな」と念をおして尋ねた。彼は、「まことにその通りです」と答えた。

それに対し私は「だからこそ、その方の言い分はいつわりだというのだ。彼等がその方を守るのも、奉行たちがその方の命を大切に思っている故である。奉行たちも上から命令されて汝を守ろうと思ひ、その方に具体の悪いことが起こらないよう工夫しているのではないか。その方の服装が薄くて寒そうだと心配して、何度も衣服を下さろうとしたという。もし今その方が述べたことが真情だというのなら、何故彼らのいう通りに温かい衣服を身に着けて、彼らが心配しなくていいように協力しないのか」と述べた。

「彼らがその方のことを心配しているのに、その方が自分の教えで受け付けないというのなら、ここにいる人たちが法にそってその方を守るのだということを、反省しないのはおかしいではないか。そうすると、その方が前に述べたことが真情なら、今いうことは嘘だということになる。今いうことが真情なら、前に述べたことが嘘だということになる。さあ、この問題に対してどう答えるか」と問うた。

こう言われると、彼は大いに恥ずかしく思った様子で、「今のお話を伺いますと、前に申したことがどうも間違っていたようです。仰せのとおり衣服を頂戴して、御奉行さまの心を平らにいたすよう協力します」と述べた。

奉行たちも、よくおっしゃって下さいましたと云って、互いに悦びあった。シドッチは

言葉について通訳にむかい、「折角の思召しではございますが、頂戴いたすものが絹紬の類では自分の心が痛みます。是非木綿などをつくって頂きますよう、お願いします」という。それですでに日暮れでもあり、シドッチを獄中に還して私（白石）も帰宅した。

明日の23日の夜、通訳等が私（白石）の家に来て、昨日例の男の言った点でよくわからなかったことがあるので、質問したいというので話をし一応解決した。

#### 二度目の尋問

次の25日に、また例の場所へ出かけた。奉行たちも登場してシドッチを召喚した。今日は奉行所にある世界地図を持参して、彼の出身地のことを質問すると事情が明らかになり、初めて聞くことも多かった。「この図は70年以上も前にできたもので、今はヨーロッパでも入手しにくい貴重品です。あちこち破れているが惜しいので、是非修復して後世に伝えて欲しい」という話だった。この日も午前10時過ぎから2時過ぎまで尋問して、彼を還した。

#### 奉行所と獄屋と二人の奴婢

この日は奉行所が給付した木綿衣をかさねて、そのことで礼を述べた。その後、獄中の様子も見て欲しいと、奉行たちが案内してくれた。

獄屋の北の方に家があり、そこは以前宣教師であったが後に信仰を捨てた人（黒川壽庵）を住まわせておいた場所だという。そこに、年老いた夫婦がおり、二人が出てきて奉行たちに挨拶した。この二人は、罪人の子どもが奴婢（召使）となってここに置かれているもので、黒川壽庵の奴婢になって夫婦にしたという。夫婦二人はキリスト教徒ではないが、禁断の教えを抱くものの下で幼時から働いたので獄門を出ることはゆるされず、奉行所に衣食の道を見つけて、老年を送らせている。

シドッチの獄舎を見ると、大きな建物を厚板で隔てて三つに分け、その西の一間に住まわせていた。赤い紙を切って十字を作り、西の壁に張り、その下には法師が誦経するように、その教の経文を暗誦して貼り付けてある。彼らが居る所の南に宿舎があり、守れるものが守って居る。こんなことを全部見終わって帰宅した。

#### 三度目の尋問

晦日に、また出かけて行った。今日は、奉行たちに特に出なくていいと伝えておいたので、出勤してこなかった。それで前に質問した事柄に、さらに尋問を加えたい点を聞いて、日を過ごした。今回尋問したのは彼の地方のことだけで、ここまでやって来た事情や教の内容などは質問しなかった。彼のほうからは、時折そのことに関連付けて言い出そうとしたが、それには特に答えないで済ませた。

#### 四度目の尋問（最終回）

その次の日に、こう述べた。「昨日までに三日間、汝シドッチと会見した。ここまでくると、その方の申すことを、聞き違えることはなさそうである。その方も、私が述べること



をよく聞きわけているようである。そこで、その方がやって来た理由などをしっかり訊きたい。その場合、その方の申し分はキリスト教の内容にわたるはずだから、奉行たちも立ち会って、ことの次第をよく聞いて欲しいというのが、その方の意図のはずだ」と。それで、奉行たちにも是非出席するように命令し、会見を12月4日に設定して、奉行たちも列席した。

シドッチを召出して、ここまでやって来た理由を尋ね、またどんな内容の教えを日本に広めようと考えて来たのかと尋ねると、彼は大いに悦んで、「私は6年前にここへ出かけるよう言われて、遠くまで風浪を越えて、ついにお国の都まで到着しました。たまたま今日は、本国では新年の初日で、人々は皆祝っているはずで、ちょうどその時に私どもの教えなどを聞いて頂けるのは、この上ない幸いです」といって、教えのことなどを、存分に説明した。

(彼の国では、12月4日が年始なのか、それとも暦法の違いによるものだろうか。)

その説は、はじめ奉行所が提出した三冊の本(岡本三右衛門の書)に出ていることだから、間違はずもない。ただ方言など言葉が同じではないので、地名や人名など、すこし異同があったが、基本的には音の変化の問題だけであった。

そもそも彼シドッチは大変な博聞強記で学問全般にも通じており、天文地理のことになどでは、到底及ぶものがなさそうである。

#### ここから長文の細字

(彼の地方のことを質問すると、答えは下にしるした。西洋の学問は数多くの科目にわたり、全体で16科目を学習したという。たとえば、天文の問題に関しては、尋問の初日に問答が長時間にわたって日が傾いたので、奉行たちにむかって、今何時だろうかと私が尋ねたところ、この辺には時鐘がありませんので奉行が弁解した。するとシドッチが頸をまわして、日光のあたっている所を見て、地上におちた自分の影を見て、指を折って数えて、我が国の法でいうと、某年某月某日の某時の某刻にあたります、と述べた。いわば勾股の法(直角三角形をつかう計算法)で簡単な計算法ではあるが、といてこれほど簡単に答えがでるとは思っていなかった。

こんなこともあった。オランダ鏤(ちりばめ)板の万国の図をひらいて、ヨーロッパ地方の場所をみて、ローマはどこだと質問すると、字が小さくて通訳にはみつからなかった。すると彼は、チルチヌスがあるかという。通訳は、それはないと答えた。何のことだと訊くと、オランダ語ではパツスルと呼び、イタリア語ではコンパスと呼ぶものだという。

#### 細字続き

コンパスならここにあると私がいって、持参していたものをふところから取出してあたえたと、私のコンパスは支点部分が緩んで使いにくそうだったが、それでもないよりはましといて、その図の中から測かるべき場所の小さな図を見て、筆を借りて字をうつしとり、例のコンパスを手で持って、その分数をはかりとり、図を坐上におき、身体は庭上の

腰掛におきながら手をのばして、小さな図の蜘蛛の巣のように細い絵の線をたどって、あちらへこちらへと数えてゆくと、手が届かないほど遠いところまで行って、「ここです、ご覧下さい」と、コンパスをさした。それで皆で近寄って見ると、小さな国の針の孔のような個所に、コンパスの先はとまっており、その国のかたはらにローマという番字があると通訳等は言う。

さらにその他に、オランダを始めとして、その地方の国々のある個所を質問すると、前のようにしてどこも全部正答して一個所も間違ふことはなかった。また我が国で、ここはどこだと質問すると、また前のようにして、ここですというのでみると番字でエドとするしてある場所だった。

このやり方には定式があるに相違ない点は理解できたが、しかしやり方を知らなければ、こんなに簡単にできるわけがない。この手法は学習が可能かと訊くと、この程度のことは精しい数学の知識などは不要で、簡単に学習できることだという話だった。

彼は慎み深く、ちょっとした好意などにも反応していうことをきいてくれる性質のようである。

(彼は、庭の腰掛に腰を下ろす際にも、まず手をそえて一礼して坐り、ついで右の親指を額にあて、印をつけてから目を閉じて坐る。長時間坐わっても、塑像のごとくに動かず、一方で奉行たちや私が座をたつ場合、必ず自分も起立してお辞儀をして坐り直す。他人が還って来て座につく際にも、必ず自分も起って礼をして坐り直す。このやり方は毎日同じで変わらない。ある時、奉行たちがくしゃみするのを見ると、その人に向かってお呪いを誦して、通訳にむかって、陽気が寒いようで衣を重ねるべきではないか、私の国ではくさめをすることはつつしむことです。理由は、以前に国中でこの病気が流行ったから、という。また、通訳等ラテン語を話してなまると、くり返しくり返し教えて、習得すると大いに賛美した。私が話すのをきいて、通訳の人々は中途半端にオランダ語を学び慣れて、その古い習慣の抜けない所があり、今おっしゃったように進みません。この点あなた様はそもそも私たちの言語で習ったが故である、などといって笑った。

オランダの戦船には、傍に窓を多数つけて、上中下の三層があり、その窓毎に大砲を出しているということも、ただ言葉で述べるだけでなく、図を描いて説明しようとするが、なかなかうまくいかない。

(私が左手を横にたてて、その4本の指の間から右手の指の頭3本を出して見せると、なるほどといて、通訳にむかって、この説明は気が利いていらっしゃると述べたこともあった。

「ノーワヨランダヤの場所は、ここからどのくらい離れているか」とたずねたところ、答えなかった。さらに重ねて質問すると、彼は通訳にむかってこういった。「私の郷里では人を殺すのは最大の悪業です。したがって、私がそんな知識を他の人に与えて、他国を侵略しようという気にさせたくない」というのである。これに対して、「その話は私には理解できない。何故そんなことをいうか」と通詞等に質問させると、ノーワヨランダヤのことなどわかってはいるが答えるわけにはいかないという。さらにその所存を質問すると、

「今回、このお方（白石）と話をしてみても、お国での事情はよくわかりませんが、私の国にいらっしゃれば、きっと大変な事業をなさる方に相違ないとお見受けします。したがって、このお方がその土地を手に入れようと思えば、とても簡単でしょう。したがって、その路の距離などを詳しく申しあげると、人の国を侵略することを教えてしまうことになりますから」というのであった。

この説明をきいて、奉行たちが聞いているのもばかばかしいので、私はこう述べた。「今のようなことは、たとえ私にその意図があっても、我が国には厳しい法があり、私の一存で一兵でも動かすことは不可能だ」といって笑ったことだった。シドッチのは、いわば考え過ぎだったのである。）

訳註：ノーワヲヲランデヤは現在のオーストラリアのことらしい。中巻に精しく登場する。

キリスト教の話になると

シドッチのいうことはいろいろと理にかなっているが、ひとたびキリスト教の教えを説く段になると、道理にかなった所が一言もなくなってしまう。智者が突然愚者に入れかわって、まるで別の人が話しているような感じがする。

これでわかることは、西洋の学は形と器に関して精しく、いわば形而下なものだけ詳細で、形而上のものをまったくあつかっていない。だから天地に関しても、「創造主がいる」というだけで済ませて、それ以上解明しようとしなない。

ともあれ、こんなシドッチとの問答の大略を2冊にまとめて、お上に献上した。

将軍家宣の明断

お上はすぐに明断を下されて、「日本では永年キリスト教を禁じている。今回、彼のようにキリスト教徒がここに来たのは、宗教人がその行動を自由にさせて欲しくて、解禁を訴えていると称している。

もし宗教を普及させようというなら、この日本で信じるに足るものをもって来るべきではないか。それなのに、形だけ日本人の振りで来ているではないか。それでは、たとえ話に真実が含まれていても、他を疑ってかからざるをえない。結局のところ、云っていることは彼の国の宗教人の話である」と。

さらにお上のご意見では、「これまでの例だけで罰を決めてはいけない。将来、その言葉や教えにどんな効果がありそうかを極めて、処決すべき」だということであった。

私がお上の本心を推理して、「彼の国の人々が日本にやって来ることは、今後も無くならないでしょう。したがって、後のために、今回のことも記録して進呈致します」と申し上げた。

シドッチの違反：洗礼施行

それからほんのわずか後に、君は亡くなられた（家宣の在位は、1709～1712と短期間であった）が、正徳四年甲午（1714年）の冬に、こんな事件が発生した。

むかしキリスト教の信徒で、その後キリスト教をすてた教師の奴婢になっていた例の夫婦ものが自首してきた。教師は黒川壽庵といい、本来の西洋名はフランシスコ・チウアンといった。奴婢の名は、男は長助、女ははるといふ。二人の話はこうである。

「むかし二人が師としていた方（黒川壽庵）が世にあった時に、ひそかにその教えをさづけられ、国法で禁せられていると知らず何年も経ちました。

今回、例の国人（シドッチ）がこの教えのために身をかえり見ず、遠路はるばる日本までやって来て、しかもとらわれの身となっているのを見て、私どもは老い先も短いことでもあり、地獄に墜ちるのはなさけないと思って、例の人から洗礼ををうけて、あらためて信徒となりました。でも、このまま黙っているのは、国の掟にそむくことですので、ここに申し出ました。なにとぞ、法にしたがった処分を受けますので、罪になるのも仕方ありません」という申し出である。

それで、まず二人の住処を分けて、それぞれ別の場所に住ませた。

#### シドッチの処分

明年（1715年）3月、オランダ人が朝貢した時に、その通訳を通じて、シドッチは当初は自分は使節であり宣教師ではないと述べたのに違反して、ひそかに例の夫婦ものに宣教師として洗礼を施行したとの罪を糾断して獄中に繋げざるを得なくなった、と伝えた。

こうなるとシドッチの真情は、いわば化けの皮がはがれて、大声をあげてあの夫婦のもの名を呼んでのしりよばわり、信心を固めて死んでも志を変えてはいけないと毎日すすめたのに、という。

この年来たオランダ人のいうところでは、「北京に行ったというトーマス・テトルノンも、間もなく帰国したということです。この点は、そもそも前からその土地にいた同国人との間柄がまずくなって、在住を続けられなくなったという話です」という。

ところで「このシドッチがここに来たことをどう思うか」と尋ねると、「この問題はオランダ人としては何とも理解できません。もしかすると、そもそも祖国で何か死に当る罪を犯しながら、その贖罪のために日本に来て布教の努力をしようとしたのかも知れません。祖国としても、もし彼がいうように申ひらきして努力するのなら、それはそれでもつけの幸です。しかし、日本の法にそって殺されるものなら、それは仕方のないことで、望みに任せてもいいという意見でシドッチの願いを認めたのではないのでしょうか」ということだった。

（オランダ人の説も、それなりに筋はとおっているが、自分の意見は違う。彼の祖国としては、キリスト教を再度布教させる時期がきたと判断する理由があつて、まず試みにこの人を派遣したのだというのが私の考えである。自分がこう思う理由に、このシドッチが持参した我が国新製の金と銭との二つがある。シドッチ持参した黄金三品のことを私が質問すると、本国ではヨーロッパ諸国のお布施で、金銀等の財貨は特に得ようと努力しなくても、なお十分にあるといい、またロソンの地には銀が多く出ること、また我が国東南の海嶋より金銀が多く出てイスパニヤ人が取得していると述べた。さらに、これらの物共のことなど、本国に言い送るまでもなく、私（シドッチ）が手紙を一通ロソンに書き送ればい

くだけでも手に入ると述べた。私がそんなことを聞いて、それではこの男シドッチはそもそも今時なにものために来たのか理解できないと思ったことを符合してみた。

ロソンにいる間に、日本の黄金の小判と銅銭が改変されたのを眺めて、日本の国財はこれまで考えていた以上に窮しているようで、国民はひどく苦しんでいるに違いない。国民が苦しんでいるなら、上からの命令は行われないだろう、禁じられている教えを伝えても、金銀をつかって導けば、日本は禁を解くこともあるかも知れないと推測したので、その後は慎重を期して私は金銀の問題は避けていた。）

#### シドッチの死

こうして、この年（1715年）の冬10月7日に、召使の長助が病死した。55歳であった。同じ月の半ばにはローマ人シドッチも病気になるって、21日の夜半に死亡した。シドッチは47歳であったろうか。

訳註：シドッチが長助とはるに洗礼を行った1714年以降、シドッチの処遇が厳しくなったという記録がある。それまでは、幽閉はされていたが自由な行動が許されていたのに、その後は牢に入れられて食事もまずしくなったようで、それがシドッチの寿命を縮めたと考えられている。

#### 西洋紀聞の成立

前代（6代将軍家宣）の時代に、私が命を受け報告もしておいたので、今このことを記すことにした。全部で三巻である。

初巻には、実際に発生した事柄の顛末をしるして、長崎奉行所より注進してきた大略をうつして附録とする。

中巻には、シドッチの述べた海外諸国の事柄を記した。

終巻（下巻）には、私の質問にシドッチが答えた事柄の大要を記した。

これらの事柄は、すでに何年もの年月が経って、今では忘れたことも多く、実際の言葉や詳しい事柄や名前の記述には間違いも多いだろう。

そうはいうものの、本書の内容である海外諸国のことに関係する所は、珍しい話を知りたいだろうから、欲しいという人もあって当然で、隠すべきことでもない。ただし、下巻のことに関しては、外国の人に伝えるのは不適切である。

それでも、公儀より改めて本書のことに尋問されようというなら、この限りではないことはいうまでもない。

=====

#### 附録 シドッチ上陸前後の事情

大西人シドッチが、始めて来た時のことをここに記す。

大隅国馭謨（ごむ）郡の海上、屋久島の地の栗生（くりふ）村というところに、阿波国（現在の徳島県）久保浦という所の漁師たちがやっ来て、魚を捕ることを業としていた。

宝永5年(1708)戊子8月28日、これらの漁師7人が舟をうかべて、同じ屋久島の湯泊(ゆどまり)という村の沖に出ていた。陸から三里ほど離れた海の上に、見なれない大きな船が一隻浮かんでいるのを見つけて、漁師たちは栗生村をさして急いで漕ぎ帰った。

例の大きな船は小さな舟をおろし、その舟に帆をかけ、私どもの舟を追って来た。こちらの舟も帆をかけてはしり帰るが、向こうの小舟もうちがひ(訳註)というものを加えて追って来る。わずか60mほど離れて見ていると、その舟には見慣れない風情のものたちが10人ほど乗って、中の1人が水が欲しいをいう様子をしてみせた。

うちがひ(打ち櫂): 帆船で、帆走だけに頼らず櫂を漕いで走るための装置。

こっちの船に到底追いつけそうもないと安心していたところ、相手の小舟も元の大船の方に向かって帰っていった。その日の夕方、同じ島の南にあたる尾野間(おのま)という村の沖に、帆を多数はった船が一隻小舟を引いて東を指してゆくのを、村の人たちはあやしいと感じて浜に出て見守っていると、夜になって空もくもったので、船の行方はわからなくなった。翌日つまり8月29日の朝、尾野間より二里許の西にある湯泊という村の沖のほうに、きのう見たのに似た船が見えたが、北風がつよくて船は南に進み、正午頃には帆影も見えなくなった。

同じ8月29日に、屋久島の恋泊(こいどまり)という村で藤兵衛という百姓が、炭を焼くつもりで松下という所で木を伐っていると、うしろの方で人の声がしたので振り返って見ると、刀をさした人が一人いて、手招きしている。彼の言葉は何を言っているのかわからない。水が欲しいという様子なので、器に水を汲んで近くにおいた。彼が近づいてその水を飲んで手招きするが、相手は刀を持っているので、おそれて近づかなかった。彼もその気持ちがわかったらしく、刀を鞘ごとぬいてさし出したので近づいた。そうすると、四角い黄金を、1つ取出してくれようとした。

彼は、前日に見た船から陸に上った人だろうと考え、刀も金も受け取らずに浜に出て見たが、船は見えず外の人もない。藤兵衛は自分の住処に戻って、近村の人々にこれこれと伝言させた。平田という村から五次右衛門、喜兵衛という二人がやってきたのを連れて、もう一度松下に行ってみると、例の男は恋泊の方を指さして、そこへ行きたいという様子を示した。足がつかれたようにみえたので、1人は彼をたすけ、もう1人は刀をもち、さらにもう1人は彼の携帯していた袋型の物もち、恋泊の藤兵衛の家に行って食物を準備して食事をさせた。彼はまた丸い黄金を二つと、四角い黄金を一つ取り出して、あるじの藤兵衛に与えようとしたが、藤兵衛は受け取りを辞退した。

彼の言うことは、何を言っているのかわからないが、身なりは日本人のようで、月代(さかやき)を日本式につけ、浅黄色で碁盤のすじのように染めた木綿を身に着け、裏には茶色の生地がついている。刀の長さは二尺四寸位(72cm)で、日本の飾のようにしたものを一腰(ひとつり)さしていた。

以上のことを島守に報告すると、島守は宮之浦に収容する場所を準備し、そこへ彼をうつして、国主の薩摩守の許に連絡した。さらに、薩州の家人等が連署して、その事情を長崎の奉行所に報告した。

(その報告書には、9月13日とするされている。彼の家人等は島津大蔵、同将監が新納市正、種子島蔵人などが連署している。長崎の奉行は、永井讃岐守と別所播磨守である。)

さらにこの西洋人を長崎に送致すべき由を伝えてきた。その後さらに、彼が述べた事柄などをまとめて、薩州から長崎に送った。(前に述べたローマン、ロクソンなどのことである。)

オランダ人を始めとして、長崎に集まっている外国の人たちが奉行所に召集されて、彼が述べることなどを議論したが、誰も事情を明らかにできないとこたえた。

こうして冬の終りになり北風が吹き続き、海は波が荒くて彼を送致しようとした船は再度島に押し戻された。担当する薩州の人たちは何とか苦心して風波を凌ぎ、島から九州本土の大隅まではからうじて到達して、そこから再び長崎に送りこもうとした。彼は是非江戸に連れて行って欲しいと述べて、長崎には行きたくないとの希望だったが、そんな希望を聞き入れるわけにもいかない。船を多数乗り継いで、ようやく長崎地方の網場という所に到着した。船はここで降りて、あとは陸路を移動して長崎に連れて行き、獄舎に入れた。

オランダ語の通訳たちが協力して、彼に来日の理由などを訊くが、地名などは聞いたこともあるものの、その他のことは聞きわけられないという。オランダ人を特に憎んでいるようで、オランダ人に直接質問させるわけにもいかない。障子を隔ててオランダ人に聞かせてみたが、これも聞きしらぬ事柄が多く、ましてその言葉となると、日本語も半ば混じっているようで、それだけさらに解釈がむずかしい。

彼の側でも、何とかして考えを伝えたいという様子でもあり、質問のことなどオランダ人に訊かせようかという、それも結構と答えたので、オランダ人の中で、むかし彼の地方の言葉を学習したことがあるアアテレヤンドウというものと、そのカピタン(商館長)のヤスフルハンマンステアルというものの二人を召しだして質問させた。

(彼の地方の言葉というのはラテン語ということで、詳しくは下に説明する。)

これによって、彼がここまでやってきた事情が判明し、その事柄などを奉行所から連絡してきた。

(後できくと、オランダ人に対する彼の態度は特に傲慢で、オランダ人をどう思っていたろうか。特におそれる様子が明確だった。オランダ人で彼の国の言葉を学んだという人も、6年で学習を止めた由で、話が全面的には通じず、その程度も彼れが言うのを全部聞いて、ようやく何とか大略を理解できたという程度であった。)

長崎からこの江戸に送付してきたのは、翌年の夏の末である。連れてこいという仰せが下ってから、前年来彼の発言を聞かれた通訳を3人つけて、9月25日に長崎を出発し、11

月の半に江戸に到着した。その間、カソリックを禁ずることを彼に伝え、奉行に命じて担当の役所の獄舎に収容した。

これから後のこと共は前にしした通りである。奉行たちの話では、彼が毎日食う物には、一定の限度がある。初め長崎に到着して以来、ここに来るまでまったく変わらないという。

#### 細字

(ふつうの日には、午時と日没後と二度食事する。内容は、飯の他に汁は小麦の団子を、うすい醤油にあぶらを加えたものと、魚と蘿蔔(らふく：だいこんのことらしい)とひともし(「ねぎ」のこと)とを入れて煮たものである。酢と焼き塩とを少し加える。菓子には、焼き栗4つ、蜜柑2つ、干し柿5つ、丸柿2つ、パン1つなどを摂る。齋戒の日には、午時に一度だけ食う。ただし、菓子はその日も二度食して、量を多くする。焼栗8つ、蜜柑4つ、干し柿10個、丸柿4つ、パン2つを二度食う。その菜の皮実等はどうするのか、捨てたあとも見えない。齋戒の日も、魚は食う。またここに来て以来、入浴したことが一度もない。しかし、特に垢がつき汚れていることもない。食事以外に、湯や水を飲むこともないという。)

携帯の袋にいれていたものは、銅像・画像、これに供養すべき器具、法衣と念珠、他に書籍が16冊ほど、さらに錠のごとき黄金181個、弾のごとき黄金160個、日本元禄年製の金錠18個、日本の銭76文、康熙銭31文等である。その中、書籍6冊はつねに身につけて、手を停めずに誦じているという。

#### 細字

(これらの物の形態等、詳細に記述することは無用であろう。故にここでは略す。)

正徳五年(1715)乙未2月中澣

筑後守従五位下源君美

白石  
君美  
原印

註：澣は「かん、がん、あらう」で、「中澣」は中旬の意味



## 西洋紀聞 中巻 シドッチに訊く世界情勢

## 地球の全景

マゼランの世界周航

ヨーロッパ諸国ヨーロッパ諸国：まずイタリア

シシリー島は火山

ポルトガルは東廻りで東洋へ

ポルトガル人の日本登場

ポルトガル王位をめぐるトラブルとイスパニア王の二重支配

キリスト教伝来の事柄

イスパニアは西廻りで東洋へ

フランスとノーワ・フランスヤ

ドイツ（神聖ローマ帝国）と周辺の国々

強国オランダの歴史と海戦

海賊イギリスとローマとの断絶

その他の国々：スコットランド、アイルランド、グリーンランド

君主の定め方

ルテイルスの徒（プロテスタント）：シドッチは「異端」と呼ぶ

ヨーロッパの言語（方言）

アフリカ諸国：トルコを中心に

他のアフリカ各地

アジア諸国：ペルシャ

大国ムガル

インドと印度

セイロン：釈迦入滅の地

クロンボの由来とクロンボの関係

シャムと暹羅：金葉の書（金札）

マラッカ海峡

スマトラ：灼熱の地

ジャガタラ（ジャワ）

ボルネオ島：水晶と香料

メンダナオ（Mindanao、ミンダナオ島）

日本の東南海に金銀の島

台湾：オランダ支配を鄭成功が覆す

誰がオーストラリアを発見したか

シドッチが日本に着くまで

北回り航路の可能性

北アメリカ諸国：メキシコと新フランス

南アメリカ諸国とブラジル

## 附 イスパニア継承戦争の経緯

## 表 イスパニア王位継承戦争の年譜

=====

## 地球の全景

大地は海水と合っして円形ないし球形で、天円の中に居るといふ。ちょうど、鶏卵の黄味が白身の中にあるようなものだろうか。

地球の周囲は9万里で、どこもかしこも皆人が住んでいる。地球全体を分類して、5大州とする。

訳註：地球の周国9万里で……：1里はほぼ4キロだから、9万里は36万キロとなる。実際の地球は周囲4万キロだから、10倍近く大きく評価している。36万キロは、たとえば月と地球との距離38万キロや、光速で1秒間に進む距離(30万キロ)に近い。ちなみに、後者よく知られる「地球を7回り半」である。白石が何故これほど大きな数値を書いたのか、記述の根拠は不明。

一つはヨーロッパ(漢語で歐羅巴と訳す。はじめは漢音のように発音していたが、その発音は支那式で不適切だとシドッチに指摘された。後に来たオランダ人に訊いても、シドッチのいうところが正しいようだ。むかし日本人はヨウロウハといったが、これは漢音が転じて訛ったものである。俗に奥南蛮という地方が、ヨーロッパのことである。)

二番目はアフリカ(漢語で利未亜(リウイヤア)と訳しているのが、これにあたる。)

三番目がアジア(漢語で亜細亜と書く。オランダ鏤板の図に拠ると、以上三大州は共に一区域内にあり、これを地上界としている。)

訳註：鏤(る)：「ちりばめる」、「きざみつける」と読む。金属に彫るなどの意。

四番目はノオルト・アメリカ、(西洋語でノオルトと、南のことである。漢語で南亜墨利加と訳するは、即ちこれである。)

五番目つにはソイデ・アメリカ、(ソイデとは、北である。漢語で北亜墨利加という。オランダ鏤板の図によると、以上南北アメリカの二大州は共に一圈の内にあり、地下界としている。)

訳註：「ノオルト＝南、ソイデ＝北」は入れ替わっており、白石の誤記とされている。正しくはもちろんノオルト＝北、ソイデ＝南である。本書でも別の個所では正しく扱っている。

ヨーロッパ地方には、南にマーレ・カスピヨムがある。(漢語に訳して地中海という。)

訳註：マーレは「海」で、他にも多数登場する。マーレ・カスピヨムは、「カスピ海」で地中海のことではない。本書には、こうした思い違い、聞き違いがときにみられる。

北は、グルウンランデヤ（漢訳は臥兕浪徳ともいう。後に説明があるグリーンランドのこと。）、オセヤーヌス・ツフネンテリヨナーリス、（漢語では、伯尔作客海（ベツルソキオハアイ）と訳している地方である。バレンツ海？）。東は、タナイス（ドン河のこと。漢語でタナイホリ（大乃河）と訳す。）。ホントスエキシーノス（黒海のこと、漢語に黒河的湖と訳す。）。西は、マーレ・アツトランテイフム（漢語に訳して大西洋という）に至る。

尔：なんじ、しかり

訳註：オセヤーヌス・ツフネンテリヨナーリス、漢語で「伯尔作客海（ベツルソキオハアイ）」は不明だが、漢訳の音からはバレンツ海とも考えられる。バレンツ海はグリーンランドの東でスカンジナビア半島の北の海。

訳註：タナイス（大乃河）は「ドン河」で、ロシアの中央高地に発して、南流してアゾフ海（黒海の一部で、クリミヤ半島の東北側にあたる部分）にそそぐ。

アフリカ地方：南はカアポ・テ・ボネ・イスフランサ（喜望峰。漢語でダイランシャン（大浪山）という地方、詳細は下に説明。）

北は、マーレ・ニゲーテラーニウム（すなわち地中海、上の地中海「マーレ・カヌピヨム」（おそらくカスピ海のこと）とは用語が異なるのは当然）、東はマーレ・ルーブロム（漢語で西紅海という）、マタカスカ（マダガスカル島、アフリカ東南海中の島。詳細は下に解説）。

西は、オセヤーヌス・エテウピークス（利未亜西方の海の意味。上には大西洋として、「マーレ・アツトランテイフム」という用語を使用している）に至る。その東北の地は、僅かに一路でアジアの地とつながっている。（訳註：現在でいえば、スエズ地峡がこれにあたるだろう。）

アジア地方：東はオセヤーヌス・ネンシス（漢に訳して小東洋という）の諸島に至り、（ヤアパン、リウキウ、エゾなどの国をさす。ヤアパンは日本。リウキウは琉球。エゾは野作と書く）。西はタナイス（ドン河、すなわち大乃河）。ホントスエキシーノス（黒海、すなわち黒河的湖）。マーレ・ニゲーテラーニウム（すなわち地中海）、マーレ・ルーブロム（すなわち西紅海）。マーレ・ランチードル（漢語で南海という）の諸島（スマアタラ（スマトラ）、ロソン（フィリピンのルソン島））等の地をさす。スマアタラは沙馬大蠟、ロソンは呂宋。下に詳述）に至り、北は、タルターリヤ・マーリヤ（タルターリヤは韃靼で、マーリヤは海だから、韃靼の海で北海あるいは北極海の事と解釈される）に至る。

南アメリカの地：四方を海でかこまれて、その西北に僅かに一路あって、北アメリカの地につながっている。（その東北は、海を隔ててアフリカ西南地方と向かい合っている。こ

の東北海をマーレ・テルヌル（カリブ海）といい、西の海をオセヤヌス・ベルヒヤヌス（太平洋）という。）

北アメリカの地：東南で僅かに南アメリカに通じ、西南側はマーレ・テルヌル（カリブ海）に至り（これその南海の名である）、北はグルウンランデヤ（グリーンランド）につながり、西北の地はいずれの場所に到達するか不明である。（その西北の方は、すなわち日本、野作等に当たる。）その東はすなわち、マーレ・アツトランティフムに向いている（すなわち、大西洋。）。

訳註：ここの南北アメリカは、白石の記述が混乱しているので、本来の意味に修正した。  
訳註：後にも出てくるが、当時グリーンランドは北アメリカと陸続きと考えていたようである。この点は、白石の誤解ではなくてそういう解釈が多かったらしい。

訳註：ベーリング海峡は一応 1650 年頃に発見されているが、確立はしていない。北アメリカとアジアがつながっているのかも知れないと考えていても不思議ではない。

（考えてみると、大西洋・地球・地平等の図は、その由来がまだ不明瞭である。明国の呉中明が、万国坤輿図に関して、「ヨーロッパの国々に関してはこの種の古い地図がある。どうもイタリア人やフランス人は、皆遠洋航海が好きなようだ。時には、絶海の地を訪れて調べて、その知識でこういう地図などを誌している。そういうものを長年にわたって積み重ねて、こうした大体の状況がわかったのだ」と述べている。

自分は今回シドッチに会って、この欧羅巴鏤板の地図を出して、彼の説明をきこうとすると、彼はこの地図を見て、「これは 70 年前にオランダ人が作成したものです。その精妙さは群をぬいており、現在では西洋でも貴重で入手困難です」という。

### マゼランの世界周航

オランダ（ヨランデヤ）というのは、現在日本に毎年朝貢する阿蘭陀国の事で、利瑪竇（マテオリッチ）編纂の万国坤輿図に啗蘭地（オオランド）・則蘭地と書いて、「西洋布地は二島産のものが最も優れている」と注がしてあるが、それがこのオランダの地図である。（則蘭地は即オランダで、則蘭地はオランダの属州セーランドのことである。）

この点をオランダ人に質問したところ、「昔本国の人マゴラアンス（Ferdinand Magellan : マゼラン）というものが天文地理の学問に大変に精しく、また船を操ることも巧みでした。六隻の大船に衣食関係のものや器械類をすべて載せて、大洋に向かって出帆し世界を周航しました。その船が風涛のために破壊すると、乗員たちを残った船に分けて乗せ、壊れた船は焼き棄てました。こうして 6 年後にたった 3 隻残って本国に戻りました。これによって、世界山海輿地の状況が、詳しく判明しました。ただ南方一帯の地と、北アメリカ西北の地方はいまだ詳細にはわかりません」と答えた。

今オランダ鏤板の図を中心に、他に万国坤輿図や三才図絵・月令広義・天経或問・図書編（いずれも明の作品）等に掲載している図を見ると、どれも概略をしるしているだけである。私見だが、万国坤輿図にヨーロッパ、アフリカ、アジア、南北アメリカの他に、墨瓦刺泥

加（メンソアランジェイキヤ）の一州を加えて、六大州としている。

訳註：マゼラン：この書き方はマゼランがオランダ人のように読めるが、マゼランはポルトガル人でスペイン王の依頼で世界を周航した。1519-1522年。マゼランはフィリピンには寄ってそこで生命をおとした。艦隊も含め、太平洋ではここより北には行かなかつたらしい。

訳註：墨瓦刺泥加（メンソアランジェイキヤ）の一州は何を指すか不明だが、すでにプトレマイオス時代（2世紀頃）に南半球に大陸があると考えていたらしい。利瑪竇の世界地図には、南半球に巨大な大陸が描かれており、もちろん空想の産物だろう。本書が書かれた時代（1700年代初頭）には、オーストラリアはすでに発見されている。またマゼランはマゼラン海峡を通過した際に、その南にあるフェゴ島を大陸の一部と考え、南極大陸も想定していたともいう。

すぐ下に記述されている「墨瓦蠟加（メソリアニイハ）」もおそらくは上記空想の南半球の大陸を指すと考えられる。

その説に、墨瓦蠟加（メソリアニイハ）は、フランス国の姓名に係るといふ。60年前、始めて此の峽を過ぎ、ついにこの地に至る。故にヨーロッパの人たちは、其の姓名を以て峽に名をつけ、海に名をつけ、地に名をつけるという。

その墨瓦蠟（メソリアラ）というは、即ちマゴラの西洋語が訛つたもので、さらにまちがってオランダ人を、フランス人としたようである。

とはいえ、オランダ鏤板図には、南方一帯の地は、いまだ詳細には不明として、地名を書いていないものもある。万国坤輿図説によると、南北アメリカは基本的に四方を海で囲まれており、南北はほんのわずかな土地でつながっているという。

ところが、オランダ鏤板図に拠ると、北アメリカの西北部はまだ詳細には不明だというので、敢えてははっきり書かないでおく。

#### ヨーロッパ諸国：まずイタリア

（諸国、全部をしるすことはわずらわしい。ここにはただ、シドッチの説明にあったことだけを略記する。以下、同じ。）

イタリア（漢訳は意大里亜、意多礼亜という。）。ヨーロッパの南の地方、地中海上にあり。その国都をローマンという。（オランダ語で、ローマという。漢に訳して、羅馬国という。）ここはキリスト教之主（教皇、法王）が支配する場所で、周囲は僅かに十八里、住民は70万人である。

人々は機器の扱いに巧で、精密な機器を製作する。キリスト教皇は、主にデウスの教（カトリック教）を掌る。軍事の点などは、各地にドウクスがいて担当する。（ドウクスは、いわば酋長である。詳しくは下に解説。）

地中海には、コラアリウム ウブリイを生ずるといふ。（赤珊瑚樹である。その樹がもっとも長いという。）

訳註：羅馬国：現在のヴァチカン国は、面積（0.44km<sup>2</sup>）も人口（790人）も、ここに記述されているよりはるかに小さい。この時点では、イタリアは多数の都市国家に分れており、完全に統一されたのは19世紀後半である。

#### シシリー島は火山

シシーリア（漢訳に西齊利亜という。日本ではシシリヤと言うのがこれである。）

エウロバの最南で、地中海の嶋である。此島に山が二つあり、一方は常に火を出し、一方は常に烟を出して、いずれも昼夜絶えないという。

私見だが、本朝寛永年間（1624～1643）に日本に来たキリスト教徒で、コンパニヤ・ジヨセフというものがいる。彼はこのシシリヤの人だという。このジヨセフは、後にキリスト教を捨てて日本に帰化し、岡本三右衛門と呼ぶようになった。

#### ポルトガルは東廻りで東洋へ

ポルトガル（漢訳で波亦杜瓦亦といい、また波羅多伽児とも書く。むかし日本ではホルトギスとも、ブルトガルとも呼び、さらに「南蛮」と呼んだのもこの国のことである。）（国都名リスボン又はリスボン）。

ヨーロッパ西南の海に面した地にある。この国はいろいろな品物を海外諸国に出して、ついにアジア地方、ゴア、マカオ、マロカ等の地に本国の人を駐留させ、盛り場などを支配させたという。（ゴアは日本ではゴリと言い、マカーオは日本ではアマカワという。マロカはマテヤとも言う。詳細は下に説明。）

西洋の船が我国に渡来したのはこの国が始めである。またキリスト教が東洋に入ったのも、この国の行ったことである。（1596～1623）

#### ポルトガル人の日本登場

私見だが、ポルトガル人が初めて豊後国に来たのは天文10年（1541）7月である。その後、薩摩国に来たのが天文12年（1543）8月である。

慶長元和（1596～1623）年間に、毎年ゴワやアマカワの人（五和、天川と書く）が来聘しているが、それは皆このポルトガルの人がそうした場所において、船を操っていた。

慶長18年（1613）の冬、西洋の船がキリスト教徒をつれて来ることを禁じた。（その前の慶長14年（1609）、日本人でアマカワに行って貿易していたものが3百人、ポルトガル人によって皆殺しにあった。それで翌年ポルトガル人が日本に来た際に、船と共に焚殺したという事件があった。）

#### 訳註：インターネットの解説

（<http://www16.ocn.ne.jp/~sironoki/200fukuokaigai-no-shiro/248hara/hara0.htm>）によると、1608年にアマカワで日本人・中国人・ポルトガル人などの間で「喧嘩」になり、当然何人かの犠牲者が出た。「300人がポルトガル人によって皆殺しにあった」は不明である。

翌1609年、ポルトガル船「マードレ＝デ＝デウス号」が長崎に入港して、アマカワ事件の

関係者も乗船しており、幕府と藩が乗り出して結局この船は撃沈されたか自沈したという事件。

これをみるとポルトガルは変な事件のトバッチリを食った印象も受けるが、布教禁止は島原の乱（1637）の影響が大きいだろう。

寛永十六年（1639）になって、外国船の来航を禁止した。翌17年5月にポルトガルの貿易船が来たが、その乗員を船ごと焚殺した。正保4年（1647）6月、ポルトガルから進貢船が来たが、8月になって通商を拒否して追い返した。

賈：「あきない」、売買の両方を指す。

ポルトガル王位をめぐるトラブルとイスパニア王の二重支配

（ジョセフ（岡本三右衛門）の書によると、こうなっている。

細字による記録

「はじめポルトガルの王妃は、イスパニア王の娘でした。ポルトガル王に世継ぎがないまま亡くなったので、王妃は父母の国であるイスパニアに帰りました。ところがこの王妃が妊娠していると判明して、ポルトガルの人たちは王妃を追ってきて、ポルトガルに還って貰いました。こうして男子が生まれて世をつぎ、21歳で死にました。また世継ぎが途絶えました。先王の弟はイエスの徒となってローマにいましたが、その人をむかえて嗣（よつぎ）としました。ところが、この人は立場上当然妻がおらず、嗣子もいません。それで国民が相談して、先王の姪を嗣として、イスパニア王に願って、ポルトガルの国事を治めさせました。そののち、この姪が男子を産みました。その子が成人した後に、イエスの教えに入信し、国事の担当を拒否しました。その子も、父と同様に世俗を避けました。国民からは是非と要請したが、承知しませんでした。

細字続く。

ついにローマ法王庁も協力して「デウスは、汝の国を汝の先王にあたえたのであり、それをすてて治めないでいるのは正しくない」という理屈で説得しました。ここに至って、やむを得ず国王が国事に当るようになりました。イスパニア王がポルトガルを治めて以来、実に60年経ってようやくポルトガルの王位が復しました。」

これによって日本に対しても、以前からの好い関係を継いで再び礼聘を試みたので、それが今から78、9年前のことである。その王の名はドンジュアン・クワルという。それがこの正保4年（1647）6月に、ポルトガルの人が日本に来航したことの背景である。）

ここまで細字

訳註：このジョセフ（岡本三右衛門）の書は、現在は失われて伝わっていないという。

貞享2年（1685）3月、ポルトガルの通商船が来航したが、これも受け入れを拒否した。その後は来ることがなくなった。

### キリスト教伝来の事柄

私見だが、例のキリスト教が日本に入ったことは、ポルトガルが日本にはじめて通商した際、フランシスクス・ザベリウス (Franciscus Xaverius、漢に訳して仏来釈古者という) という宣教師が、ポルトガル船に乗って豊後国に来たのが最初だという。これは天文年間 (天文 18 年、1549) のことである。またキリスト教が支那に入ったのは、明時代の萬曆 29 年 (1601) の春で、大西洋からマテオリッチ (利瑪竇 : Matteo Ricci) が来たのが始めだとされている。この萬曆 29 年は、日本の慶長 6 年に当り、キリスト教が支那に入るのは日本への伝来から 60 年後である。

### イスパニアは西廻りで東洋へ

イスパニア (オランダの語には、イスパンヤともいう。)

ポルトガルとフランスヤ (フランス) と地を接して、その属国が 18 ある。また、南アメリカの地を併せて新たに国を開き、ノーワ・イスパニアと号す。(メキシコのこと : ノーワは日本語では新の意味。以後、これに倣う。ノオバイスペンヤというのも同じ。)

その後、アジア地方では、ロクソン (ルソン島、あるいはフィリピン付近の島々) をも併合した。(ノオバイスペンヤとロクソンのこと等、下に詳しく述べる。)

私の意見では、慶長年間、この国が始めて来聘した。そののち、呂宋、新伊瀨把休憩 (ノワイスパニア) 等の商船が絶え間なく何度も来朝した。

これらは皆、この国人の来たものである。外国船の来航を禁止されると来なくなった。寛永元年 (1624) の春、再び挨拶にきて関係修復を求めたが、日本側が拒否した。

カステイリヤ、(カステイラともいう。むかし我が国でカस्ताアンとも呼んだ国名。)

イスパニアの東南にあり、互いに同盟国の関係にあるという。

私見では、この国自体は古来日本と交流した記録はない。ただし、我国で始めてキリスト教を広めたフランシスクス・ザベリウスは、この国の人だという。

### フランスとノーワ・フランスヤ

ガアリヤ (またラテン語で、フランガレキスとも、フランガレギヨムともいう。そのレキス、レンギヨムというのは、国という意味だという。また、イタリア語では、フランスヤともフランガレイキともいい、オランダ語ではフランスという。むかし、日本でガリヤンといったのは、ガアリヤの訛りであろう。)

ヨーロッパ西海上にあり、イタリア、イスパニア、オランダ等の地に隣接している。またソイデ・アメリカの地を併せ、新たに国を開いてノーワ・フランスヤと称するという。

訳註 : 「ノーワ・フランスヤ」 : フランスは、この時点では北アメリカのニューファウンドランドからルイジアナまで、広大な領域をフランスが支配していた。カナダ東北部に限らず、ロッキー山脈の東側のかなりの部分がそれにあたる。その後、イギリスに圧迫され、さらにアメリカの独立 (1776) を迎える。教育社版の現代訳では、「カナダ東部」と断定し



ているが、白石の時代には違ふだろう。

私見だが、フランスの商船がむかしは日本にも来たことがあるという。この国のことは詳細が不明である。ある人の説では、明の書にフランス国と書いてあるのは（仏狼機ともいう）、ポルトガルのことだというのが、これは納得できない。漢訳で波羅多伽兒といえ、これは間違いなくポルトガルだが、仏郎機はフランガレイキ、フランガレキス等の訛まり訳に似ている。ポルトガルを訳して、蒲麗都家といい、カステイリヤを訳して加西郎という。）

これも私見だが、「西洋人が明国に通じたのは、武宗正徳 12 年で、仏郎機国の入貢が最初」と書いてある。この正徳 12 年は、日本では永正 14 年（1517）に当たるから、西洋の船が始めて日本に来た天文 10 年（1541）よりは、24 年も前である。

#### ドイツ（神聖ローマ帝国）と周辺の国々

ゼルマアニヤ（オランダ語では、ホーゴドチイとも、ドイツともいう。）

エウロバ地方の大国で、国都をビエンナ（ウィーン）という。この国の主を諸国が一緒に推戴して、インペラドール（皇帝 emperor）と称する。これに所属するホルトス（国王 Furst）が 7 人ある。（インペラドール、ホルトスのことは下に解説する。）

（シドッチの説明では、「7 人のホルトスというのは、たとえば 7 諸侯などというのに似ている」という。オランダ人の説では、その君をケイツル（Kaiser、カイゼル）と称して、ホルトスが 9 人いるという。どちらが正しいかは不明。）

ドイツは、産物が豊かで国も富み、兵馬もとても強い。しかし、兵を動かすのは容易でない。ホルトスが 1 人でも反対すれば、兵を動かすことは決して行わない故である。また国は北にあって寒くて、岩塩を産出しない。それで、塩の供給をオランダ人に依存しているという。

ブランデブルゴ（侯国）（フランデボルコともいう。この国、いまだ詳細不明。）：ゼルマアニヤの東北、ホタラーニヤの西北にある。

ホタラーニヤ：ゼルマニヤの東に、ポローニヤの北にある。

ポローニヤ（ポーランド）：ゼルマニヤの東にある。

サクソーニヤ（ザクセン）：ゼルマアユヤにごく近いという。その場所は詳細不明。

モスコービヤ（モスクワ大公国）（ムスコービヤ、今のロシア）：エウローパ東北の地にある。土地は極めて寒い。冬は氷が厚くはって、丈（3m）にもおよぶ。人馬共に、この氷の上を往来するという。

スウェイチヤ（スウェーデン）ヨーロッパ北地にあり、ノールウェギヤ（ノルウェー）の地に隣り合っている。

ここより細字

ノールウェギヤはヨーロッパの最北で、氷海に面している。ノールイギともいう。

(シドッチの説では、スウェイチヤの王妃がローマンに来て、天主に拝したのを見たという。その際の行列は大変に盛であったというから、この国も例のキリスト教を尊信するのだろう。)

ここまで細字

#### 強国オランダの歴史と海戦

オランダ：(明国の書に、和蘭という。また紅夷とも紅毛鬼ともいうと書いてあるものもあるが、「紅夷国は安南西北にあり、布を衣服の形に制らず、綿布を身に纏い、紅絹を頭にかぶる。この形は、回回(ウイウイ：ウイグル、トルコ系民族)に似ている。国に塩がないので、安南は塩を大量に供給して、その珍宝を買う」と三才図絵には記述している。この紅夷が、オランダ国の人を指すとは思えない。)

オランダはゼルマニヤの西北にある。初めゼルマニヤ人が、海上の小島に行って漁獵し、ついに土地を開いて、7州からなる国を建国し、当初はイスパニアに属していた。その後、イスパニアの徭役(課する労役)が苛酷なのに堪えられず、本国イスパニアと断絶した。イスパニアは兵を挙げて討とうとしたが、隣国が各々支援して、80年余りも戦い、オランダが逆にイスパニアの10州を侵略奪取した。支援した諸国もその支援に疲れ、両国を和儀させた。オランダは侵略した土地を返還して和睦した。

オランダ人は水戦が得意で、この点では無敵である。陸戦に関しては、水戦ほどではない。しかし、アフリカとアジア数州の地を侵略して、国はずでに富み兵も強く、今ではヨーロッパで一方の強国である。7州とは、オオブルイツスル・フリイスラント・オルラント・セーラント・グルーニング・ゲルトラント・ウイトラキトの7つである。

侵略奪取した海外の土地は、カアプトポネスベイ(ケープタウン、アフリカ南端)、ゴドロール、マロカ(マラッカ)、バタアビヤ(バタビア：スマトラ島の一部)、ノーワ・オランダヤ(オーストラリア)、セイラン(台湾)等がこれにあたるという。

(シドッチがこの国のことを説明したものを、下に記す。ただしオランダ人の説とは、必ずしも一致しない。オランダのことは、別の記述もあるので、ここでは略した。)

訳註：この頃のオランダは、北米・南米・アフリカ南端(現在の南アフリカ)・セイロン・インドネシア・台湾など、あちこちに植民地を有していた。上記の名が正確にどれに対応するのは不明な要素もある。南アフリカは、19世紀末に「ボーア戦争」でイギリスがオランダから奪取した。

私見だが、この国が始めて日本に交流したのは慶長5年(1600)である。ヨーロッパ地方の国で、昔から貢聘が絶えていないのは、この国一国だけである。

#### 海賊イギリスとローマ教会との断絶

アンゲルア(イギリス)、(アンゲリアともいう。イタリア語ではエンゲルタイラといい、オランダ人は、イングラントという。むかし我が国でインガラテイラとも、またゲレホロ

タンともいい、俗にはイギリスといったのがこれである。)

ヨーロッパ西北の海中に大きな島が二つある。その一つに、スコツテヤ（スコットランド：島の北部）とアンゲルア（イングランド：島の南部）がある。別の一嶋がイペリニヤ（アイルランド）国である。

アンゲルニアは海の中にあるので、舟の操作が巧みで、水戦に優れている。オランダ人が海外に通じる技術をマスターする際も、当初はイギリス国の人に教えを受けて、今のよう海路の使用に熟達したという。

ヨーロッパ諸国の商業船舶は、イギリスが水戦に巧みなのを畏れて、イギリス人のことを「海賊」と呼んでいる。こう呼ばれることをイギリス王は恥辱と考えて、イギリス国の人勝手に外洋に出ることを許さなかった。この国も、元来は天主を尊信してキリスト教（カソリック教）を奉っていた。ところが近年になって変化がおこった。

イギリス王が正妃を廃して寵妾を王妃とした。カソリック教は、そもそも他犯（姦通）は大罪として扱う。そこでローマ法王は、イギリス国王が破戒したという理由で、この国を破門した。この教を奉ずる他の国々も、またこれと関係を断絶した。オランダ人と断交したのも、この時のことだという。

訳註：ヘンリー8世が、王妃カザリンを廃してアン・ブリーンという女性を皇妃とし、これをきっかけにその後数代にわたって、ローマ法王との間にいざこざがあり、エリザベス1世の時代にローマ法王と関係を最終的に絶って英国国教が成立した。この点は、宗教だけでなく政治も絡んでいるようで、イギリスが「海賊」と扱われる要因の一つである。

并：へい、合わせる。並ぶ。

私見によると、日本では慶長5年（1600）に、この国は始めてオランダと一緒に、我国に交流を求めた。慶長18年（1613）の秋、はじめて貢聘した。次の年にまたやって来た。その後は来たかどうか明確でない。延宝元年（1673）5月に、日本人で漂流した人を送って来た。7月になって、そのまま国に帰った。

その他の国々：スコットランド、アイルランド、グリーンランド

スコッチヤ（オランダ語でスコットランドといい、またシコツテアともいう。）エウウロパ西北海にある。イングランドと共に、一島の地にわかれたつ。その国はイングランドの北にある。

イペリニヤ（アイルランド）、オランダ語で、イイルラントという。ヨーロッパ西北海にありて、イングランド・スコツテヤ等の国に近接している。

グルウンランデヤ（グリーンランド）（漢訳、前に提出）。

この国の最南部は、ヨーロッパの北海に入っており、北地は北アメリカにつながっている。ここは冬季の寒凍が極めて甚しく、人間は生きられない。オランダ人が海鯨を逐って、

この地に定住して捕るという。

(オランダ人の話によると、「むかし本国の人が知り合い同士で衣食と種々の器械・防寒具なども十分に備えて、この地に留まることにしました。翌年になって本国の人が行って見ると、滞在した人たちは、坐ったものは坐ったまま、立ったものは立ったままで、それぞれ死んでいて生きているものは一人もいませんでした。身体は乾脯(干し肉)のようで、腐爛してもいません。ひどく寒いので、こうなったのです」という話であった。)

訳註：グリーンランドは現在一応デンマーク領だが自治政府がおかれている。独立性を高めている背景には、地下資源をめぐるデンマークとの配分の問題もあるらしい。人口は6万人位。

### 君主の定め方

そもそもヨーロッパ地方の諸国では、君を立てるに際して、嗣子たるべきものがすでに定まっていれば議論は生じない。もし嗣子が定まらない場合は、臣民が嗣子とすべきものの名をしるして投票する。投票数の多数のものを君とする。君が臣に官を命ずるやり方も、基本的にこれと同じで、臣民が薦むるものの多い人を登用する。君が自分勝手には一人でも官吏を命ずることはできない。

(オランダ人の説によると、オランダ本国では君主をたてないという。たとえば、周の6卿のように、各々担当する官長をたてて治めさせる。国人がその官長を撰ぶやり方は、諸国はどこも君主をたてるやり方と同様である。またジョセフ(岡本三右衛門)の説明によると、ヨーロッパ地方はレネサやゼヌワのように、国全体として一人だけ撰んで、1年だけ国事を治めさせ、毎年毎にその人を交代させるという。レネサ、ゼヌワ等の国、いずれの所にありということは不詳。)

訳註：ゼヌワはジェノアだろうという見解で一致しているが、「レネサ」は不明。「ヴェニス」「ヴェネチア」が候補だが、発音が違いすぎるようだ。

この地方の諸国には、君長の位号が数段階ある。最高のものを、ホンテヘキス・マキシムス(Pontifex maximus)という。これ最第1無上等の意味で、ローマ教化之主(いわゆるローマ法王あるいは教皇)1人だけにこの号がつく。

諸国はキリスト教を信じるから、その号でその人を推称するようである。その次はインペラドール(これ、漢に帝というのに似ている。ゼルマニヤの君は、これにあたるという。)

その次は、レキス(rex)。(漢で王というのに似ている。フランスヤ・アンゲリア等の国君がこれだという。)

その次は、フレンス(prins)。(レキスに次ぐ号だという。その説をきくと、たとえば漢の大將軍に似ているか。オランダとイスパニアが互いに戦うときに、アンゲリアのレキスが自国の兵を引率して、オランダのフレンスとなって戦った例がある。)

その次は、ホルスト(前出)。(これはフレンスに次ぐレベルの号である。ゼルマアニヤに属す7国の主にこの号があるという。これまた、漢の將軍の号にあたるものだろうか。)

その次は、ドウクス (dux)。(これ、ホルストに次ぐレベルの号である。イタリアの場合、所在毎に兵をつかさどるものがあり、これをドウクスと称するという。部落の酋長にあたるだろう。)

これらに属する所、またその他にも位や号がある。全部数えるのはむずかしい。

(万国坤輿図を眺めてみると、ヨーロッパ州の諸国は、凡そ官位に3レベルある。最上は教化を興すことの主で、ローマ法王をいい、その次は俗事を判理するというのでインペラドール・レキス等がこれにあたり、最後は専ら軍事を治めるもので、フランス・ホルスト等のごときものをいう。地方によって名前は同一ではないようだ。)

ルテイルスの徒 (プロテスタント) : シドッチの「異端」

諸国のやり方は、基本的には同じだが、当然少しずつ異なっている点もある。ゼルマニヤ、スウェイチヤ、オランダ等の地方の人は、毛髪は黄で縮れて、瞳 (ひとみ) は白い。ムスコービヤ地方の人は、モゴル人に似ている。この人たちは、皆イエスの法を尊重する。ただし、オランダ人だけはルテイルスの徒といい、イエスと少し異なる。

(イエスは漢に耶蘇と訳す。日本で以前ゼスといったのもこれである。ルテイルスは、ヤソの法の異端だという。オランダ人の説によると、各国毎に冠制には異同がある。皆玉を使用して飾る。ただし、これは国主が即位の時に用いるだけである。通常は、誰も被髪を以て礼とする。被服に関しては、皆本国で同じである。モゴル人の場合でも、本国の制はさほど大きくは異ならない。この地方は北に位置して、気候は寒いことが多い。しかし土壌は肥沃で、庶物は豊饒である。もっともイタリアとイスパニア等の地方は稲がよく採れる。その他は、稲はなくて大小麦に宜いという。)

訳註 : ルーテル派は、ドイツのルター Martin Luther (1483-1546) が 1517 年に起こした運動で、「新教」とか「プロテスタント」と呼ぶ。「プロテスタント」は名前の通り、「抗議する人たち」を意味する。上記に「ルテイルスの徒」というのがこれで、オランダも新教でローマ教会の支配を受けない。他に、スイスでカルヴィンの起こした運動があり、実際にはこのほうの重要度が高いともいう。

カソリックは公式には離婚を認めない。妊娠中絶に反対しており、カソリックのナースが病院における妊娠中絶の活動への参加を拒否して、けっこう具合の悪いことがある。

#### ヨーロッパの言語 (方言)

ヨーロッパ諸国の言語は同一ではない。しかし、全体として三つに分けられる。第一は、ヘイベレイウス (Hebraeus : ヘブライ語)、第二はラテン (Latin : ラテン語)、第三はキリイキスまたはヘレツキス (ギリシャ語) ともいう。大事を記すには、以上三つのどれかを用いる。

ヘイベレイウスというのは、ユデオラの語である。(ユデオラとはラテン語の言い方で、

イタリア語ではユダヤという。これは昔の国の名で、その国は現在は滅びて存在せず、その国の人の子孫はヨーロッパ諸国に散在して、ヨード人（ユダヤ人）と称するという。）

ラテンというのは昔の国の名で、その場所は現在では明瞭ではない。キリイキスも同様で、やはり場所が不明である。ラテン語の場合、諸音が互いに通じないという所がない。したがって、どの国の人も必ずラテン語は学ぶことになっている。一方、諸国が用いる字体は二つある。一つはラテン文字で、二つ目はイタリア文字である。ラテン文字は漢字の楷書体にあたり、イタリア文字は漢字の草書体に似ている。

字母は僅か二十余字でありながら、すべての音をカバーできる。文は簡単で、意味は広く、巧妙なことに天下のすべての音を表現できる。

（シドッチの言うところでは、「漢の文字は1万余もあり、記憶力がよくなくては、暗記できません。それでもまだ声の種類があり、字では表現できません。だからこれほど多くても、全部を尽くしきらず、むだに頭脳を費やすのみ」だという。）

ラテン語を習ぶ学は、ガラアマテイカ（grammatica 文法）というのは梵に悉曇（しったん、梵字の声音を学ぶ学問）があるのと同じである。レトリーカ（rhetorica 修辞学）というは、文章法のようなものである。（その語をつらねて、言語を記するの学である。）

このほかに、天文・地理・砲撃・医術・技芸の小さい面に至る迄、すべての領域で学が発達しているという。

#### アフリカ諸国：トルコを中心に

トルカ（イタリア語にトルコといい、他邦ではツルコという。）

この国は領土がとても広く、アフリカ・ヨーロッパ・アジアの地方に広がっている。国都は、古のコウスタンチイの地（後のビザンチウム、現在のイスタンブール）、昔、ローマ皇帝が都を移した所だという。（コウスタンチイ、またコンスタンチヤともいう。アフリカの地、バルバアリアの北、マーレ・ニゲーテラーニウム（地中海）に近い所にある。）

その風俗はタルターリヤ（すなわち韃靼国）にひとしく、勇敢な点では他に敵がない。兵員も数多く、1日で20万を動員できる。さらに日が経過すれば、その数はもっと増えて想像できない。ヨーロッパ地方は、トルコの侵略に堪えられないので、各国が相援じて対抗手段で備えるという。

私見だが、シドッチの説では、トルコはアフリカ地方すべてを領有し、東北はゼルマニヤに達し、東南はスマアタラまで届いているという。また、ジヨセフの説では、このトルコ国はポルトガルと隣りあっているという。また、オランダ人にこの国のことを質問すると、トルコの地は東北タルターリヤに相聯るといい、これがその種類だという。

そうすると、トルコの地は、西北はポルトガルの地に相接し、東北はムスコビーヤの東に到達していることになる。（ムスコビーヤはゼルマニアの東北にあり、ヨーロッパから最も遠く、タルターリヤに近い。）

ただし、トルコが東南海を越えて、スマアタラに至るまで、その国に属するという話

は納得できない。

ともあれ、その大国たることはたしかである。万国坤輿図等の諸説、この国のことは説明していない。漢訳がいっこうに詳細でない点も納得できない。

(私見だが、万国坤輿図には、アフリカ州に大耳瓦国という国があって、馬ル馬利加(マルマアリケヤ)の地に近いという。この大耳瓦というのが、「タイルク」という読みで、あるいはトルコの音が転じて訛ったものかも知れない。また都尔(トルまたはヅル)の字を注して、その下の字が漫滅している所もある。印刷の善い本を入手して、考うべきことかも知れない。)

訳註：本書にもあるが、中国の一部の他、現在のマレーシア・インドネシア・ミンダナオ島などが回教圏である。回教がどのようにして広がったのか、訳者には知識がないが、西洋諸国の進出した15世紀よりもずっと前の10~12世紀ころに広がっていったようだ。

#### 他のアフリカ各地

カアプトポネスベイ(ケープタウン)(イタリア語でカアポテポネイス・フランサと言ひ、オランダ語に、カアポテホース・フランスとも、カアプともいう。漢訳未詳。その地は、漢に大浪山角と記している所である。

私見だが、万国坤輿図の仙勞冷祖島の地に、曷叭布刺(カバブラ)というところがある。カアプの音が転じて訛って、仙勞冷祖島の地名としたものに似ている。)

アフリカの最南端の地にある。虎・豹・獅子・禽獣の類が非常に多い。最近オランダ人がこの地を併合したという。

(オランダ人の説明では、この地を併合したのではない。ここは、船が東の南洋に行く時には必ず通過する場所で、その海の口に船をとどめる場所を常設したのだという。)

マタカスカ(マダガスカル、漢語で麻打曷失曷と訳し、また仙勞冷祖嶋と載っているのがこれで、西洋語ではサンロレンソがこれである)アフリカ東南の海にある大きな島である。

私見では、万国坤輿図にはアフリカの地には、国が700ほどあると注を加え、一部の名山や大川など、その大略をしるしている。

シドッチやオランダ人の説明をきいても、その土俗・人物等、詳細は不明である。推測すると、この場所はトルコの地に関係するので、ヨーロッパ人で実際に到達したものが少なく、それで詳しくわからないのだろうか。ただ上記のカアプ、マタカスカなどの地は、オランダ人の説明によると、「住民たちは鳥や獣にひとしい」という。

(オランダ人がマタカスカに上陸して、土地の産物をとっても、土人は恐れ避けて近づかない。オランダ人が食物の残りを棄てると、ひそかに来てぬすみ食う。そのバカな振る舞いはこの程度だという。)

アジア諸国：ペルシャ

良馬の産地ペルシャ

ハルシャ（ペルシャ）（漢に巴尔齐亜と訳す。日本ではハルシャという。）

インデヤの西、アフリカ地方の東につらなる場所で、モゴル（蒙古）の属国だという。考えてみると、この国にはいろいろな名産品が多い。オランダ人の話では、「世界で良馬を産する地は日本とハルシャだけで、この点に関して世界の他の地は到底およばない」という。

日本の慶長年間に、暹羅（すいやむ、シャム）、柬埔寨（かんぼさい、カンボジャ）等の国が日本に貢物をもってきて、是非馬を頂かせて欲しいと懇願してきたという事件があった。したがって、オランダ人のいう所は満更誣（デタラメ、つくりごと）ではないようだ。

#### 大国ムガール

モゴル（蒙古、漢で莫臥尔（もをる）または莫臥児と訳す。日本ではモウルというのがこれである。「ムガール」と呼ぶのも同じ国を指す。）

昔の印度は国土が広く人口も多く、財物も豊かな大国であった。しかし、いろいろな国と隣接して、戦争の絶え間がない。ベンガラ（ベンガル）・サラアタ・インドスタント（ヒンドスタン）等は、その属国である。コスト・ゴルモンテールというのは、その海港の名で、ヨーロッパの船が多数停泊する港の地であるという。（ベンガラは下に説明。サラアタは漢訳未詳。人によっては、錫蘭山がこれだというが、納得できない。インドスタントは漢では、応土私当あるいは印度斯当と訳す。コスト・ゴルモンテールのコストは、海辺という意味である。以下は地名で、漢訳未詳。）

さて私見であるが、シドッチの説によると、「宗教の大本は天下に三つあります。第一はキリステヤン (christian) (イエスの法、キリスト教)、第二はヘイデン (heiden、異教徒、多神教徒) (またこれをゼンテイラ (genntile) ともいう。)、第三はマアゴメタン (回教徒、モハメット教、イスラム教) です。マアゴメタンは、モゴルの教で、アフリカ地方やトルコもその教を尊信しています」という。思うに、漢語で回回教 (フイフイ教) というものが、おそらく同じだろう。

(或人の説ではに、回回すなわちモウルだというが、これは納得できない。万国坤輿図を検討すると、莫臥児 (もうる) と回回は、互いに遠く離れており、オランダ鏤板の図には、回回というものが明確にはなっていない。)

訳註：ヘイデンというのがよくわからないが、仏教がこれに入るのだろうか。

訳註：莫臥児はムガールとも蒙古ともいう。回回はウイグルを指すこともある。そうするとひどく離れているわけでもない。

#### ベンガラ（オランダの語はベンカーラという。ベンガル）

古の東印度の地である。その地は、いろいろな色の織物や薬物等を産出するという。（現在オランダ人が持参して売る織物に、この国の名がついている物がある。これは産地の名である。）



## インドと印度

インデヤ（漢に訳して応帝亜という。）

西インドの地である。

（私見では、古の印度とは、天竺全体を5つにわけてその全体の総称だった。今のインデヤは、古でいえば西天竺の地方にあたる。）

ゴアはインドの西海岸にあって、西洋の船舶が多数停泊する場所である。ポルトガル人がこの地を基礎に、貿易を管理している。（ゴアは、漢語で臥亜と訳す。日本ではゴワという。）

マルバル、チャウル、サントメイなど皆ここに属する地名で、風習はモゴルに似ているという。（マルバルはマラバアルともいい、ゴアの南にある。チャウル、サントメイ等の地、各種色の織物を産出する。最近では、織物は産地の地名がつくようになったが、当初はこの付近が産地だった。チャウルとサントメイの漢訳は未詳）

私見では、ポルトガル人は当初ゴアの地を本拠にして、ついに広東海港の地を借り、そこに母国の人を住まわせて、海や船舶の管理をさせている。日本では慶長元和の頃（1596～1623）、西域国総兵巡海務事と称し、或は西域国奉行天川港知府事と称して、毎年朝貢した五和（ゴア）天川（アマカワ）の人がいたが、ポルトガル人がこの地にいたわけだろう。

（五和はゴアのこと。天川は阿嗎港である。マカオというのは、広東の海口にある地名である。）

## セイロン：釈迦入滅の地

セイラン（セイロンともサイロンともいう。漢訳で錫狼島・錫蘭国・齊狼などと書く。）

インデヤの南の海の島である。海に近い山麓に、仏足の跡が現存する。仏涅槃（釈迦入滅）の地もここだという。風俗はモゴルと同じで、眞珠・宝石・肉桂・枇杷・椰子等を産するという。（訳註：現在のスリランカであることは言うまでもない。）

## クロンボの由来とコロンボの関係

私見では、この国の南部にコロンボ（コロンボ）という場所がある。この人は色が黒い。漢でいう崑崙奴がこれである。オランダ人の説では、赤道に近い土地の人は全員色が黒くて、あまり賢くないという。クロンボはコロンボの音の訛りで、色の黒い人をいう。

（黒色をクロシという。しかし、最近人の色が黒いのをクロンボというのは、元来は西洋の言葉に由来する。）

## シャムと暹羅：金葉の書（金札）

スイヤム（シャムとかシヤムローともいう。漢に暹羅と訳するのがこれである。現在のタイ）

むかし、暹（せん）と羅斛（らくく）の二国があった。元王朝の至正の頃（1335-1340）、羅斛人が暹を合せて一国にした。

スイヤムあるいはシャムは、暹の西洋語発音である。ここは南方であり、気候は暑く、冬になると夜だけは少し涼しい。この土地の人は頭髪が螺髻（らけい：ほら貝型のもとり）で、裸体で暮らし、糸帨（しぜい：手拭）を腰に巻いている。産物としては、薬物と

皮角の類である。

私見では、日本の慶長年間にこの国が初めて日本と交流した。元和・寛永の間(1615-1643)、その王が頻りに金葉の書(日本で金札と呼ぶもの)を奉って聘問した。今はその商船が来るだけだが、それでも毎年絶えず来ている。

(慶長の初めに、日本からこの地に行つて、最終的に王の臣下となつた人がいる。この人が日本の執政(老中 土井利勝)に書面を送っている。その人たちの子孫が、現在もその国にいるという。)

附

占城(チャンパという。西洋名は現時点では未詳)・カンボサイ(柬埔寨、カンボジャ)双方とも同じで、日本ではカボチャとかカンボジャという。西洋名未詳。)

占城と柬埔寨の二国は、いずれも暹羅の東にある。

大泥、(日本タニという。西洋名不詳。)シャムの南にある。

これらの国々は、慶長の初めに我国に通じた。ただし占城は王からの聘はない。柬埔寨(カンボサイ)の毎年の挨拶は、寛永の始めまで続いた。現在では商船が来ているだけである。

(これらの国は、シドッチは通っていないので彼の話は聞いていない。昔日本に通じた所なので附記する。)

訳註：占城(チャンパ)は、現在は相当する国がないが、ベトナムの一部か。

柬埔寨は現在のカンボジャに相当する。

大泥(日本タニ)：現在のマレーシア北部とタイ南部に存在した国だという。

マラッカ海峡

マロカ(マラカ、またはマテヤという。暹羅に隸して、いまだ国と称せずという。)

スイヤム西南の方、海にのぞめる地にある。ここは以前はポルトガル人が拠り、今はオランダ人に帰属するという。

訳註：マラッカは通常は海峡の名として認識されるが、海峡に面して「マラッカ」という地名がある。交通の要所だから、ポルトガル→オランダ→イギリスと転じたのだろう。

私見だが、慶長十七年(1612)2月にオランダ人が上奉した書に、当時カステイリア人とマロカで戦つたことを載せている。つまり、この場所は本来カステイリア人が管理していたのを、オランダ人が戦いとつたものだろう。カステイリアはカステイラともいい、ポルトガルの同盟国である。

スマトラ：灼熱の地

スマアタラ(ソモンタラともいう。漢語に、須門那・蘇木都刺と訳している。現在のスマトラ島。)

アジア地方、南海の中にある。東北の海を隔て、対岸はマロカである。この国はまさに赤道直下にあり、春分と秋分には日影ができない。春分より秋分までは日影は南にあり、秋分より春分には日影は北側にある。気候は極めて暑く、ただ夏冬には熱が少し楽になる。人は皆裸体で色黒く、風俗は暹羅に似ている。ここでは黄金がとれるので、オランダ人が採取している。

#### ジャガタラ（ジャワ）

スマアタラの東南海中にある。この国全体をジャワという。ジャガタラはオランダ人の根拠地で、その治城はバタアビヤ（バタビヤ、現在のジャカルタ）にある。

スマトラから、南に14、5日程移動するとジャワに着く。国主が都とする所である。その主をススーナムと称する。風俗は、髪をかぶり、薄い布に、糊を強くして、頭の頂きに纏い、袖のせまい衣を着け、短い袴を着ける。暖かくて、穀物は一年に二度獲れる。生活物資も豊かである。したがって、この土地の人は飢と寒さを知らず、とても怠惰である。

ジャガタラは、以前はポルトガル人が占拠していて、90年前にオランダ人がポルトガルから戦いとった。（元和9年（1623）癸亥の年。）

現在オランダが統治しているが、漢人が来て住むもの（華僑）が3～4万人いるという。

私見では、慶長の頃にオランダ人がバンタンに往来の話が日本にも聞えていた。バンタンはジャワの地名で、漢に板淡と訳している。現在、毎年ここに来るジャガタラ人とは、この国の人ではなくて、漢人でそこに住む華僑である。

訳註：バンタンは現在では「バンドン」と表記する土地らしい。

#### ボルネオ島：水晶と香料

ボルネオ（ボルネヨ、またはボルーネル。）

スマアタラの東、ジャワの東北にある海嶋である。風俗はスマアタラと同じ。この地では水晶と竜腦（香料）等を産すという。

訳註：現在、ボルネオ島ともカリマンタン島ともいう。一部はブルネイとして独立国で、残りはマレーシアの一部で「東マレーシア」とも呼んでいる。

マガザアル（マカッサル、漢訳不詳、これセレベスの南地の名である。セレベスは漢に訳して食力百私という。）

ボルネオ東南海中にある。風俗はスマアタラに同じ。黄金・檀木等を産すという。

訳註：セレベス島はスラウェシ島とも書く。ボルネオ島の東南のやはり大きな島。インドネシア所属。

メンダナオ (Mindanao、ミンダナオ島)。 マカサアルの東海中にある。

付近には海島の数が多いし。これもシドッチの説明ではない。あまり詳細にはわからないので詳しくはしるさない。

訳註：ミンダナオ島はフィリピンの一部だが、宗教的に回教が強く、その故もあって中央政府との対立が激しく独立運動も起こっている。

ロクソン (ロソンともいう。漢に呂栄と訳す。日本ではルソンという。オランダ人、またルコーニヤともいう。現在のルソン島でフィリピンの中心の島である)

チイナのカンタンの南の海にある。(チイナは支那のこと。カンタンは広東。)

その国の南土をマテヤといひ、またマネラともいう。(つまりマニラ。)

(マネラ、我が俗、マンエイラという。)

昔は君主がいたが、近世以来イスパニア人が併合して、総督に国を治めさせている。その西南の地に銀山があり、イスパニア人が採掘させている。中国人が来て 12 万人ほどで採掘を担当している。

#### 日本の東南海に金銀の島

ヤアパンニヤ東南海中に、金銀を産する島がある。(ヤアパンニヤは日本である。東南海中の島名、未詳)。

ヤアパンジス (すなわち日本人) の子孫でルソンの国に住むものが、すでに 3 千余人おり、集って聚落を造っている。この人たちは、本国の風俗を変えない。武士出身者は双刀を腰にし、家を出る時は槍をもって出る。武士でないものの少なくとも一刀はつける。イスパニア人はこれを制限する法をつくって、勝手に国内を出歩くことをゆるしていない。

4 年前、日本人 12 人が漂流してこの地に到達した。イスパニア人が彼らを日本人集落に住ませた。

訳註：「金銀産する島」云々。西洋人を中心に、この話が広く行き渡っていたらしい。マルコポーロの「黄金の国ジパング」などの影響で、「日本自体でなくて、近海に別の島が………」という推測になったという。

#### 台湾：オランダ支配を鄭成功が覆す

ルソンの国の北にフルモーザ (台湾) がある。(タカサゴともいう。今の台湾)。ここは以前オランダ人が根拠としていたが、今は支那に所属する。

訳註：1650 年頃、鄭成功がオランダを追放して独立させた。鄭成功は日本人の血をうけており、生まれも日本なので、それに関連して例えば国姓爺合戦など書かれている。明が清に滅ぼされるのが 1644 年で、鄭成功はその明の残党をひきいて台湾に侵攻したらしい。この関係は、蒋介石が毛沢東に追われて台湾に中華民国を移したのと似ている。

西洋の植民地になりながら、17 世紀初頭に独立を奪い返した珍しい例だが、台湾本来の

人たちからみると、支配者がオランダから明の残党に入れ替わっただけか。

慶長年間に、呂宋国がしきりに我国に連絡していた。これはイスパニア人がここにおいて、その使いがやってきたのである。

誰がオーストラリアを発見したか

ノーワ・オオランダヤ：海南にある。この地は極めて広い。今はオランダ人が併合しており、それでノーワオオランダヤ（新オランダ）と名づけるという。

この地のことをオランダ人に訊いてみると、「この地はジャガタラから 400 里ばかり南にあり（これ我が国の里数でいう。）、オランダ本国の人がはじめてここをみつけて足を踏み入れました。この土地は極端に広く、住民は鳥や獣のように生活し、言語は通じません。地気は暑く、ここに行ったものは病気で死ぬが、生き残るものはわずかで帰れる人はごく少数です。新オランダと名付けたのは、この地を併合した意味ではなく、ただみつけたというだけです」という。

（この関係では、詳細な事柄は、オランダのことを記述したものに載っている。）

註：ノーワ・オオランダヤは、オーストラリアのことである。ジャワ島から 400 里（2000 キロ）南という、オーストラリア南部に悠に達する距離である。

オーストラリアの南東にあるタスマニア島は、1642 年にオランダ人タスマン (A J Tasman) が発見したことが明白である。

オーストラリア本土は、15 世紀に中国の人たちが訪れた記録があり、16 世紀にポルトガル人も訪れ、ついで 17 世紀にオランダ人が発見して一応領有を宣言していたものの、いずれも有用な用途がなく、支配権を確立しなかった。18 世紀になってイギリスの海賊が再発見し、フランスと激戦の末にイギリスの植民地とした。[諏訪邦夫]

シドッチが日本に着くまで

私見では、シドッチの言葉でチイナとは支那を指し、タルターリヤは韃靼を指す。ヤアパンニヤは日本である。これ等の地方のことは、彼が通過したか経験した所ではないので、かれの説に特に傾聴すべきことはない。

万国坤輿図をみると、韃靼の東方で海に至るまでの地を描いて、狗国（くこく）、室韋（しい）、野作（えそ）等の図がこの地にありとしている。

註：狗国（くこく）は不明だが、3 世紀頃に狗奴国（くぬこく）という国が耶麻台国の南にあったとされる。「熊襲」というのがこれか？

室韋（しい）は、中国東北部にいた民族を指すという。

野作（えそ、蝦夷）は北海道である。

ここの記述をみると、当時は北海道が大陸とつながっていたかもしれないと西洋の人は認識していたことがわかる。日本人はそうは考えていなかったろう。

樺太が半島と考えられて、間宮林蔵がはじめて島と確認して「間宮海峡」と名づけたのは

1809年だからずっと後である。(諏訪邦夫)

オランダ鑛板の図をつかって、オランダ人の説をきくと、エソ（エゾ、漢に訳して野作という、我が国では蝦夷という。北海道のこと。）の北側はタルターリヤにつながっているか否か、現時点では明確でない。本国鑛板の国には、エソ東南海口の地だけを図に描いて、海口に行って、日本でいう所のマスに似た魚を多く食ったことを注釈しているという。

（マスに似た魚とは、鮭だろう。）

#### 北回り航路の可能性

またオランダ人に以下の質問をした。オランダ地方よりここに来るのに、北海から西に向かい、アフリカの西を経て、カアプ地方（喜望峰）まで行き、東に折れ、アジア南海を過て、ジャガタラに至り、ここからまた北に向かって、スマアタラ、ボルネオ等の諸島を過ぎ、東北の方の日本に至る。その行程をはかると、凡そ1万2千9百里に及ぶという。（これも我が国の里数による。この計算では、5万キロということになる。）

オランダ地方より、北に向かって東に転じ、北海を經過して東進し、（北海はすなわちタルターリヤマーリヤというもの、韃靼海のことをさしている。）南に転じて日本に来れば、行程は3,4千里に過ぎない。何故この経路をとらないかと問うたところ、その人のいわく、「誠にもっともな質問です。今から3年前に、イングランド（イギリス人）のウエールム・ダンペイル（William Dampier）という人がいて、本人がみずから北海を越えて、東洋に到達したと述べています。でも、私たちオランダの人の意見では、これは疑わしいと考えます。これだけ北に行くと日光が照らず、海は常に暗く、潮は急です。彼のいう所は到底信じられません」という。当人はその批判に憤って、本に書くから皆で実行しようと述べている。

もしこの書ができて、彼の言う通りなら、オランダとしても大変にありがたく、幸いなことだと述べた。（正徳2年壬辰（1712）のことである。）その後また同じことを質問したところ、例の人は去年死んでしまい、本は結局できないままだという。（正徳4年甲午（1714）のことである。）

これらの説にみると、万国坤輿図にのっているからといって、全部信頼するわけにいかない。

註：北廻りでヨーロッパと日本を結ぶ航路の可能性は、すでに徳川家康が三浦按針（ウィリアム・アダムス）に尋ねているという。白石のこの議論も面白い。しかし、当時の船は帆船である。現在の技術でさえも、北廻りの航路は利用困難で、商業的には確立していない。ベーリング海峡が発見されて、現在のロシアと北アメリカがつながっていないと確認されたのは1648年というが、明確に認識されたのはベーリングの探検による1728年で、西洋紀聞が書かれた時より少し後である。（諏訪邦夫）

### 北アメリカ諸国：メキシコと新フランス

新イスパニア（我が国で、俗にノオバイスパニア、またはノベスパンヤというのがこれである。）

北アメリカの南方にある。ここを過ぎて南下すると、南アメリカの地になる。イスパニア人がここを併合して、新たに国を開いている。その海口でアカプルコという地は西洋の船舶が多数行き通りし、人も多く富も豊かな土地だという。

訳註：アカプルコはメキシコ太平洋岸の土地で、スペイン支配以前から大きな港町だった。現在も世界有数の歓楽地・保養地である。

私見では、慶長十五年（1610）、この国の船舶が逆風に流されて、我国に漂流して来た。その船を修復して帰国させた。慶長17年（1612）夏、その国が入聘して、恩を謝した。この年、我国の商船もそこまで行った。今は連絡が絶たれている。

ノーワ・フランスヤ、（新フランス、漢に訳して新払郎察という。）北アメリカ東北の地にあり、大変に広い。これもフランス人が併合して、新たに国を開いた所だという。

私見では、この地は極端にひろく、風俗は木石と共に居り、鳥獣と暮らす生活である。ヨーロッパ地方の国々、その地を併せて、新たに国を開いた例が多い。

新イスパニア、新フランスの外に、ノーワカラナタ（カラナタは漢訳不詳、本国はヨーロッパ地方、イスパニアの南、地中海の上にあるという。）

ノーワ・アンダルシア、(Nova Andalcia)（アンダルシア、本国はヨーロッパ地方、カラナタの西にある）のような例がすべて当てはまる。

オランダ人の説に、アメリカの地、六七月の頃、麦が収穫できるという。しかし、各国の風土物産等は、いまのところ詳細にはなっていない。

### 南アメリカ諸国とブラジル

バラシリヤ（ブラジル）、（パラシリヤともいう。漢に伯西兕と訳す。）

南アメリカ東方の地である。ここは広いが荒れており、東南北の方はすべて海に面している。本来の民族の生活は木に棲み、穴に居て、好んで人を食っていたのという。その北側の海にセントヘンセントという小島があり、タバコを産出する。（烟草と書く。）

考えてみると、幕府にヨーロッパのクラント（記録）がある。オランダ人は、この国の人と戦って勝ったことを記して報告している。その注記によると、キリスト教はこの地方でも行われている。

（クラントは、ヨーロッパのやり方で、何でもことにあたる時は、そのことを図に示して鏤板にして、世に行うものである。）

本文の附：パタゴニアは巨人国？

万国坤輿図に拠ると、南アメリカに巴大温（ぱくうん、はだいうん、パタゴラス、パタゴニア）という土地があり、ここは特別の長人国（巨人国）だと言っている。オランダ人にこの件を問うと、こんな話をした。むかしオランダ本国の人が、この地方の南の海を通り、このパタゴラスの地に来て、人を小舟に乗せて河口から遡ってこの土地を探検させた。なかなか戻らないので、海岸にのぼって遠くを眺めると、この場所はだたっぴろくで荒れて見るべき場所もなく、ただ砂浜の大きな家の中に、火をたいた跡があった。付近に人の足跡があるが、ふつうの人の足を二つ合せたほど大きく、両足の間もそれに合致して広がった。そこで、この地の人は特別に背が高いと推論した。始め派遣した人はついにそのまま帰還せず、一方土地の人をはっきり見たこともなかったという。これがパタゴラスで、漢語で巴大温と訳しているという。

訳註：巴大温の話は、日本でも他にいろいろな「お話」に書かれている。

例：橋南谿『東遊記』巻之五「大骨」（1786）や大江文坡：『勸善桜姫伝』（1765 以降）など。いずれも、この西洋紀聞の記述が原本になっているとも解釈できる。

万国坤輿図に、「この土地を孛露国（べつるう）と名付け、香料を産する。この香料はバル娑摩（ぱるさも）と呼び、成長の初めに刀で切れ目を入れて油を抽出する。これを分けて屍に塗ると永久保存できる」と書いてある。西洋地方でも産出するバルサモというのが、この樹油である。オランダ人に、この物質を産する地を問うと、ペールイヒヤノムという。漢語で孛露（へつるう、ペルー）と訳している所で、バル娑摩はバルサモである。

#### 附 イスパニア継承戦争の経緯

当時ヨーロッパ地方は、ことごとく戦国となったが、その事情は下のようである。

初めイスパニアの君、名はイノセンチウス・トーデーシムスに、嗣子にすべき子がいなかった。国人は、ゼルマアニヤの君の第二子、カアロルス・テルチウスに嗣いで貰うのが適切と考えた。ゼルマアニヤはこの地方の大国で、しかもその王の子はイスパニアの君の外姪だったからである。（イノセンチウスはイスパニア王の名で、トーデーシムスは12世という意味。その国の大祖から12代にあたる王をこう称するのが、この地のやり方である。カアロルスはゼルマアニヤの君の子の名で、テルチウスは第二子というようなもの。）

10年前（元禄13年庚辰：1700）になって、イスパニア王が死に際して、嗣子が未定なので、親戚群臣を相手に遺令として一封の書を書き、「自分が死んだらこの書を捧げて法王の天主の像の前でひらくこと、嗣子のことはこれに書いてある」と述べた。国人はこの書を捧げてローマへ行き法王と天主像の前で開いて見ると、フランス王の孫で、ピリイブス・クイントスという名のを嗣子としろと記してあった。

（クイントスは、第5子という意味。フランス王の嗣子の第5番目の子の意味。）

予想外の指示に皆驚いて、言葉も出ない。しかし君主の命令だから、従わないわけにもいかない。フランス王の孫を迎えてイスパニア国王とし、冠を授けた。

（世を継て、位につく時に、先世より相伝えてきた冠をかぶることが、ヨーロッパ地方の礼法だという。）



ゼルマアニア皇帝はこれに納得せず、自分の第2子をイスパニア国王にしようとした。ローマのホンテヘキスマキス・トーデーシムス（当時のローマ法王。ホンテヘキスマキスとは、最第一無上等という意味。つまり教化之主の号である。トーデーシムスは、祖より第12世の意味。）が、ゼルマアニアとフランスの王を説得して和平を試みたが、ゼルマアニア皇帝は応じず、ついにレオポルースを将軍として（レオポルースは、その将軍の名）水軍4万の兵を送って、自分の子をイスパニア王にしようとした。その国のホルトスは全員が兵を発して、これにしたがった。（ホルトスは、その属国の君号である。）

一方、イスパニア側も兵3万を起し、さらにフランス主も援兵4万を出動させ、合計水軍7万でゼルマアニアとその連合軍を防ごうとした。今度はオランダとイギリスが、ゼルマアニアの援軍として出兵した。イスパニアとフランス側の同盟国もそれぞれ出兵し、陸戦と水戦が続いた。しかい6年前には、ゼルマアニア皇帝が死に（本朝、宝永元年甲申（1704））、5年前にはポルトガル王も死んだ。（ポルトガルはイスパニアの同盟国である。）

水陸の兵の戦死者は、両軍で18万人を超えた。さらにポローニヤ（ポーランド）王も死亡し、ブランデブルコ・リトアニア・ゼルマアニアの三国が今度はポローニヤの領土をあらそい、ポローニヤ兵の戦死者が7千人、ゼルマアニア兵の戦死者も2千人に及んだ。（この戦の詳細は不明。リトアニアもまた詳細不明。）

一方、ムスコービヤ（モスコー大侯国）とサクソーニヤ（ザクセン）が同盟してスウェイチヤ（スウェーデン）と戦い、一方ムスコービヤはトルコとも戦った。こうして約10年間、諸国入り乱れて戦い、この地方の人は安全に暮らせなかった。シドッチがここに来ようとした当初の宝永4年（1707）、フランスを出帆してカナリヤ諸島に行こうと船に乗ったが、イギリスとオランダの兵馬20万、戦艦180隻がチビリタイラの海（ジブラルタル海峡）をふさいで、通行不能だった。

ゼルマアニア人を説得して何とか通してもらった。（カナリアは島の名。ヨーロッパの西の海にあってフランスに所属。チビリタイラは、ポルトガルとトルコの間の海峡である。）

訳註：ジブラルタル海峡はもちろん地中海から大西洋への出口だから、ここを塞がれると外洋に出られない。

（続：ここまでの話は、庚辰より丁亥に至る（1699-1707）約10年間のことで、それより後のことは、オランダ人の話を以下にする。）

#### イスパニア継承戦争の終焉

己丑年（1709）4月 オランダがフランス・イスパニア等の連合軍と戦い、1万余人を斬って、フランスの地のレイセル、ハルゲ、タウルネキの三城を占領した。オランダ側の戦死者も1万を超えた。

庚寅年（1710）4月オランダはイスパニアと戦い、相手の兵士5千人余を斬り、3千人を捕虜にした。同年6月、オランダがフランスに攻め込んで、1万3千人を斬り、4千人を

捕虜にした。オランダ人も戦死者1万1千人余を出したが、ついにドーワイ・ベトーネ・センタマン・センスの4つの城を占領した。

翌年の辛卯年(1711)7月、オランダはフランスに攻込んで、その国都バレイス(パリ)から40里のプレコムの地を取り、ゼルマアニア人と協力してイスパニア人と戦った。

同年8月、トルコとタルターリヤの兵がムスコービヤと戦って、先にムスコービヤに侵略されて失っていたトルコの土地を回復した。

同年秋、スウェーデンとデイヌマルカ(デンマーク)との戦いが起った。少し前に、両国が土地を争ったがデイヌマルカ側が負けて、ここかしこの地を失っていた。今回はオランダがデイヌマルカを支援し、ついに両国を説得して平定させた。この年、デイヌマルカは失った土地を回復しようと出兵した。壬辰年(本朝正徳2年(1712))の春、イギリスとオランダが、トルコとムスコービヤを説いて、戦争を終わらせた。

4月には、オランダがゼルマアニアと共に、イスパニア・フランスと戦った。その軍、おのおの10万人、敵を斬ること凡そ1万余。オランダとゼルマアニアの戦死者は9570人。両軍とも軍を引いて退却した。

7月にはオランダがフランスの地、クイノを攻め取り、ついにマルセネ(Martinet)の地に侵入した。フランスもよく抵抗して、オランダは勝ちきれず、軍を引いて帰還した。

こうして、ゼルマアニアとフランスの反目で戦端が開かれて以来、同盟国各々の兵は戦いにつかれ、両国は話し合って兵を引こうとした。しかし、お互いに異議があつて従わなかった。しかし、癸巳年年(本朝、正徳3年(1713))9月になって、両国間についに和議が成立し、各々侵略した土地と捕虜にした兵士を返還した。

計算してみると、ゼルマアニアとフランスの戦が始ったのは、元禄13年度庚辰(1700)で、14年間戦争して、ようやく和議が成立した。本朝正徳三年癸巳(1713)のことである。

訳註：

中巻最後のイスパニア継承戦争の記述を最初に読んだ時は、「不当に詳細」という印象を受けた。しかし、読み直してみても意見が変わった。白石はおそらく意図的に詳細に記述したのだろう。

シドッチは、キリスト教が立派で有用なことを主張して、ヨーロッパ文明の優位性などを示して、白石や周囲を説得しようと試みたわけだが、「そういうキリスト教徒が集まっているヨーロッパ諸国がこんな戦乱を延々と続けて、国民を苦しめている」と白石は述べたかったと解釈する。

表 イスパニア王位継承戦争の年譜(本書の記載を表にしたもの)

1700 イスパニア王が遺言で、  
フランス王の孫に継承を述べる  
ゼルマアニア皇帝が納得せず、  
法王の仲介失敗

- ゼルマアニヤ皇帝、兵をおこす。  
 イスパニア・フランスが連合軍で対抗  
 兵力7万  
 オランダとイギリスがゼルマニア側の援軍に
- 1704 ゼルマアニヤ皇帝死亡  
 ポルトガル王死亡  
 戦死者両軍で18万  
 ポーランド王死亡  
 ブランデブルコ・リトアニア・ゼルマアニヤの三国が  
 ポーランド領を狙って侵入  
 ムスコービヤとサクソーニヤがスウェイチヤと戦う  
 ムスコービヤはトルコとも戦う
- 1707 シドッチの経験、ジブラルタル海峡封鎖
- 1709 オランダ、フランスの3城を占領
- 1710 オランダ、フランスの4城を占領
- 1711 オランダ、パリに迫る  
 トルコとタルターリヤが失地回復  
 デンマーク、スウェーデンから失地回復
- 1713 和議成立、継承戦争終わる

中巻註（原本に頭記したもの。）

36 頁ポルトガルの上に、（国都名リスボン又リスボン。）

39 頁ゼルマニアの上に、（国都名ウエンネナ。）

40 頁ホタラーニヤの上に、（和蘭、ボウル）

41 頁イングランドの上に、（慶長18年癸丑（1615）8月4日、イングランド国使来る。その書は西洋文字で、通事が訳した。おおぶりたんや国、ふらんす国、をらんだ国、三国の帝王に11年以來なり候云々。その名の所に、大ぶりたんや国王、居城はおしめしきせめし、帝王れいきく。また訳に云う。いがらたいら又はげれぷろたんとも申候。いずれも国は一つで、名はニツ有る。即いぎりすへの返書つかはさる云々。9月1日こと也。）

一校者（文彦）云、この上の文は原書中巻の首に付紙となりてあったが、今回書き込んでここに入れた。

44 頁 披髪の上に（校者云、扱髪は披髪の誤ならむ。）

45 頁トルコの上に、（万国全図、都鬼瓦、或此）

55 頁カラナナタの上に、（イスパニア・ポルトガルの西南にある。）一校者（文彦）云、この文はここの注の、カラナナタの西に云々という所へ旁書してあったのを上に移したものの。

57 頁ブランデブルコの上に、（漢訳、肥良的亜、礼勿泥亜）一校者（文彦）云、この数字は、原書ブランデブルクとリトアニアとの旁書だったが、ここにあげる。

59 頁、デイヌマルカの上に、（漢訳、第那瑪爾加）一校者（文彦）云、この数字はデイヌマルカの旁に記してあってのを、下に出した。

## 西洋紀聞 下巻 シドッチ個人の問題とキリスト教関係の議論

シドッチ個人の尋問

シドッチの立場と航海経路

肉親への愛情

日本を紹介するパンフレット2冊

携帯品と衣服と

他の国々への布教

ザビエル関係とローマ派遣使節

ザビエルの続き

利瑪竇（マテオリッチ）のこと

軍事の事柄

ヨーロッパの火器の由来

植民地支配への意見

シドッチが日本をめざした理由は？

日本と中国の差への評価

シドッチの使命は？

何故江戸直行を望んだか

キリスト教の由来について

マサンを食った原罪

ノアの洪水

モーゼの出エジプト記

イエス・キリストの誕生

キリスト教の確立

キリスト教徒のレベルの呼び名

ペアテレとイルマン

他の宗教について

白石の直截なキリスト教批判

シドッチ個人の尋問

大西人（シドッチ）に尋問して、まずその姓名生国両親などを質問した。シドッチは答えて、「私の名はヨワン・バツテイスタ・シローテで、ローマ国のバライルモ（パレルモ）の出身です」という。

（シドッチの話を書く際に、声音を文字にうつすのは容易ではなかった。その名を唱える際も、ある時はヨワンといい、別の時はギョアンと聞える。こういう発音に近く、似たものを書いておく。他の点も同様である。名前のヨワンはラテン語の発音で、ポルトガル語

ではジョアンといい、オランダ語ではコヤンという由である。バライルモはローマ国に属する地名だという。）

「父はヨワンニ・シローテと言ひ、死んで既に 11 年になります。母はエレヨノフラといい、しばらく会っていませんが、今も永らえて世にあり、年令は 65 歳のはずです。」

（父の名は本人の名と似ており、父親のほうは最後にニがつく点と、本人の名にはバツテイスタというのが加わる点が違う。この点を問うと、「昔エイズスの大弟子 12 人の中に、ヨワンニス（ヨハネ）という人がいました。そもそもキリスト教は、各々この法をうけついで祖師の名をみずからの名に加えて称するもので、ヨワンもバツテイスタもどちらも名で、シローテというのが姓です」という。）

「兄弟は四人で、一番上は女でしたが幼くして死にました。次は兄で、ビリブスといひます。次は自分で年齢は 41 歳、下に弟がいましたが 11 歳で死んで既に 20 年になります。自分は幼時よりキリスト教徒となり、22 年間その学問をまなび、師としたものが 16 人います。」

（西洋の学問は科目がこのように多い。師が 16 人ということは、学科毎に各々教師がいたということである。）

#### シドッチの立場と航海経路

「ローマでサテエルドス (Sacerdos 司祭、英語の priest) の地位に着き、六年前に国の薦擧でメツシヨナリウス (Missionarius 伝道師、英語の missionary) にして貰いました。」

（サテエルドスは最高位の教化の主（法王）から数えて 4 番目の地位で、メツシヨナリウスはその教えを広める役目を果たすものを称する名だという。）

「初め法王の命をうけて、この地(日本)に来るべきことを承ってから、3 年間日本の風俗を勉強し言語を学びました。またトーマス・テトルノン(前出、上巻附録)というものも、師命をうけてベツケン(北京)に行くことになりました。

3 年前に、2 人は各々カレイ船一隻ずつに分かれて乗り、ヤネワ(ジェノア?)を經由してカナリア諸島に着き、ここでまたフランスの船舶に乗りかえて、ついにロクソン(ルソン、フィリピンの一番大きな島)に着きました。ここから、トーマス・テトルノンは北京に行き、自分は日本に向かいました。海上はたちまち風が強く浪があらくて、船が覆りそうになったことも三回くらいあり、その後はじめて日本に到着できました」という。

（トーマス・テトルノンは、同門の人の名である。ベツケンは、清国の北京である。オランダ人は、ペツキンという。カレイ船は小舟をいう。ヤネワとカナリアは、両者共に大西洋の島の名である。）

訳註：ヤネワはジェノアと推測される。イタリアの港で、大西洋の島名ではない。ジェノアはローマから西北にかなり離れているが、船は西へ向かうのだから陸路でジェノアまで行って乗船するのは不自然ではない。

#### 肉親への愛情

「そもそも男子が国の命をうけて、万里の行に出る。身を顧りみるわけにもいかないのは、

言うまでもない。と、はいうものの、汝の母はすでに年老いており、兄もすでに壮年を過ぎているようだ。汝の心において、それをどうおもうが」と白石が質問すると、しばらく答えず、顔色にうれいを浮かべて、身をよじるようにして次のように述べた。

「そもそも一国の薦擧によって、師命をうけて以来、何とかしてその命令を日本で実現したいと思う以外にありません。老母や老兄も、自分がこの行にあることは、道のため国のためであり、これ以上の幸はないと悦び合っていました。と、いって、この身体を全部獻げて、父母兄弟の身を顧みないという意味ではありません。この身が活着ている限り、決して父母兄弟のことを忘れずにはられません」という。

#### 日本を紹介するパンフレット2冊

「我国の風俗や言語は、どんな人に就いて学んだのか」と質問すると、懐に持っていた小冊子を取り出して、

「これに日本のことが書いてあります。またロクソンに着いて滞在している時に、日本の人であって、学んだこともありました」という。

取り出した小冊子の一方はヒイタサントールムといい、我国のことを記したものである。

もう一方はデキシヨナアリヨム（英語の dictionary）といい、我国の言葉をしるして、彼方の語に翻訳したものである。

（2冊とも、長さ5寸・幅4寸ほどで、一方の端を糸でとじた「やまととち」の体裁で、厚さは各々1寸以上ある（1寸は3.3cm）。我が国のことを記してあるという本のヒイタサントールムには、絵がはさんであった。）

ロクソンで我国の人にあつたというのは、「昔からそこにいた日本人の子孫がすでに多数おり、その上に3年前に日本から風に流されて、ロクソンに漂着した人が14人滞在していたので、日本のことを伺いました」ということであつた。（中巻、ロクソンの項目、参照）

#### 携帯品と衣服と

携帯している袋の中に黄金が三種類あつた。弾のような形の丸金や錠のような板金もある。さらに、元禄年間に日本で作られた板金（日本でいう小粒判である）もある。また日本製の新しい銭もあつた。（上巻附録、参照）。

「これ等はどこで入手したか」と質問すると、

「そもそも旅をする際は、資金がなくては不可能なのは言うまでもありません。初めローマを出発した時、スクウタ・アルセンテヤという銀を持参していました。カアデイキス（カディス、スペインの港町）という所で、イスパニアの銀に換えました。ついで、マルバル（おそらくマラバル Malabar : インドの港）に着いた時に、その港のホンテチリという所で、その国の銀に換えました。通貨は地方毎に異なり、その地で通用するものでないと、使用できません。

（スクウタは、この銀の形の名である。アルセンテヤとは、銀という意味の単語である。カアデイキスはイスパニアの地名。マルバルはインドの地名でゴアの南にある。ホンテチリはマルバルの街の名で、人物繁盛の地だという。）

「ロクソンに着いて、また黄金に換えました。日本では、黄金が貨幣の中心だと聞いたからです。弾型のものや錠型のものがこれです。日本の金銭は、3年前にロクソンに漂着した人のもっていたものと、換えてもらいました」という。

シドッチが着けている法衣の名を質問すると、「ルリヂヨ (religio) です」と答えた。織ってある布は日本製である。「どこで入手したか」と質問すると、「マルバルのホンテチリで布を買って、ロクソンで法衣にして貰った」という。

(この形の法衣を、ポルトガル語ではカッパ (Capa) という。以前日本では、その製法をまねて雨衣を作った。今回この製品を見ると、日本でマルガッパという物に似て、襟首の所が少しだけ違う。身に被けて、前襟でボタンという物で左右を連結する。かなり長くて、地面を3, 4尺も引きずるほどである。

「法王以下の位によって、法衣の長短の区別があります。法王の着る法衣は特に長く、地面を何メートルもひきずるので、歩く時は侍者に裾をもたせます」という。)

#### 他の国々への布教

「同門で北京に行った人がいるというが、彼は初めてその国にゆくのか」と質問すると、「そうではありません。チイナ (チイナとは支那 (中国) である) は、当初日本と同様にキリスト教を禁じていましたが、80年前に禁令は解除されて、キリスト教布教が可能になりました。それだけでなく、今の天子はローマ国に使いを送って、貢ぎ物をたくさん献上しています。その中には、マルカリイタ (真珠?) が七つもあります。その大きさは、ヨーロッパではまだ見たことがないような見事なものです。報礼として、1度に鉄弾を三十発も撃てるトルメントムを頂戴したということです。

(「マルカリイタは貝の珠で、その大きさはこぶしほどです。トルメントムとは、大砲のことです」と説明を加えた。)

「ですから、ローマ人サンデヨルデヨ (サン・ジョルジョ) が、ナンキン (南京) にすでに10年前からおり、アバットコルテルはカンタン (広東) にやはり10年住んでいます。またスイヤム (シャム) でも、18年前にキリスト教を禁じたことがありましたが、今はその禁が解けて、2年前にフランシクスがそこに行きました。この他に、トンキンにいるものが3人、クチンチイナ (コーチシナ Cochinchina, 「交趾支那」、今のベトナム南部) にいるものが2人、ただし名は忘れまして」という。

(サンデヨルデヨ、アバットコルテル、フランシクスは各々伝道師の名。ナンケン (南京)、カンタン (広東) は広東である。トンキン (安南) は安南の地である。(安南はベトナムのこと)。クチンチイナは東埔寨 (カンボサイ : カンボジャ) の東にある。漢訳未詳。上記参照。)

#### ザビエル関係とローマ派遣使節

むかし、我国に来て始めてキリスト教を広めたもののことを質問するとこう答えた。

「今から120~130年前、西洋の人で、フランシクス・サベリウス (Franciscus Xaverius, フランシコ・サビエル) という人が日本にきて、キリスト教を説きました。豊後 (現在の

大分県)の殿様が最初にその教えに帰依し、部下の大名に命じて、はるばる我本国まで使を遣わし、多くの貢ぎ物を献上されました。その使節は、ごく幼い子をつれて来ており、キリスト教徒にしましたが、帰ろうとする際に御自身は亡くなりました。この使節を葬ったところは、今もローマに現存します。

フランシスクス・サベリウスはカステーリヤの人で、ポルトガル王の宗教上の師でしたが、キリスト教を広める目的で遠く東の日本まで来ました。日本には再度やってきて、そこから西に帰る時に、サンチャン(上川島)で亡くなりました。サンチャンは、チイナのカンタンの南にある海島です」という。

(ザビエルの来日は1549年だから、ここから150年以上前のことになる。カンタンは広東、サンチャンは香山県である。西洋語で香山の音が転じ訛ったものである。なお、現在ではサンチェンと仮名表記する。)

### ザビエルの続き

私見では、フランシスクスは漢語で波羅多伽児人、仏采釈古者というのがこれである。豊後の殿様とは、大友左衛門督入道宗麟である。その使節としてローマへ行ったのは植田入道玄佐で、元は美濃の国斎藤氏の一族である。天正12年に、宗麟から派遣されてローマの地で没した。

シドッチが懐にもっていた冊子に、修道師が瓶を持って、童子の頭頂に水を灌ぐ所を描いた絵があり、シドッチはその絵を示して「これが豊後の殿様の子が洗礼を受ける絵です」といった。しかし豊後の殿様やその使等の姓名を質問すると、「その姓名はつたわっていません」ということだった。

### 長文の細字

(コンパニヤ・ジョセフ(岡本三右衛門)の話ではこんな事柄が伝わっている。「むかし豊後国に鬼怪なことの起こる家がありました。ポルトガル人の来た際、ここに住まわせました。ポルトガル人がこの壁にクルス(Crus:十字架)を描いたところ、その後この鬼怪な事件がやみました。豊後の国司がこの話をきいて、不思議なことと思いました。1年後に、フランシスコ・サビエル(Francisco Xavier)がやって来たので、国司も間もなくキリスト教に帰依したといえます。』

フランシスコ・サビエルは、ポルトガル語の発音である。ラテン語ではフランシスクス・サベリウスという。クルスは十字架のことである。

これもジョセフの話で、サビエルには神通力があつたことがいろいろ記述されている。シドッチの話もこれに似ている。この種の話は、昔の神や僧侶に関係していい伝えている事柄で、いわば伝説だから特に信じるに値しないから、ここには記述しない。

シドッチの話では、ゴアにサビエルの屍を葬った棺があるという。水晶でつくって姿がよく見えて、現在も生きている人のようだという。この点をオランダ人に質問すると、「人は死ねばすぐに形が壊れていく。この話のようにするには、薬物を使うのです」という。

この説明は納得しやすい。万国坤輿図を眺めてみると、曷刺比亜(かおひやく)の地(アラビア)では、名バル刺(ハバルラ)という薬ができる。これを塗ると屍体が腐らない。



また亭露（ペルウ）の地で、巴尔娑摩樹（バルサモ）を産する。この油を屍に塗るとやはり屍体が腐らないという。つまり、こういう土地では屍に薬物を塗って腐らなくする方法が昔からあったようだ。

「ヨーロッパ地方には幻術というものがあり、種々の神が不可思議な現象を起こすことがあるという。本当にそんなことがあるか」とシドッチに質問すると、「そんな術の話は聞いていません。でも、デウスが時々人間に乗り移ることがあります。また昔は、神が人の姿になって種々の奇跡を行ったことも少なくありません。さらに呪の法もあり、それなりに効験のあることも世の常です。私がここに来る途中、カナリア島に着いた時、そこで鬼怪なことがあって、私が依頼をうけました。私は早速護符をあたえたところすぐに止みました。今もここで不思議な現象が起こっているなら、私が呪術を試みましょう。そうすると、私が言うことがデタラメでないことがわかるでしょう」という。

この点をオランダ人に訊いてみると、「ヨーロッパ地方でキリスト教を尊信する所には、かならず木でクルス（十字架）を作って、村の入口にたてています。さらにクルスをもっと小さくしたものを、家の上にもたてます。またアンニエスといって、白蠟で羊子の類のもので右の手にクルスをかいた旌（はた）もった像を造り、それを常に身につけ、また人に会うときは、右手の親指で自分の額と唇と胸とにクルスをしるします。これで天雷・鬼神、もろもろの災難をまぬかれる法だというのです。」

この説のように、デウスが万物をつくって人にご利益を与えるのなら、災難を逃れるこんな法を人に教えるより、そもそもその天雷・鬼神等を造り出さなければ良いではないか。

カナリア島で起こったことにしても、嶋中の人があんな鬼物の心をもっていたというのだろうか。この島は、フランスが兇悪犯人の死刑にすべきものを罪一等減じて島流しにする場所だ。デウスでもヨヤンでも鬼を処理する術があるなら、そもそも獄中で苦しませることなく免除してしまえばいいではないか」と言い合って大笑いした。

昔から別の宗教でも、こういう鬼物を天狗と呼ぶ。シドッチの話のキリスト教徒にしても同じである。日本でも似た話を何度も聞いた。）

ここまで注釈。

#### 利瑪竇（マテオリッチ）のこと

明国の万暦年間、中国に初めてキリスト教を伝えた西洋の人である利瑪竇（リメトウ、マテオリッチ Matteo Ricci）のことをシドッチに尋ねたが、答えがなかった。再度念を入れて訊いたが、「私はその人のことをはっきりとは知りません」という。

フラソシスクス・サベイリウスの場合、今まで日本にきた西洋人で知らない人はいなかった。利瑪竇の場合、明の末期の人々の言葉に拠ると、そもそも西洋の人だから、シドッチが知らない理由はない。ところが、まったくそのことを聞いていないのは納得がいかない。後で新刻大蔵の闘邪集を見ると、利瑪竇は香山巖（ヒアンシアンシアウ）に近い小国で生れたと、そんなことまで詳しく書いてある。

またオランダ人の説を聞くと、「キリスト教徒たちは、諸国に行って布教する一方で、幼くて賢いものを見つけると、自分の国に連れ戻って教育し、その幼児が学を十分に習得すると、今度は本国に還してキリスト教を説かせます。こうすることで、教えが世間一般の人に伝わりやすいよう狙うのです」という。

我国で昔キリスト教を説いた宣教師たちも、たいていはヨーロッパで学問を身につけた人たちであった。だから利瑪竇の場合も、香山に近い場所に生れたものの、西洋に行つてその学問を身に着け、再び中国に来て、始めてその数を広めたわけである。そこで縉紳諸生（しんしんしよせい：官位の高い人たち）まで惑わされて、ヨーロッパの人が自分の国の事柄を知り、三教（儒教・老莊・仏教）の書を読み、キリスト教の説が自分の儒教などと合致する所があると感じたのだ。でも利瑪竇は本来東の人に関係があったのだから、シドッチがこの利瑪竇を知らなくても不思議ではない。

訳註：白石は「利瑪竇は東洋生まれで、ヨーロッパで修行して宣教師となって中国で布教」と考えているようだが、この点は根拠がない。利瑪竇はヨーロッパ生まれである。

#### 軍事の事柄

話を戻して、シドッチに戦国や軍事のことを聞いて、「兵が最強なのはどこか」と質問すると、

「陸戦ではトルコにかなうものはありません。水戦（海戦）では以前はフランスが強かったのですが、その後はイギリスが無敵になりました。しかし、現在は、オランダが最強です。イギリスもこれにつぐ強国です。オランダやイギリスの戦船は高く大きいことといたら山のように、船端を三層につくり窓を8つか9つ設けます。その窓に大砲をつけて、敵船の大小・高下・遠近などに応じて砲撃を加えます。攻撃の速さと船の堅牢さでは、オランダ式が最高です。むかしフランスに行つて、海辺の所で人も物も豊かな土地を見ました。今回、ここに来る途中で、同じ場所を通りすぎましたが、見違えるように赤裸の土地になって草が一本も生えていません。理由を質問すると、「オランダの大砲にやられて、数里四方の土地がたちまちこんなになった」といわれました。

オランダ人に、この大砲のことを質問すると、「スランガという大砲は鉄の弾丸の重さが5キロ、カノンは弾丸の重さが30キロで、射程は2キロに及びます。砲身が短ければ、遠くには飛びません。ボンというのは、鉄の弾丸で合抱（一かかえ：直径50センチくらい）、中に火薬をつめて空にむかって発射し、地面に墜ちる時には弾が砕けて火を発し、2メートルほども土にめり込みます。これだと、一里四方（4キロ四方）のものはすべて燃えて、灰塵になります。射程も、このボンが一番長いものです」という。

#### ヨーロッパの火器の由来

シドッチに、ヨーロッパでの火器の由来を質問すると、「ジュデヨラ（ユダヤ）のドオツバルカインの人が始めて作りました。場所はダマスカスに近いところです。スコルペイト

ウムの始は、今から実に2千余年前です」という。

(ジュデヨラはまたユデヨラとも呼ぶ名のものである。ドオツバルカインとダマスクスはいずれも地名である。スコルペイジウムは、ここにいう銃である。ダマスクスは現在のシリアの首府。)

オランダ人に、銃砲等の起源を訊いてみたが、起源は知らないという返事だった。

#### 植民地支配への意見

イスパニアやフランスが海外の国を併せて、新しい国を開いたことを質問すると、  
「たとえばノービスパニア(メキシコ)の場合、当初はこの国を治めているものではなく、住民は適当にむらがって争い、弱者は強者の食糧になって、人の屍を食う状態でした。イスパニア人が暴風に流されてこの地方に着き、衣食の業を教え、そのための資財を提供し、さらにデウスの教でみちびきました。この地方の人は、始めて生活の術を得て、悦んで征服者に服し、ついにその地を奉納して、本国の王に自分たちの統治を請うたのです。

ロクソン(フィリピン)の場合も、当時の民族は皆裸体で、わずかに樹皮で身体の前を覆っていました。その人たちの生活は、禽獣(鳥やけもの)に近いものでした。それでイスパニア人がここに来て、彼らは始めて生活の手段を得ただけでなくて、キリスト教も知りました。それで土地の人みんな、イスパニア本国に従属することを希望しました。イスパニア側では、そもそも本国から何万里も離れて、この国を治めるなど費用がかかってムダだから棄てるほうがよいと主張しました。しかしイスパニア王は『海外の人を生かしてその生活を安定させ、死後の苦痛をなくすことは、我がデウスの恩に報いる所が少ない』と主張して、ロクソンの人たちの願いを聞き入れました。この他、ゴアやアマカワの場合は、その地を借りて、船舶の寄港や貿易のことに使うものです。どれも、その国を侵したり奪ったりする意味はありません」という。

(ノーワ・イスパニアもロクソンもいずれも国名である。ゴアはインデヤの地名。アマカワは阿瑪港で広東にある。いずれも前に詳述した。)

#### シドッチが日本をめざした理由は？

「ところで、我国(日本)は東に偏していて国としてのサイズも非常に小さい。その上、日本ではキリスト教が禁じられていることは、ヨーロッパ地方の人にはよく知られている。それなのに、今回は何の考えでわざわざここに来たのか、理解できないではないか」と質問すると、回答はこうだった。

「まず『この国が東に偏していて国としてのサイズも最小だ』との仰せですが、それは妥当ではありません。そもそも一つの国を論じるのに、地面の大小や遠近では言うべきではありません。世界中で、土地が広く大きいといえば、タルターリヤ(タートル: 韃靼)とトルコが圧倒的です。しかし、その人たちの暮らしぶりは、禽獣とあまり変わりません。ヨーロッパ諸国の人たちにしたところで、もし我がキリスト教の教化がなければ、タルターリヤやトルコと同じだったでしょう。ローマの場合、大きさは僅か18里四方にすぎませんが、現在ではキリスト教の中心地だから、西南諸国はすべて尊び敬うわけです。いわば

頭は小さいながら身体全体の上に載って大切なのと似ています。

ためしに物を観ると、その始めは皆な善なものです。天地の気、歳日の運、万物の生、ことような事柄の認識はすべて東方が始点です。世界中で、東方に位置しながら盛運をもつ国は、日本以外には、黒子ほどわずかな地も存在しません。つまり、日本が世界のどこよりもすぐれている点は、私が改めて多言を費やす必要はないでしょう。

キリスト教が現時点では日本で行われていないといっても、遠い昔のことを論じる必要ありません。」

(シドッチが持参している小冊子に、豊臣太閤のことをしるして、『秀吉はテイランであった、キリスト教を禁じた』と書いてあった。テイランとは西洋語で、人を多数殺す暴虐の君主を称する、つまり暴君という意味である。)

「徳川の御代になってキリスト教を禁じたのは、初めオランダ人が、私たちがこの宗教で世を乱し、国を奪う狙いだと告発した故です。この点は、私があればこれ議論するまでもありません。わがローマが国をひらいて以来、そもそも 1380 年余になりますが、その間私たちがわずかな土地でも、外国を侵略収奪したことがあるか否かは、オランダ人を尋問してみれば、必ず明らかになるでしょう。」

「一方、彼のオランダのルテイルスの場合は、他人の土地を侵し、国を奪った例は数知れず、現在それが併合した場所の多い点は、前に述べたとおりです。したがって、人が国を誤るのは教によるものではありません。もっぱら、その人によるのです。

イスパニアやフランスの場合、海外の地を併合してはいますが、前に申し上げたように、それらの国にはそもそも君も政府もなく、その民が帰属する所がありませんでした。

日本のように立派な国の場合、民はなにを苦しんで、君を万里の外に求める理由があるでしょうか。私が今回ここに来たのは、日本が、キリスト教に課しているいわれない罪を訂正して、国禁を解いて支那やシャムのようにして欲しいと請うためです」と述べた。

(ルテイルスはオランダ人尊信する所の祖の名である。これはキリスト教の異端だという。下に詳述。)

訳註：シドッチは、ヨーロッパの国々が征服した土地（マダガスカル、東洋の各地、オーストラリア、南北アメリカ）に関して「住民の生活は禽獣に等しく、ちゃんとした政府はない。住民がむしろ西洋人の支配を求めた」という言い方をしている。

植民地収奪の状況を、白石は自ら観察はしていなかったろうが、シドッチのいうようなキレイごとでないかと疑っていた証拠が十分にある。直接観察はしていなくても、いろいろ情報が入って白石が承知していて当然である。

それにしても、この面の記述に関するシドッチの主張はひどい。禽獣に等しく何も知らないとか、食人種だとか、植民地主義を正当化する度が過ぎる。他の宗教に対する評価も頂けない。この主張を聴いて、白石もシドッチに対する評価を下げたろう。[諏訪邦夫]

私見では、国を論じるのに、その土地の大小や場所の遠近によらないとは、筋の通った議論である。また国を誤るのは宗教によらず人によるというのも、まあ理屈があっている。

しかし一方で、キリスト教では、そもそも天主が天を生じ地を生じ、万物を生ずる大君

大父だとしている。

そんなことを言われては、父がいても愛せず、君があっても敬わないことになる。これこそ不孝不忠である。まして、その大君大父につかえることに最大の敬意尊敬を払えというのだ。

「礼記」によると、天子の仕事には天の神を祀る仕事も含まれ、諸侯以下の人は敢えて天を祀る仕事はしない。身分の尊卑をみだしてはいけない故である。けれども、臣は君を以て天とし、子は父を天とし、妻は夫を天とする。だから、君につかえて忠であることが天につかえることである。父につかえて孝なのも、天につかえることになる。夫につかえて義なら、それも天につかえることになる。

三綱の常つまり君臣・父子・夫婦の間以外に、天につかえる道はない。

君以外に仕えるべき大君があり、自分の父以外に仕えるべき大父があり、それが自分の君や父以上に尊いとすると、家に尊ぶべきものが二つあり、国に主君が二君あるというだけでは済まない。君を無視し父を無視することになり、極端に重大なことになる。たとえその教自体が、父を無視し君を無視せよとは言わなくとも結果は重大で、必ず君を殺し父を殺すことになっても当然ということになるかも知れない。

訳註：この白石の議論は筋が通っている。実際、島原の乱（1637）の鎮圧に苦勞して宗教の暴力を痛感したことが最終的な鎖国に直結したとされている。

#### 日本と中国の差への評価

「東方の国といえば日本だけではない。支那（中国）も東に所在し、その文物声教に優れ、昔から中土と称している。その中国をどう考えるか」と質問した。

答えはこうである。「日本人はものをたとえば円く見るが、中国の人は物を四角く見るのに似ています。また日本人は温和な点はこうです」と述べて、みづからが着けている衣をとりあげた。一方、手で榻（とう：こしかけ）を撫でて、「中国人の性格は、この榻のように固くして渋いものです。それに、彼らは近くにいるものを賤しいと評価し、遠くにいるものを尊びません」と述べた。

私見に拠れば、この方円の説は、そんな比喻が適当と思う経験があったのだろう。中国人の場合、いわゆる堯舜以来けがれなく尊いとされている道があり、異端の言については老子や仏のような優れた言葉でさえも行おうとせず信仰の対象にしない。

一方日本の場合、昔から仏教関係の学が盛んで、宗をたて派をわかち、その徒は各々自分の教えを唱えてきた。日本人は、どれに所属するかは自由で、別の宗派を見て怪しむことがない。一方を止めて別の宗に移るなど、その説が行はれやすい点、中国人が基本を守って動かないのとは違う。

#### シドッチの使命は？

シドッチに対して、「ここに来る始めに、法王が命じたことや、彼が訴えるように告げたことの大要はどんなことか」と質問した。

シドッチの回答はこうである。

「昔フランシスクス・サベリウスが、始めて日本に来て、キリスト教を広めて約 70 年間日本で行われました。タイカフサメ（太閤様、豊臣秀吉）の時になって始めて、キリスト教徒を追放しました。

（秀吉が九州を平定した時に、長崎に住んでいたクリシタンを追い出したことをいう。）

これ以来、キリスト教徒であること自体が罪とされ、ついにヨーロッパ諸国の人々は日本と交通できなくなりました。先師ホンテヘキスマキシムスだったイノセンチウス・ウンデイシムス（ホンテヘキスマキシムスは、ここに最第一無上等という意味。ローマ法王の号である。イノセンチウスは名である。ウンデイシムスは 11 世の意味（実は 12 世 Innocentius X I I 1691-1700）。この第 1 祖より 11 世にあたる故である。ウンは一つで、デイシは 10 である。ムスは世という意味という。）は、このことを深く歎き復活させたいと考えましたが、その志を実現しないまま、10 年前に世を去りました。

今の法王であるホンテヘキスマキシムス・クレイメンズ・ドツヲデイシムス（クレイメンズは名である。ドツヲデイシムスとは 12 世という意味。）は前法王の志を継いで、この問題を議に諮りましたが、衆議が決しないまま年を経てしまいました。カルデナアリス聚が相議して（カルデナアリスは、本師に次ぐもので 72 人いるという。枢機卿、英語の cardinal ）、「昔支那でもキリスト教を禁じたが、今ではその禁を解いただけでなく、天子の使がローマに来貢している。またスイヤム（シャム）の場合も、一度はキリスト教を禁じたが現在では禁を解いている。つまり、今では支那とシャムはこうなっている。（この点は前述。）

ヤアパンニヤ（日本）にも、まずメツシヨナリウス（伝道師）を派遣して訴えを告げ、次ぎにカルデナアルをヌンシウス（Nuncius、使節、ローマ教皇大使）として遣わして、友好関係を樹立すれば、キリスト教を東方に布教できるのではないか」という判断になりました。

（ヤアパンニヤは、日本である。メツシヨナリウスは前に説明した。ヌンシウスは、ここでは使者という意味に近い。）

衆議一決してメツシヨナリウスたるべきものを撰ぶにあたり、衆は同じように私を薦擧したので、その命をうけてここに来たことは、前に申し上げました。老女の母と兄とを棄て、万里を越えてここまで来たのは、キリスト教のため、法王のためで、それ以外に理由はありません。

初めてこの命をうけた日に、私が決心したのは以下の三点でした。第一、本国のローマの望みが許可されて、キリスト教がふたたび日本で布教できるようになるとしたら、それこそ最高の幸です。第二に、私が捕えられ、日本の法によって極刑に処せられても、もとよりキリスト教のため、法王のためですから、この身が惜しいとは考えません。とはいいいながら、法を犯したからといってお国をうかがう間諜のような御沙汰を受けるなら、遺恨なしとは言えません。でも、法王の命令は『国に入ったらその国にしたがえ』ということで、その法自体に間違いがないとはいえないと考えると、身体についてはとにもかくにも国法にまかせるのはもちろんです。

第三には、さっさと本国に送還されることになれば、法王の命令も達し得ず、自分の志をもなし遂げられず、万里の行を空しくして、一世の讒（そしり）だけをのこすことで、大きな恥辱です。とはいえ、キリスト教がまだ東に進むべき時に至っていないという不幸にあったわけで、そうなったからといって誰を怨むべきものでもありません。これ以外、申すべきことはありません」という。

#### 何故江戸直行を望んだか

ところで、シドッチが日本に最初に着いた時、長崎にゆくことを願わず、直接江戸に来たいと望んだというので、その理由を尋ねた。それに対する回答は、

「私が遠路はるばる出かけてきたのは、国命を述べてお願いするためです。だから、直接ここに来たいと申し上げました。特に長崎にはオランダ人がおり、私は到底同じところには行きたくないと考えました」という。

次にこう尋ねた。「聞くところでは、汝は国の使命をうけて来たという。およそ使節というものは、必ずその信を述べる書状をもって差し出すことになっている。日本と汝の国とは、すでに旧好国ではない。そうすると、信任状のような物がないのに、どうやって貴国の使であることを信ぜさせられるか。

しかも、汝はここに来るにあたって、我国の服を着け我国の言葉を話している。この点は、西鄙(西の田舎：シドッチは屋久島に上陸して滞在)の人を惑わす結果となるもので、こっそり我国の人となって、ひそかにキリスト教を説こうとしたのではないかと疑われる。その計画がうまくいかなかったので、初めて国の使と称したのではないか。そういう行動記録を見ると、汝のいう所をそのまま信じるわけにいかない」と質問した。

それに対する回答は、「この国でキリスト教が禁じられて以来、そもそも我方の人が長崎に来た場合、殺されるか押還されて、国命を達したものは一人もいません。だから、私は一人でこっそり上陸して、西鄙の地にとどまったのです。この国の服を着ていた等のことについては、長崎においてすでに申し上げてあります。

我が国が私を派遣した問題は前に申しあげた通り訴えた通りで、もし恩裁の御ことが頂ければ、かさねて信使を奉て、その恩を謝して、キリスト教を日本で布教したいという考えです。国に入ったら、まずこの禁を問うのが礼儀で、どの国でも当然のことです。いわんや、国禁を除いて欲しいと請う使ですから、何故その国に入って最初に禁を犯して罪をかさね、みづから国命を辱しめるようなことをするのでしょうか。私の行動の意味はおのずから明かでしょう」という。

#### キリスト教の由来について

ところで、「キリスト教そのものを、私（白石）はまだ聞いていないから、その大略を聞こう」と質問した。彼の説明は以下の通りである。

「そもそも何でも、物は自然には生まれません。必ず造るものがいて出来上がります。たとえばお堂の成果を見ると、必ず工匠がつくっています。一家のまとまりは、家長が果た

します。天地万物とも主宰者いなくては、自然に生じることはありません。

その主宰者を、デウス(Deus)と名づけています(デウス、漢に天主と訳す)。デウスが天地万物を最初に造る際、まず善人を住まわせるべく、諸天の上にハライソ(Paraiso、漢訳で天堂。仏語の極楽世界、英語の paradise)をつくり、 ついで無量無数のアンゼルス(angelus エンジェル、天使)(アンゼルスは、仏語の光音天人の類。ポルトガル語でアンジョ(anjo)という)を造りました。その後、大地世界を作ってタマセイナ(清浄土に近い)とし、男を作ってアダム(Adam)と名づけ、その右の肋骨を一つ取って、女を作ってエワ(Eva)と名づけました。これが人の始です。男女を夫婦にしてテリアリ(terreal : 安楽国土、樂園)の地に住ませ、残りの土地を鳥獣の住処としました。

アニマに、三つの段階があります(アニマ=魂)。草木は生のみで栄えたり枯れたりするだけです。禽獣は動のみで、飛んだり走ったりするだけです。この二つ、つまり動植物は形が滅びるとアニマも滅びます。

人の場合は霊があってこれが最高で、魂は天地と一緒に滅びるものではありません。人には靈魂があり、そこが草木鳥獣とちがう点です。始があるが終りはない、といえます。

そこでデウスは、アダムとエワを戒めて、マサンを食ふな、食うと禽獣と同じ立場に堕ちて長く苦を経験することになると命じました。(マサンは果の名で、リンゴです。仏教でいう地餅の類。苦とは、生老病死等の苦であるという。)

#### マサンを食った原罪

ルウチヘルというエンジェルがおり、智をほこって自らデウスだと称しました。おまけに、これを信じたエンジェルが多数いました。デウスはこれを憎んでインベルノ(inferno : 地獄)を作り、ルウチヘルとその賛同者を、共にインベルノに置くことにしました。

ルウチヘルと仲間、自分と仲間だけがインベルノで苦しむのを恨んで、テリアリへ行ってエワにマサンを食わせ、次いでエワがアダムにすすめてマサンを食わせました。

それで二人ともテリアリを追放されて、子孫の人間は苦を免れないことになりました。アダムとエワは、懺悔の心を抱いて罪を謝しました。

罪は大きくて贖えないのをデウスが憐れんで、自ら人となって生れ替わり、二人に代って罪を贖おうと約束しました。二人は無事 930 歳まで生きて、死後はハライソに到着しました。

#### ノアの洪水

アダムから 2 千年余り後、ノエ(Noe、ノア)というものに男子が 3 人おり、父母子婦すべてで総勢 8 人でした。彼らはデウスの教を受けて従いましたが、一般の世人はこれを信じませんでした。デウスが降ってノエに教えて船を作らせ、120 年で船が完成しました。デウスはまた降って、船に穀蔬鶏豚の類を船に載せるよう命じました。

大雨が 40 日降り、洪水で大地の人間は全員溺れ死にましたが、ノエの父子夫婦だけは死を免れました。この船は、今もアルメニヤの山の巔に現存し、またその水に漂って来た貝殻の類は、ヨーロッパ地方に所在する山岳の上に多数あります。



### モーゼの出エジプト記

ノエから1千年余り後（今から3千年余り前）で、デウスがジュデヨラ (Judaera) のスィナイ (Sinai、シナイ半島) に降って、モイセス (Moises、モーゼ) に、マンダメント (mandamento 十戒) を授けて、世の人に教えさせました。（ジュデヨラは国の名。ユダヤ、前出。）

エジプト (Egypt エジプト) の王はこの教を信ぜず、モイセスを殺そうとしました（エジプトは、国名。オランダ語でエギツプト）。モーゼに随ってエジプトから脱出しものが数万人あり、王自ら兵をひきいて、マーレ・プロム（紅海）まで追跡してきました。その時、海中の潮がわかれて路ができてモーゼ等は無事にのがれました。モーゼが移動すると潮がたちまち湧きだして、追手は皆溺れ死にました。

（マーレプロムのマーレは海。プロムは、またプルウトという。日本でいう血である。人は死んで、海はすべて血となるという。漢語で西紅海と名づけるのがこれである。）

### イエス・キリストの誕生

モーゼからおよそ1800年（今から1700年前）、ジュデロラの国のナザレツ (Nazaret ナザレ) に、サントス・マリヤ (Sanctus Maria) という聖女がいました。マリヤは、ベイレウエン (Bethlehem ベツレヘム) の王であるダアヒット (David ダビデ) の後裔です。（ナザレは地名。サントスは聖という尊称。マリヤは漢に瑪利亞と訳す。ベツレヘムは地名。ダアヒットはその君の名。漢訳未詳。）

マリヤが16歳の時、夢にエンジェルが降ってデウスの命令を告げて、『デウスがおまえの子となって生まれる。名をイエス・キリストと名づけよ。またサントス・ジョセフをこのキリストの父とし、ベツレヘムで産んで、一度エジプトに行かせ、後にエジプトから迎えられて故郷にもどるようにするだろう』という夢を見ました。（イエス・キリスト、漢に耶蘇と訳す。日本でゼスというのは、漢訳の音の訛りである。サントス・ジョセフは人名。）

そこでマリヤはジョセフと一緒にナザレを去り、ベツレヘムの駅に着いて、そこで男女の道をおかすことなく懐妊して、男児をその厩で産みおとし、夢のお告げのとおりイエス・キリストと名づけました。

（イエスが生まれたのは、乙丑の今年からみて1709年前の12月25日の夜半だという。したがって、日本では第10代崇神天皇30年辛酉の年で、漢の平帝の元始元年にあたる。）

アラビア・タルソ・サバの三国の王たちは、イエスが生れた夜に特殊な星が現れたのを観て聖人が生れと知り、各自の国を出て、その場所を探索しました。（アラビアは、今アジアの地方にある。タルソ、サバは共に場所不明。漢訳未詳。）

三国の君は同じ場所でゆきあい、共にユダヤの王エローデス（ヘロデ王）に会って、この点を質問しました。エローデスは星のことをしらず、「その人を見つけたら、知らせたい」と述べて、必ず知らせるように約束しました。ここを過ぎて、行程13日目にベツレヘムに着くと、例の星が真上にきました。ついにその駅で、イエスを拝することができました。エンジェルが降りて、三国の王を戒めて、イエスのことをユダヤの王には話すなと告

げました。理由は、ユダヤの王（ヘロデ王）は心に悪い計画を抱いていた故です。マリヤはお告げのとおり次にこの地を去ってエジプトに行きました。ユダヤの王は、三国の君がその点を告げないのをあやしみ、次の年に国中の幼児で生れて二歳になるもの数万人を探し出して、ベツレヘムで殺しました。7年後、ヘロデ王自身が死にました。すると再びエンジェルが降ってマリヤにナザレに帰るよう告げたので、マリヤはナザレに戻りました。

イエスの生後はおめでたい印の現象が数多く起こり、イエス・キリスト自身も幼時よりみづから天主の子と称し、12歳の時にエルサレムで3年間説法し、教えをうけたものが5千人いました。（エルサレムは地名。）

ユダヤの君セイザル（皇帝）がこれをにくみ、イエスを罪に落としてカルワリーエ（Galvaria ゴルゴダの丘）で磔にして殺しました。（カルワリーエは山の名。クルスにかけて磔にしたという。クルスは漢語で十字架である。また黄金でイエスの像を造ったのを、イマゼン(imagen)とよぶ。イエスが捕まって行く際に転んだのを、ある女性が手拭で面を拭いてあげたところ、イエスの顔の形が手拭にうつったのに始まるという。シドッチの持つイエスの像を見ると、銅製でイエスが十字架に磔殺されている姿であった。）

イエスは死後3日で蘇生し、母マリヤに会って40日間弟子に教えを説き、その後で終に天に上りました。デウスが初めに誓約したとおり、アダンとエワの罪を贖ったわけです。間もなく、ユダヤ王は敵アルテウスに滅ぼされ、国中の人馬城郭はすべて火でやかれて、現在のトルコの土地に荒城だけが遺っています。（カルテウスが地名か人名かは不明。漢字名も不明。）

イエスが上天した際の年齢は33歳で、母マリヤは後に63歳で上天しました。」という。

（キリスト教徒の念珠をコンダツという。珠の数が33のものはイエスの年齢からとり、63のものはマリアの年齢からとって数をきめるといふ。）

### キリスト教の確立

「イエスの弟子は72人で、その中で12人が上足（上席の門弟、12使徒）です。特に、サントス・ペートルス（ペテロ）、サントス・パウルス（パウロ）の二人（12人の中の二人）がエルサレムを離れて、イタリアの地のローマに来ました。彼らもまた、ローマ皇帝アウグストゥスに殺されました。その後320年余り経って、ローマ皇帝のコンスタンチヌスが癩病（現在のハンセン氏病）に患いました。数多い医師たちがみな、この病気を治すには小児を多数殺して、この血で浴するよう願いました。しかし、王は『自分の病気のために、人を殺すのはしのびない』といて、医師たちの進言を採用しませんでした。

この夜、皇帝は二人の聖人の夢を見て、『シルウエステルという法王がツラツテにいる。彼に診療して貰えば、汝の病気は治る』と告げられました。皇帝がその人を探すと、夢を見た二聖人の像つまりペテロとパウロの像が当の法王の所にありました。

ペテロがローマで殺されて以来、そのキリスト教をうけついだ法王が32代でしたが、ことごとく国から罪をとがめられて殉教し、難をまぬかれたものは一人もいませんでした。

34代目がシルウエステルでしたが、コンスタンチヌス帝が懇願して、聖水を頭頂に灌ぐ洗礼をして貰うと、病気は急激に治癒しました。(キリスト教徒が受戒の時に必ず授水の儀礼(洗礼)がある。これは、イエスが殺された時の血で、一切の罪悪を祓除する意味だという。ただし、このやり方は仏氏灌頂の法とまったく同じである。ツラツテというのはシルウエステルが隠れていた山の名だという。)

皇帝は大変に悦んで、やがてその居の場所を避けて、みづから鋤をとって十二のフンダメント(礎石)を据えて、サントス・ペートルス・エツケレイジャ(Sanctus Petrus Ecclesia 聖ペテロ教会)を建てました。

(フンダメントは礎のことである。サントスペートルス・エツケレイジャは、ここに精舎の名があるとおりで、オランダ語でテンプルスというのは、日本の寺にあたる。)

また皇帝は、ローマ、シスチイリヤ(シシリー島)、ネアポリス(ナポリ)、ノウルビエナ、ボノーニヤ(ポローニア)、ベラアラ、スタアトスホンテヒイチウス等の地を教会の土地として献上し、国は数百里離れたコースタンチイの場所に移しました。(当時のコンスタンチノーブル、現在のトルコの国都イスタンブールである。)

これ以来、ヨーロッパ地方の国君宰臣を始め、人非人に至るまで、全員がこの法を尊信するようになり、そもそのローマの地、四面皆石を畳んで基礎とし、この十八里四方、そのエツケレイジャが始めて建てて以来、この地にはいまだ火災が起こらず、長期間にわたって金銀珠玉をつかって荘厳にして、天下の寺観は比べようありません。ここに聚り居るものの数は約70万人余りです。(この地には山が8つあるという。オランダ人の説では、「ローマの周囲は24里ほどで、地勢は陰しく、高い山が7つあり、樓閣殿堂、金碧相転じ、言いようなく壮観である。キリスト教関係者以外には、工匠が数多く居住し、この巧妙さは天下に並ぶものがない。諸国の職人たちで、ここへ来て学ぶものが多い」ということである。)

「はじめシルウエステルがこのローマの土地を開いて以来、今のクレイメンスに至るまで法王は240代で、期間は1380余年です。キリスト教の首長つまり法王(教皇)は、この間相継いでこれを称してバアバといい、またホンテヘキスマキシムス(Potifex maximus)と呼んでいます。(オランダ人は、その法王をパウスというが、バアバから転じた単語だろう。推測すると、今の法王はシルウエステルから240代余で、また12世とも称している。ホンテヘキスマキシムスの号になってから12代という意味に解釈できるだろうか。)

#### キリスト教徒のレベルの呼び名

「キリスト教には、各々地位に対する呼び名があります。最上位はスムテ・ホンテヘキス、すなはち法王です。次はカルデナアリス(枢機卿)で、この位のものが72人います。(72という数は、イエスの72の弟子に準じて決まっている。法王の席をつぐものを決める際は、72人の中から候補者を選び、各々この名を紙にしるして封じ、イエスの像の前で開票し、この数の数が多いのを法王とするという。)

その次はエビイスコプス(Epiiscopus 司教、英語の bishop)、次はサチエルドス

(Sacerdos 司祭、英語の priest)、次はリヤアコノス(Diaconus 助祭、英語の deacon)、その次はスプテアコノス(Subdiaconus 副助祭)、その次はエキソルチイスタ(Exorcista 祓魔師)、その次はアコーリトス(Acolythos 侍者)。その次は、オスティアウス(Ostiarus 墓掘人)、その次は、レキトラトス(Lectoratus 読師職)です。

#### パアテレとイルマン

これより以下は、職掌の名号は数が多く、エビスコブス以下は、数は定まっています。パアテレ(Padre 神父、漢語では巴礼と訳す。日本でバテレンともいうのがこれである。英語では priest と Father ともいう)、イルマン(irman 宣教師)などは、位号ではありません。ヨーロッパの言葉で、父をパアテレといい、母をマアテレといい、兄弟をイルマンといいます。

だから、尊敬する人をパアテレといい、親しい人をイルマンともいいます。日本でも以前に、キリスト教の師や友を、パアテレとかイルマン等と呼んだのはこの意味です。」

#### 他の宗教について

「そもそもどの世界でも、それぞれ尊しとする宗教があります。世界の宗教は三つに分かれます。一つはキリスト教(Christian) (イエスの法。日本でキリシタンというのはポルトガル語。)、二つ目はヘイデン(Heiden)で、またこれをゼンテイラ(Gentile 多神教)ともいいます。(この法を質問すると、この宗で仏を多く立て、それにつかえるといい、この教議内容は明確ではない。) 三つ目はマアゴメタン(マホメット教、漢語で回教という)です。

ヨーロッパ地方で奉じるのは、みなキリスト教で、その中にいろいろな宗派があります。私がうけて伝道もしているのは、カトリック(Catholicus)の派です。同じキリスト教から出て、別に一法をたてるものをすべてエレゼス(haereisis、英語の heathenism)といい、カトリックから見るとキリスト教の異端です。

ルテールス(Lutherus)、アルリヨ(アリウス)、カルビノ(Calvin)、マニケヲ(Manichio マニ教)などはすべてエレゼスです。オランダ人は、ルテールスを奉じます。(ルテールスは人名。ポルトガル語ではルテロ。元来はキリスト教で、後に独立の宗派になった。オランダ人の説では、たとえば祖師禪があるように、ルテールスは教外の宗派だと説明する。) 訳註：カルビン派：Calvin (1509-1564) が、1541 年以降ジュネーブで唱え、政治なども統合して大きな勢力となっている。

マニ教(摩尼教)：マニは人名で 3 世紀の人。拝火教とキリスト教と仏教を統合した宗教だが、キリスト教の一派とする。ペルシャにはじまり、中央アジア(現在のウズベキスタン)などを經由して 11 世紀には中国にも広がった。

アジア地方に行われるモゴルの教は、いわゆる回教(イスラム教)です。(アフリカ地方で、トルコ人が信仰するのも回教である。同じヨーロッパ地方でも、ムスコービアの風俗はモゴルに似るといふから、回教を奉じているのか、この辺はわからなかった。)

この外に、中国で尊信するものでコンフウジョス(儒教)といい、(これ儒教をまもるも

のは自然に人倫の道を守るとの学だという。一方、キリスト教では、天地万物がみずから成ることはなく、皆デウスが造ったという。しかし儒では、大極、両儀を生じ、大極すなわち理也などいう。キリスト教ではこれに反対する。）

儒教の徒を称じて、アディエスといいいます。（儒者のことである。）日本において、周孔の道というものがこれです」という。

訳註；コンフウジョス＝儒教。「孔子」を英語で“Confucius” 孔子の教えを“Confucianism” という。

#### 白石の直截なキリスト教批判

私見では、シドッチがキリスト教を説く際、その内容はまったく荒誕浅陋（大袈裟で事実ではなく、しかもあさはか）で、議論の対象にもならない。とはいうものの、あまりに滅茶苦茶だから、一応は説明して議論しておきたい。

まず、西洋でデウスを漢語で天主といい、この点は声音の近いものを採用している。たとえばイエスを訳して、耶蘇と呼ぶのも同じである。西洋の文字は読めないから、漢字を借りて声音をうつしている。西洋語には意味があるかも知れないが、うつした漢字には意味はない。

ところが明末期の利瑪竇（マテオリッチ）が、初めて西洋語を訳して天主の字をあてる際に、ついに単に音を当てただけでなくて解釈まで加えて、デウスつまり天主は上帝のことだとした。その後、各儒者はこの説を間違っただけで採用して、しかもその間違いを認識しない。デウスを訳して天主という。天主が天の主宰者で、経にいう上帝にあたるたると、イエスを訳して耶蘇というが、耶蘇に何も意味はない。

（この点は、我が国で、日の神（天照大神）のことを、漢字を当てて大日靈貴と書くようになったが、文字が共通だからと言って「天照大神は大日如来と同一だ」としたら、ばかげた間違いである。）

訳註：白石のこうした議論は、そそっかしい対応を戒めているわけで、実に論理的で快い。「大日如来」は梵語の概念で、仏教とともに日本に移入されたもの。天照大神は本来の日本製だから同一にはならない。

「書経」でいう所謂上帝の説などは、書をよく読むものには自然にわかることだから、今ここでわざわざ議論するまでもない。もしキリスト教の天主教法の字が梵典を出典としているというなら、もう論外である。（天主教法の字は、最勝王経に出ている。）

シドッチの説をきくと、「西洋語でデウスとは創造主という意味で、その天地万物をはじめから造ったものを指している。しかし、天地万物自ら生まれることはなくて、必ずこれを造るものがある」と力説する。その説の通りなら、デウス自体を何ものかが造って、天地がまだ存在しない時点で生れたことになる。そうでなくてデウスが自ら勝手に生れるのなら、天地も勝手に生まれておかしくない。

その上に、「天地がまだ存在しない時、まず善人のために天堂を造った」という説だが、天地もまだ生じていないのに、人の善悪がすでに決まっているというのも理屈に合わない。そもそも、その天地人物の始めから、天堂地獄の説に至るまで、すべて仏教の説に基づいて造られており、その説をつくるのだから、わざわざこのように論議する必要もなからう。

(まずハライソという天国を作ったという話は、「この世の初めの天地で風が吹き水が減って、次第に沫になり、それが変化して天空となった」という話が荒唐無稽なのと同様に根拠がない。エンジェルの説は光音天人の話に似ており、マサンを食ったという話も、「地味を食って身体が重くなって天人の光が消えた」という話と同じである。「粳米を食って、男女の形が分かれた」という話に似ている。)

「天戒を破った罪が大きいので自ら贖うことができず、デウスがこれをあはれんで、3千年後にイエスになって生れて、罪を贖えた」という説なんか、まるで嬰兒のたわ言である。一方で刑罰をつかさどるものが、一方であわれむべき情を発して、罪を許そうと努めている。マサンを食うなという天戒自体、そもそもデウス自身が課したものではないか。自分が課した罪をゆるすのに、なにほどのことがあるだろうか。さっさと許せばいい。いわんやその罪といったら、マサンという果物を食ったという些細なことだ。

まちがった食事の罪なぞ、何故食った当人が自ら贖うことができず、3千年後に再びデウスが代って罪をうけるのか、そんな必要はないではないか。

デウスがアダンのために罪をうけるのなら、デウス(キリスト)を磔にしたものの国を滅してしまえばいいではないか。

デウスが世界中の人を溺れさせ、教にしたがうものだけに海中の路が開け、またその乗船した船が、大水に漂ひ来りし所の蠣殻の類、現在もあるという説なども納得できない。

デウスはそもそもみづから天地人物を生ずる能力と養う能力があり、大公の父で無上の君というではないか。それならデウス自身が皆を善人につくって、全員をその教えに従わせればいいではないか。それができないで、世界中の人を洪水で絶滅させるとは何事か。

デウスといえども、人をして皆このような善人にはできず、皆この教えを信じさせられないというなら、デウスを天地創造の主とは到底言えないではないか。

たまたまひどく愚で、教があることを知らないものがいたところで、そのものに何の罪があり咎めることがあろうか。それなのに、世界の人をことごとく絶滅させておいて、世界を生み世界を養う大父大君と自称するのはおかしいではないか。

怪石で船の形に似たものや、断崖に螺の殻があるなど、どこの土地にも似たものはいくらかでもある。日本にも、もちろんある。そんなものが、特にデウスに関係があるものか。

十戒というものにしても仏教の説に載っており、ただその他犯(姦通)の戒を、二条に分けているだけだ。今その説を問うと、法王を始めとして、そもそもその徒弟たるものは、皆女子に近づくこともゆるさず、その他尊貴の人でも一妻の外に他犯はしないという。理由は、夫婦相和しでなければならず、乱れは必ずその邪淫によるという。

しかし、世間には父がありながら、その生母の故に子をにくむ例もある。子側から、生母の故に父を怨む場合もある。母が同じなら相愛し、母が異なる場合は相憎む。父子兄弟

が和らかでないのも、時には他犯による。だからこそ、その禁は特に重いという。古来、西洋の諸国戦乱のことをきくと、嗣子が絶えた故によっている。宗教の戒律の結果がこれほど重大なことになるのも、あわれなことである。

イエス誕生の際に、種々の瑞兆があったという。自らデウスの生まれ代りと称している話は、釈迦の生れに際して種々の瑞兆を生じ、天中天（「天上天下唯我独尊」）と自称したという話と同一である。

磔で殺された後に蘇生して、母親に会ったという話だが、これとて小瞿曇が賊とされて木で身を貫かれ、立てて以て標とされ、それを師の大瞿曇が、弟子の小瞿曇の血をとって人をつくったという話と同じだ。教皇シルウエステルが国君の頭頂に聖水を灌ぐ話も、大梵天王が四大海水をその太子の頂上に灌いだという話と同じである。皇帝がローマを施入して精舎を建てたという話は、餅沙王がからんだ竹園精舎を献上して、僧の修練所としたことに似ている。

私は西洋の事柄にことごとくに通暁しているわけではないが、大体のところキリスト教の由来は、仏教の教えから出ているようである。

訳註：小瞿曇と大瞿曇：インドの説話で二人の僧侶の名。小瞿曇は大瞿曇の下で修業していた。小瞿曇が賊とされて木で突き殺されてみせしめにされた。それを師の大瞿曇が悲しみ、その血から土偶をつくり、それがやがて人になったという話。

「キリスト教は仏教のカスを陰（ひそ）かにぬすんで作ったもの」と、鐘子（鐘始声）が言っているが、この説に私は賛成する。

今その説を踏まえてオランダ鏤板の地図をみると、そのデウス降誕の地のユダヤというのは、西印度地方からあまり遠く離れてはいない。シドッチの説では「ユダヤだけはイエスが生れる前に、デウスの教があることを知っていた」という。この他では、こんな風に皆仏教を尊信していたと解釈できる。

西天浮図の説（仏教）がこの地方で行われていたことは、イエスの教えに先行していることの証拠である。イエスの教えをきくと、造像あり、受戒あり、灌頂あり、誦経あり、念珠あり、天堂地獄・輪廻報応の説があり、仏教の言に似ていないことは何もない。しかも、内容が浅陋（あさはか）なことといったら、到底比較にならない。明の人が、自分の国の滅亡の理由を論じて、キリスト教がその一つだとしている。我国でこの数を嚴重に禁じたのは、やり過ぎではない。影響力の重大さを知るものがいなければ、誰がこれを防止できるだろうか。「夷を以て夷を治む」という通り、仏教という外国の力を利用してキリスト教という別の外国に対抗したのである。その時の方便だったのかも知れない。しかし、それは狼を駆逐するのに虎をつかうようなもので、それはそれで懸念がないわけではない。

下巻註（原本頭記せるもの。）

67 頁 植田入道玄佐の上に〔玄佐もと清和源氏にて、渡邊の家をつぎ、又斎藤の家をつぐ。家紋巴なり。典子名虎松、時に三歳だという。〕

68 頁 利子の上に、校者(文彦)云、利瑪竇がたしかに意太黒人なることはききに刊行せし  
采覧異言の跋欄外に辦ぜり。見合すべし。

西洋紀聞 現代語訳 終

=====



## 原文テキスト公開に際して

「西洋紀聞」の原文テキストで電子化されたものは公開されていません。

訳者序に書いたとおり、

### 2. 新井白石（著）、宮崎道生校訂 西洋紀聞 平凡社、東京、1968.

が電子化されて販売されています。しかし、これはパソコンでの処理が不能で、今回の現代語訳にも役立てることができず、極端に使いにくいとかほとんど使用不能でした。

一方岩波文庫版は、画像としてのとりこみは可能ですが、詳細な解説部分などに特殊な印刷法を採用していて、その部分はOCRが不可能で、私にはやはり使いにくいものでした。何とか苦勞して判読はしましたけれども。校訂者の村岡典嗣氏は1946年に亡くなっており、著作権が切れていると判断できるので、後のために電子ファイルを公開しようと考えて、私の作成した電子テキストの公開を決断しました。

訳者序にも述べたように、この岩波文庫版は少し風変わりな印刷で、一部に極端に小さい字を使用し、しかも通常の1行に2行を書き込んでいます。それで、OCRの適用はその部分では実質的に不可能でした。

それだけでなく、私の手元のものは紙型が古い故と判断しますが、文字がつぶれている場合も少なくありません。しかも、私の視力は年齢相応に低下しています（1937年生まれ、仕事の時点で74歳）。それやこれやで、パソコンに該当する文字を探索するのが難儀で、精しい参照に苦勞しました。

そんな訳で、今回の電子テキストに間違いのある可能性が否定できません。なかでも一番怪しくて特に自信がもてないのが、八行の濁点と半濁点の関係で、「ばびぶべぼ」か「ぱぴぷぺぽ」かが、わかりにくく特に細字の部分では不明です。原語にあたればわかるとも云えません。何故なら、原語では“b”なのに、印字は「ぱぴぷぺぽ」となっているものや、逆に原語では“p”なのに、印字は「ばびぶべぼ」のものが散見します。当時と今とは発音や綴りが違うかも知れませんが、白石自身が間違えているかも知れません。

それを勝手な判断で変更するのは、現代語訳は訳者の責任として許されるとしても、原文を変更することは疑問ですので、そのままに残しました。正直なところ、岩波文庫が何故このような不思議な印刷法を採用しているのか、推測さえもできません。しかし、それに苦情を述べても仕方のないことで、私なりに最善を尽くしてはいます。

原文を読みたい方も少なくないでしょうし、そういう方々のために、最高ではないとしても何かの役に立てば幸いです。

便宜のために岩波文庫の頁数を該当箇所に残しました。ただし、文章の切れ目などは場合によって前後にずらせていることをお断りします。

帝京短期大学

諏訪邦夫

2012年3月

## 西洋紀聞 原文 電子テキスト

## 西洋紀聞上巻

13

宝永5年戊子12月6日、西邸にて承りしは、去8月、大隅国の海島に、番夷ありて1人来りとどまる。日本江戸長崎などいふ事の外は、其言語ききわきまふべからず。

みづから紙上に数図をしるして、ロウマ、ナンバン、ロクソン、カステイラ、キリシタンなどさしいひ、ロウマといひし時には、其身をゆびさせり。此事長崎に注進す。阿蘭陀人にたづねとふに、ロウマといふは、西洋イタリヤの地名にて、天主教化の主ある所也。ロクソン、カステイラ等のごときは、いかにも心得がたしといふ。

又南京、寧波、厦門、台湾、広東、東京、暹羅等の人にとふにも、キリシタンといふは、邪教の名目とは聞及びぬ。其余の事は心得られず、と申すといふ也と仰下さる。

承りて、其人、西洋の国より来れるは、一定に侍るならむ。されど、其ことばの聞得べからずと申すは、心得られずと申す。かさねて其故を尋下さる。ふるく候ひし人の申せし事を、承り覚候し事も侍り。彼地方の人は、きわめてよく万国のことばに通じ侍りければ、むかし、ナンバンの人、我国に來りし初、数日がほどに、我国のことばに通じ得て、つゐに其教をも傳へしと申し候ひき。其法の此国に行はれし事も年久しく、其国の人常にゆきかよひ、又此法禁ぜられし時、

14

我国の人其教に随ひしものども、彼国に渡しつかはされしも数多く候ひき。されば、彼国の人、

此土の言葉はよく通じ候ひなむか。我国にもとむる事ありて来らむものの、其ことばに通ぜざらむには、なにによりてか、其志をもとげ候べき。但し五方の語言同じからずして、その中また古

言今言ある事に候へば、其伝習ひし所、我国の中、いつこの人の言葉をか習ひ候ひぬらむ。ましてや、彼国の人、ここに通ぜざる事、すでに百年に近く候へば、今のこと葉に同じからぬ事も候べきか。これらの心得したらむものして、聞かせ候はむには、いかむぞ其このとばをききわきまへぬ事の候べき。

阿蘭陀人の申す所は、猶心得られず、ロクソンと申すは、宋元の代より此かた呂宋などしるせし国にて、其国より出し壺をば、我国の人葉茶を貯ふるに宜しとて、呂宋真壺など申す事は、誰々もしり候ひぬ。

またカステイラと申すは、イタリヤなど聞えし地に近き国にて、むかし、其国にて作り出せし菓子、此土に伝へし物は、今も候なる。これらの事は、某なども其名を聞覚候ものを、其地方の人の心得がたきと申す事、尤心得がたく候かと申す。申す所其謂ありと仰下されたりき。かくて、彼人は、法にまかせて刑せらるべしなど聞えしほどに、其年も暮て、明れば6年巳丑の正月10日に、国葬の御事ありて、それらの事も聞えず、此年もまた暮むとするに、11月の初に至て、去年の冬、大隅国来りとどまれる外国の人、近き程にここに來るべし。其事の由を尋問ふべきもの也と、仰下さる。

=====

15

また去年長崎の奉行所注進の状をも、うつし出されたり。これは、彼来りし由いまだ詳ならず。某が申せし事ありしによりて、某して尋問しめられんために、めされしとぞ聞えし。我国のことばのみならましかは、いかにも聞得べし。おもふに、地方人名、または其教法等の事に至ては、其方言ぞ多かるべき。此法禁の嚴なるによりて、阿蘭陀等の国の通事などいふものも、猶さとし得ぬ所ありと聞えたれば、此事に至ては、

きはめて難事也。此事、奉行の許には其こと葉など翻訳のものありねとおもひしかば、しかる物

のあらむには、借し賜るべき由を申す。其事執政の人々に仰下されしかば、奉行の許より書三冊を進（まい）らす。

借し下されて、これを見るに、其教法の大要など見えて、其こと葉を訳せし事はあらず。されど、其中1、2の用にあたる所なきにしもあらず。かくて、彼人ここにに至れりと聞えて、同月の22日に、奉行所にして召対すべきに及びて、前の日奉行の人々にあひて、其事を約す。

横田備中守・柳沢八郎衛門。其日巳の時過るほどに、かしこにゆきむかふ。きりしたむ屋敷という城北小石川にあり。

奉行の人々出合ひて、かれが携来りし物どもを見る。我国にて新たに製られし金銭等の物見えて、また法衣也といふものの、白布にて作れるを、よくよく見るに、そのうらの方に、我国の南都にて織出す布の朱印ある也。奉行の人々にも見せ、其余のものにも見せしに、うたがふべくもあらずといふ。心得ぬ事に思いしほどに、物ども皆見はてて、長崎より差副てつかはせし通事のものどもを召す。大通事今村源右衛門英成、稽古通事は品川兵次郎・嘉福喜蔵といふ。此二人の名は聞かず。某、彼輩にむかひて、むかしナンバンの人、長崎にありし時は、其国の通事等あり。

16

其法禁ぜられし初には、その人猶ありしかど、それら死うせし後は、其学を伝ふるものあるべきにもあらず。いはんや、法禁の初は、あやまりても、彼地方のこと葉をいひしものは、嚴刑をまぬかれず。たとひ其言葉を聞伝しものも、敢て口より出すべき事にもあらず。かくて、7、80年をすぎぬれば、今はそのことばに通ぜむものあるべきにあらず。凡そ五方の語言同じからねば、たとへば、今長崎の人をして、陸奥の方言聞しめむには、心得ぬ事多かるべけれど、さすがに、我国の内のことばなれば、かくいふ事は、此ことにやと、をしはからむには、あたらずといふとも遠からじ。我万国の図を見るに、イタリヤ・阿蘭陀、同じく欧羅巴の地にありて、相さる事の近きは長崎・陸奥相さるの遠きがごとくにはあらず。さらば、阿蘭陀の言葉によりて、彼地方のことばををしはからむに、其七八には通じぬべき事にこそ。されど、おほやけに申さむ事には、正しく其語を学得ざらむ事、をしはかりて申さむは、しかるべからず。

今日の事、前日の事に同じからず。これおほやけに申す事にはあらず。某がために、そのこと葉を通ずべきためなれば、たとひ彼申さむ事、心得ぬ折ありとも、かたがたが心にな

しはかりおもふ所を以て、某に申せ。某も又かたがたが申す所、正しく彼申す折の義に合へりと、信じ用ひんともおもはず。さらば、かたがたがをしはかる所の僻事ありとも、其罪にもあらず。奉行の人々も聞しめされよ。彼等もとより学び得ぬ所なれば、たとひ解し申す所の、訛り多しとも、咎給ふべき事にあらずと申す。人々も承りぬと答らる。

17

かくて、午の時すぐる程にかのものを召出せり。

二人して左右をさしはさみたすけて、庭上に至

り、人々にむかひて拝す。坐を命じてのち、庭上に設置し榻（椅子、こしかけ）につく。

（其庁事は南面に板縁あり、縁をさる事三尺ばかりにして、榻をまうく。奉行の人々、縁に近く坐し、某は座の上の少し奥に坐したり。大通事は板縁の上、西に跪き、稽古通事二人は板縁の上、東に跪く。かのもの、長途を輿中にのみありて、歩に堪ず、獄中よりここに至るをも、輿してめし致せり。これによりて、人をしてさしはさみたすけし也。榻につきし後は、寄騎の侍一人、歩卒二人、そのかたはらとうしろとにありて、筵の上に跪き居れり。此のちの儀、みなこれに同じ。）

其たけ高き事、六尺にははるかに過ぎぬべし。普通の人、其肩にも及ばず。頭かぶろにして（??）髪黒く、眼ふかく、鼻高し。身には茶褐色なる袖細の綿入れし、我国の紬の服せり。これは、薩州の国守のあたへし所也といふ。肌には白き木綿のひとへなるをきたりき。

（坐につきし時、右手にて、額に符字かきし儀あり。此のちも常にかくのごとし。其説は末に見ゆ。）

かくて、奉行の人々、通事していはせし事ありしに、拝して後にこれに答ふ。これは、天すでに寒くして、其衣薄ければ、衣あたへしにうけず。その故は、其教戒に、その法を受ざる人の物、うける事なきによれり。されど、飲食の物のごときは、其国命を達せむほどの性命のためなれば、日々にりんぞくを費す事、国恩を荷ふ事すでに重し、いかで衣服の物まで給りて、我禁戒にそむくべき。

はじめ、薩州の国守の給りし物、身にまとぬれば、寒をふせぐにたれり。心をわづらはし給ふ事あるべからずと申切りたりし由也。此間対事終りて後、人々、某を揖して坐をすすめしめらる。此日は某、他事に及ばず。ただ彼国地方の事など、通事に命じて問はしめて、其いふ所を聞く。

（万国の図を携ゆきて、其図をしめしてたづねとふに、此図は、此土[日本、日本語?]にしてしるされし所なれば、精しからずといふ。奉行所に、ふるき図ありと聞えしかば、かさねては、其図を出さるべしと相約したりき。）

揖：お辞儀の一種。

18

其問ふ所に答ふる所をきくに、かねておもひはかりしごとくに、事わづらはしからず。

但し、そのいふ所は、我国畿内山陰西南海道の方言うちまじりて、彼地方の声音にて操り出しぬれば、正しく其事とおもふも疑ぬべき事あり。かれまた、そのいふところを、こなたの人の聞得がたき事もやあるとおもひしにや。必ずそのことばを反覆していふ。又あまり伝へし事も、すくなからず。まして、彼地名人名に限りて其土に称ずるままにいひしかば、それらの事は、よくよくたづねきはめて、地名人名等をわかす。又通事等は、阿蘭陀の語に学び熟しぬれば、旧習にひかれて、彼いふ所のごとくにいひ得がたき事どもあるを、をしへいふ事などもありし。かくして打聞く事 一時（ひととき、2時間）ばかりの後には、某も、みづから問ひもし、答へもする事共ありて、日すでに西に傾きしかば、奉行の人々に、またこそ参るべけれと、いとま乞ひす。ここに至て、彼人、通事にむかひて、某ここに来りし事は、我教を伝へまいらせて、いかにも此土の人をも利し、世をも濟（すく）はむといふにあり。それに、某が来りしより、人々をはじめて、多くの人をわづらはし候事、誠に本意にあらず。ここに来りしのち、年すでに暮むとし、天また寒く、雪もほどなく来らむとす。これにありあふ御侍を初て、人々日夜のさかひもなく、某を守り居給ふを、見るに忍びず。かく守り居給ふは、某もしもにげさる事もありなむがためにぞ候らむ。

## 19

万里の風波を凌ぎ来りしも、いかにもして、此土に参りて、国命を達せむがために候に、ねがひのままに、此折には来りぬ。此所をさりて、又いづれのかたにかのがれ候べき。たとひ又、其ここをにげさるとも、此国の人にも似ざらむものの、いづれのかたに、身を一日もよせ候事のかなひ候べき。されど、仰によりて守らせ給はむ上は、其守怠り給ふべき事然るべからず、昼はいかにも候へかし、夜る夜るは、手かし足かしをも入られて、獄中につなぎ置き、人々をば、夜を心やすくぬねられ候やうに、よきに申して給るべしといふ。奉行の人々も、其由を聞て、あはれとおもひし気色ありしを、某、此ものは、おもふにも似ぬいつはりあるものかな、といひしを、大きに恨みおもひし気色にて、すべて、人のまことなきほどの恥辱は候はず。まして、妄語の事に至りては、我法の大戒に候ものを。某、事の情をわきまへしより此かた、つみに一言のいつはり申したる事は候はず。殿には、いかにかかる事をば仰候ぞや、と申す。今、汝のいひし所は、年くれ、天も寒きに、ここに候ものの、よるひるとなく、汝を守り居るが、見るに堪えがたさに、かくは申すかと問ふ。其事に候と答ふ。さればこそ、其申す所は、いつはりにてあるなれ。彼等が汝を守るも、奉行の人々の命を重んじぬるが故也。又、奉行の人々も、おほやけの仰をうけて、汝を守らせ給ひねれば、汝がいかにも事故なからむ事をおもひ給ふが故に、衣うすく、肌寒からむ事をうれへて、衣給らむとのたまふ事、度々におよびぬ。もし今汝が申す所のまことならむには、などか、此人々のうれへおもひ給ふ所をやすむじまいらせざらむ。

## 20

もし此人々のうれへ給ふ所をも、汝が法のためにかへり見ざる所あらは、何条、ここに候ものどもの、法のために汝を守る事、かへり見おもふにはおよぶべき。されば、汝のさきに申せし所の誠ならむには、今申す所はいつはれる也。今申す所のまことならむには、前

に申せし所はいつはれる也。此事いかにも申しひらくべしといひしかば、大きに恥おもひし気色にて、今の仰せを承り候へば、さきに申せし事は、誠にあやまり候ひき。さらば、いかにも衣給りて、御奉行の心をやすむじまいらすべきに候と申す。

奉行の人々も、よくこそそのたまひ給つれといひて、悦びあへり。かさねて、又通事にむかひて、同じき御恩に候へども、ねがはくは、給らむもの、絹紬の類は、某が心なをやすかるべからず。たゞ木綿の類を以て製し給り候やうに、たのみまいらす候といふ。すでに日くれぬべければ、かれをも獄中に還し、某も帰りぬ。

明れば23日の夜、通事等、某が家にめして、きのふかのものの申せし事の、心得ぬ事ども、尋ねとふ事あり。

25日に、またかしこにゆく。奉行の人々も出あひて彼人召出したり。けふは、かの奉行所にある所の万国の図を、出されしをもて、彼地方の事をとふに、事明らかにして、異聞ども多かりき。此図は、七十余年前に作りし所にて、今は、彼国にも得やすからぬ物也。ここかしこ、やぶれし事、惜しむべき事也。修補して、後に伝へらるべすなど申しき。けふも、巳の時過る頃より、未の初まで問対して、かれをば還しつ。

=====

けふは、奉行所より給はりし木綿衣をかさねて、其事を謝す。獄中のやうをも見給へとて、奉行の人々案内してゆく。獄屋の北の方に家あり。そこに、むかし、彼教の師、正に帰したるを、置れし所也といふ。年すでに老たる夫婦二人のものありて、奉行の人々を迎持したり。これは罪あるものの子どもの孥（）となりしを、かのここに按置せられしもの奴牌に給りしが、夫婦となされし也。これらは、其教をうけなどいふものにはあらねど、いとけなきより、さるものめしつかひし所なれば、獄門を出る事をもゆるされず、奉行所より衣食して、老を送らしむる也けり。さて、彼獄舎を見るに、大きな獄を、厚板にて隔てて三つとなし、その西の一間に置く也。赤き紙を剪て、十字を作りて、西の壁にをして、その下に、法師の誦経するやうに、その教の経文を、暗誦して居けり。それが居る所の南に舎ありて、守れるものども守り居たり。ここらの事ども見はてて後に還れり。晦日に、またゆきむかふ。けふは、奉行の人々、出合給ふにはおよぶまじと申しければ、出合ふにも及ばれず。けふは、過し頃たづねし事共の、なをとふべき事あるを尋問ひて、日を暮しつ。すべて、此ほど尋問ふ事共、彼地方の事のみにして、かれがここに来れる由をも、又其教の旨をも、問ふに及ばず。かれは、事にふれて、その事どもいひ出しぬれど、そのいらへをもせで、うちすぎたりき。

その明の日に、申上しは、きのふ迄に、彼人を見候事凡三日。今は、彼が申すほどの事、聞まがふべくもあらず。かれも又、某申すほどの事共、よく聞わかち候ひなむ。此上は、かれが来りし由をもたづねきはめはやと存ず。さらむにおゐては、かれが申すところ、必ず、その教の旨にわたり候べければ、奉行の人々も出あひて、事の次第をよく承れと、仰下さるべくや候はんと申す。聞召されし由、仰下されたり。奉行の人々にも、出合ひ給ふべしといひやりて、十二月の四日にゆきむかふ。奉行の人々も出合たり。彼人を召出して、ここに来れる事の由をも問ひ、又いかなる法を、我国にはひろめむとはおもひて来れるにや、とたづねとふに、かれ悦びに堪ずして、某、六年がさきに、ここに使たるべき事を承りて、万里の風浪をしのぎ来りて、つゐに国都に至れり。しかるに、けふしも、本国にありては、新年の初の日として、人皆相賀する事に候に、初て我法の事をも聞召れん事を承り候は、其幸これに過ず候とて、

(彼方にしては、12月4日をもって歳首とするか。但し暦法のたがひあるによれるか。)

その教えの事ども、説き尽くしぬ。其説、はじめ奉行所より出せし三冊の書に見えし所に、たがふ所もあらず。たゞ其方言の同じからずして、地名人名、すこしく同じからぬあれども、皆々その音の転じたるのみなりき。凡そ其人博聞強記にして、彼方多学の人と聞えて、天文地理の事に至ては、企て及ぶべしとも覚えず。



(彼地方の事を問ひしに、答えし所は、下にしるしぬ。彼方の学、其の科多し。それが中、16科には通じたりと申し。たとえば、其の天文の事のごときは、初見の日に、坐久しくして、日すでに傾きたれば、某奉行の人にむかいて、時は何時にか候はんずらむと問ひしに、此のほとりに、時うつ鐘もなくと申されしに、彼人頭をめぐらして、日のある所を見て、地上にありしおのが影を見て、其の指を屈してかぞふる事ありて、我が国の法にしては、某年某月某日の某時の某刻にて候といいき。これらは其の勾股の法(直角三角形をつかう計算法)にして、たやすき事と見えしかど、かくたやすくいい出しぬべしともおもわれず。又ヲヲランド?板の万国の図をひらきて、エウロパ地方にとりても、ローマはいづこにや、とたづねしかど、番字の極めて小しきなるものなれば、通事等もとめ得るあたわず。彼の人チルチヌスや候という。通事等なしと答えたり。何事にやといえは、ヲヲランドの語にパツスルと申すものの、イタリヤ語にては、コンパスと申すものの事に候と申す。

23

某その物はここにありといいて、ふところにせしものを取出してあたふるに、此の物は、その合うとおろゆるびて、用にあたりがたく候えども、なからむにはまさりぬといいて、其の図のうちに、はかるべき所を小しく図したる所のあるを見て、筆をもとめて、其の字をうつしとりて、かのコンパスをもちて、その分数をはかりとりて、彼図は坐上にあるを、其の身は庭上の榻にありながら、手をさしのばして、其の小しく図したる所よりして、蜘蛛の巣のごとくに、絵かきし線路をたづねて、かなたこなたへかぞえもてゆくほどに、其手のおよびがたきほどの所に至りて、ここにや候、見給うべしといいて、コンパスをさしたる。よりて見るに、小しきなる国の、針の孔のごとくなる中に、コンパスのさきはとまりぬ。その国のかたはらにローマンという番字ありと通事等申す。此の余、ヲヲランドを始めて、其の地方の国々のある所を問うに、前の法のごとくにして、一所もさし損ぜし所あらず。又我が国にして、此の所はいづこぞととうに、又前の法のごとくにして、此所にやいうに、これも番字にてエドとするせしところなり。

これら定まれる法ありと見えしかど、其の事に精しからずしては、かくたやすかるべき事にもあらず。すべてこれらの事、学び得べしやとといしに、これらの事のごとき、あながちに数の精しさを待つまでも候はず。いかにもたやすく学び得給うべき事也といいき。) ここまで細字

また、謹愨(きんこく:愨は「つつしむ」)にして、よく小善にも服する所ありき。

細字

(其人、庭上の榻につくに、まづ手を供して、一拝して、榻につき、右の大指を以て、額にあたりて、画する事ありてのちに、目を瞑して坐す。坐する事久けれども、ただ泥塑の像のごとくにして、動くことなく、奉行の人々、また某の、坐をたつ事あれば、必ず起ちて拝して坐す。還り来りて、坐につくを見ても必ず起ちて拝して坐す。此儀日々にかはらず。ある時、奉行の人のくさめせしを見て、其人にむかひて、呪誦して、通事にむかひ、

天寒し、衣をかさねらるべきか、我方の人は、くさめをする事をばつつしむ事也。むかし、通国此病せし事ありしが故也。といひき。又通事等ラテン語を通じて訛れるをば、打返し打返しをしへいひて、習い得れば、大きに賛美す、某がいひしをききて、通事の人々は、なまじみにヲヲランドの語に学び熟したれば、旧習の除きがたき所ありて、今仰候ごとくにはあらず、これもとより我方の語に習ひ給はぬが故によりぬ。などいひてわらひたりき。又ヲヲランドの戦船には、某傍に多くの窓をもうけし事、上中下の三層あり。毎窓に大砲を出せしといふ事を、いひ得ずして、かたどりいはむとする事も、たやすからず。)

#### 細字

(某、左手を側(しばだ)てて、その四指の間より右手の指頭三つを出して見せぬれば、さこそ候ひしといひて、通事等にむかひて、敏捷におはし候などといふ事共ありき。ノーワヲヲランデヤの地ここをさる事いかほどにやとたづねしに、答へず。また問ひしに通事にむかひて、我法の大戒、人を殺すに過る事あらず。我、いかでか、人ををしへて、人の国をうかがはせ候べきといふ。某、そのいふ所をききて、心得られず。いかにかくいふにや、と通詞等に問はせしに、存ずる所の候へば、これら地方の事は、答へ申すべからずといふ。猶又その所存を問わしむるに、此ほど、此人を見まいらするに、此国におゐての事は存ぜず、我方におはしまさむには、大きにする事なくしておはすべき人にあらず。ヲヲランデヤノーワ、ここをさる事遠からず。此の人、その地とり得給はむと思ひ給はば、いとたやすかるべし。さらば、其路のよる所を詳かに申さむには、人の国うつ事ををしへみちびくにこそあれといふ。某これをききて、奉行の人々、聞給はむもかたはらいたければ、今きくがごときは、たとひ某そのこころざしありとも、我が国に厳法ありて、私に一兵を動かすことかなひがたしといひてわらひたりき。すべて其過慮、かくのごとくなるに至れる事どもありき。)

ここまで細字

#### 24

其の教法を説くに至っては、一言の道にちかき所もあらず、智愚たちまちに地を易へて、二人の言を聞くに似たり。ここに知りぬ、彼方の学のごときは、ただ其形と器とに精しき事を、所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず。さらば、天地のごときも、これを造れるものありといふ事、怪しむにはたらず。かくて、問対の事共、其大略をしるす所二冊、進呈す。すでにして、明断ありて、我国耶蘇の法を禁ずること年あり。今彼徒のここに来れる、行人の其冕を告訴ふるもの也と称ず。

もし行人ならむには、いかむぞ、其国信とすべきものをば帶來らずして、詭りて我国の人となり来れる。たとひ言ふところ実ならむにも、跡のごときは疑ふべし。しかりといへども、称ずる所は、彼国の行人也。例によりて誅すべからず。後來其言の徴あらむを待ちて、宜く処決すべきもの也へと仰下さる。某、その事情をはかるに、此後に至ても、彼国人のここに来らむ事は、絶ゆべからず。されば後按のために、此たびの事ども録して、進呈すべき由を言上し訖ぬ。いくほどなくして、上にもかくれさせ給ひしほどに、正徳四年甲午の冬に至て、かのむかし其教の師の正に帰せしものの奴婢たりしといふ夫婦のもの

(この教師は、黒川壽庵といひしなり。番名はフランシスコ・チウアンといひしか。奴婢の名は、男は長助、女ははるといふ。)

自首して、むかし二人が主にて候もの世にありし時に、ひそかに其法をさづけしかども、国の大禁にそむくべしとも存ぜず、年を経しに、此ほど、彼国人の、我法のために身をかへり見ず、

万里にしてここに来り、とらはれ居候を見て、我等、いくほどなき身を惜しみて、長く地獄に

=====

25

墮し候はん事のあさましさに、彼人に受戒して、其徒と罷成り候ひぬ。これらの事、申さざらむは、国恩にそむくに似て候へば、あらはし申す所也。いかにも、法にまかせて、其罪には行はるべしと申す。まづ二人をば、其所をかへて、わかち置かる。明年三月、ヲヲランド人の朝貢せし時、其通事して、ローマ人の、初申せし所にたがひて、ひそかに、かの夫婦のものに、戒さづけし罪を糾され、獄中に繋がる。ここに至て、其真情敗露はれて、大音をあげて、ののしりよばわり、彼夫婦のもの名をよびて、其信を固して、死に至て志を変ずまじき由をすすむる事、日夜に絶えず。此の年来れるヲヲランド人申せしは、はじめ、北京におもむきしといふ、トーマス・テトルノンも、ほどなく其国に帰れりと聞ゆ。これは初よりかしこにありし其国人に妬忌せられて、とどまり居る事かなひがたくて、など承りぬ。と申しき。また此人のこゝに来れる事、いかにやおもふと問ふに、されば、此事、我方の人も、心得ぬ事に申す也。或は、もし其罪を犯す事ありて、すでに死に当り候ひしを、いかにも其罪贖うべき事をおもひはかりて、比国に来らむ事を望みしかば、彼国の人も、もしかれが申すごとくに、申ひらく事もありなむには、何の幸かこれにすぐべき。又国法のごとくに殺されんには、もとよりの事也とおもひて、望請う所に任せてもや候らむと申しき。

(ヲヲランド人の説のごときも、さもあるべしや。某がおもう所はしかはあらず。彼の国の儀に、其の法行わるべき時至りぬとおもう所ありて、まず試にこの人をつかわせしにや、とおもう所ある也。某かく思い合わせし事は、此の人のたづさえ来りし我が国新製の金と銭との二つにあり。某初に彼もち来りし黄金三品の事を問いし時に、本国の事のごときは、エウロパ諸国の布施によりて、金銀等の財貨、もとむる事を待たずして、猶あまりありといい、またロソンの地に白銀多く出ぬる事、また我が国東南の海嶋より金銀多く出ぬるを、イスパニヤ人のとり得ることなどいい、これらの物共の事、本国にいい送るまでもなく、我が文一つかきてロソンに送りつかわずとも、いかほどにも来るべき事なり、と申せしに、某が耳にはとまりて、此の人の今なにの故に来れるにやと心得ぬ事におもいしが、おもい合わせぬ。

その国にて、我が国黄金の製と、銅銭の製との改まりしを伝えみて、国財以ての外に窮したり、国民さだめてくるしむなむ。民くるしく時は、命行われざる所あり、たとひ其の禁を行わるとも、金銀もてみちびきなば、其の禁開く事ありぬと、おもひ謀りにやとおも

いしかば、此ののちは、金銀等の事は、いいも出す事はせざりき。)

かくて、此の年の冬 10 月 7 日に、彼奴なるものは病し死す。55 歳と聞こえき。其の月の半ばより、ローマン人も、身病する事ありて、同じき 21 日の夜半に死しぬ。其の歳は 47 歳にやなりぬべき。

前代の御時に、某申せし事もあれば、今此事をしるす事凡て三巻。

初には、此事の始末をしるして、長崎奉行所より注進せし大略をうつして附す。

中には、其人のいひし海外諸国の事共をしるす。

終には、其問ひしに答へし事共の概要をしるす。

此事、すでに年月を隔てぬれば、今はわすれし事共多くして、そのこと葉のごとき、その事のごときは、なをしるすところの誤りのみぞ多かるべき。それが中に、海外諸国の事に係れる所は、異聞博からむために、もとむる人もありなむには、秘すべき事にもあらず。巻の終の事に至りては、外人のために伝へむ事、しかるべからず。

もし、おはやけよりめしたづねらるる事もあらむには、此限りにあらざる事はいふに及ばず。

=====

## 附録

大西人、始来りし時の事、ここにみえたり。

大隅国馭謨（ごむ）郡の海上、屋久島の地栗生（くりふ）村というところに、阿波国久保浦といふ所の漁人等、来り止りて、魚捕る事を業とするあり。宝永 5 年（1708）戌子、8 月 28 日、これら 7 人、舟をうかべて、同き島の湯泊（ゆどまり）といふ村の沖に出づ。陸よりは三里許へだてたらむ海の上に、目なれぬ船の大きなるが、一隻うかびぬしを見つけて、栗生村をさして帰るに、彼大きなる船より、小きなる舟おろして、其舟に帆かけ、こなたの舟を追来る。こなたの舟にも帆かけてはしり帰るを、彼小舟にもうちがひといふものを添て、追来るに、わづかに十間ばかりをへだてて見るに、其舟には、目なれぬものども十人ばかり乗たるが、其中 1 人、水をこふさましたり。こなたにも、かなふまじき由のさまして、乗りゆくほどに、彼小舟も、大きなる船のかたにむかひて帰りぬ。此日の夕、同き島の南にあたる、尾野間（おのま）といふ村の沖に、帆の数多き船の、小舟を引たるが一隻、東をさしてゆくあるを、村のものども、あやしみ見て、打出て守り居るに、夜に入り空くもりぬれば、その行方をしらず。明れば 29 日の朝、尾野間より二里許の西にある、湯泊といふ村の沖のかたに、きのふ見えしごとくの船見えしかど、北風つよくして、南をさしてゆきしほどに、午の時に至て



は、帆影も見えずなりき。此日彼島の恋泊（こいどまり）という村の人、（藤兵衛という百姓也。）炭焼む料に、松下といふ所にゆきて木を伐るに、うしろのかたにして、人の声したりけるをかへり見るに、刀帯たるものの、手して招く一人あり。其いふ所のことばも聞わかつべからず。水をこふさまをしければ、器に水汲てさしをく。ちかづき呑て、又まねきしかど、その人、刀を帯たれば、おそれて近づかず。かれも其心をさとりぬと見えて、やがて、刀を鞘ながらぬきてさし出しければ、近づくに黄金の方なる、1つ取出してあたふ。此ものきのふ見えし船なる人の、陸に上りしにや、とおもひしかば、其刀をも金をもとらずして、磯のかたに打出て見るに、其船も見えず。また外に人ありとも見えず。我すむかたにたち歸りて、近きほとりの村々に、人はしらかして、かくとつぐ。平田といふ村のもの二人、出来しをともなひて、（字は五次右衛門、喜兵衛という者ども。）松下にゆきて見るに、彼人、恋泊のかたを指さして、かしこにゆかむといふさましたり。足つかれねとみえしかば、1人それをたすけ、1人は其刀をもち、1人はそれが携へし袋やうの物もちて、恋泊のもの家にゐて行て、物したためてくはず。かの人、また黄金のまろき二つと、方なる一つとを取出て、あるじにあたふ。（藤兵衛なり）

辞してとらず。その物いひ、きゝわきまふべからざれども、其形は我が国の人也。（さかやき、この人のごとくにして、身には、木綿の浅黄色なるを、碁盤のすじのごとくに染めなしたるに、茶色のうらつけたるを着て、刀の長さ二尺四寸位なるを、我国の飾のごとくにしたる一腰（ひとふり）をさしたるなり。）

=====

29

此事、島を守れるものの許に聞えしかば、宮之浦といふ所に、かのもの置くべき所作り出して、うつし置て、薩摩守の許につぐ。薩州の家人等、連署して、其事を長崎の奉行所に告ぐ。

(其書に、9月13日とするす。彼家人等、島津大蔵、同将監、新納市正、種子島蔵人、連署す。長崎の奉行は、永井讃岐守、別所播磨守也。)

彼人、長崎に送り致すべき由をいひ送れり。其後、又薩州より彼ものの、圈作りていひしことばなどの事を、長崎にいひ送れり。(前に見えし、ローマン、ロクソンなどの事也。)

阿蘭陀の人を始て、長崎にありあふ外国の人共、奉行所に召集て、かれがいひし事ども尋問ふに、各其事曉す(さとす)べからずとこたふ。かくて、冬も末に至りぬれば、北風吹つゞき、海の上波あらければ、彼ものを送致する船、二たびまで風に吹もどされぬ。これをむかふる薩州のもの、つとめて風波ををし凌ぎ、からうじて大隅の国に至り、それより又長崎に送り致す。かのもの、ひたすら江戸におもむかん事をこふて、長崎にゆかむ事をねがはざりし気色しけれど、其望に任すべきにあらず。多くの挽船共して、長崎の地方網場といふ所に至りぬ。ここより船をとゞめ、陸よりして長崎にむかへ入れて、獄舎に置く。阿蘭陀の通事共して、彼来れる由をとふに、地名などは、聞も及びしあれど、其余の事ども、ききわくべからずといふ。阿蘭陀人をばことにくみおもふ由なれば、其人して問はむ事もしかるべからず。障子を隔て、阿蘭陀人して、そのいふ事を聞きむるに、これも聞しらぬ多く、ましてそのいふ所、半ば我国のことばもまじはりぬと聞えて、猶々聞わかつ事かなはず。彼人も、いかにもして、思ふ事共いひあらはしてむ、とおもふ気色なりしかば、たづぬべき事共、ここにありあふ阿蘭陀人してとふべしといひしに、さも侍らむと答へしによりて、

=====

30

阿蘭陀人のうちにて、むかし彼地方のことば学習ひしものの、アアテレヤンドウといひしを、その甲心丹（カピタン：官長）ヤスフルハンマンステアルといふもの、召ぐして出合たり。

（彼地方のことばといふはラテンのことばといふ事也。詳に下に見えたり。）

これによりて、彼人、ここに来れる事の由は聞えて、其由をもて、奉行所の注進あり。

（後にきくに、彼人、阿蘭陀人に対せし礼、ことに驕（おご）れるありさまにて、阿蘭陀の人、いかにおもふ所ありしにや。ことにおそれし色あらはれき。彼国のこと葉学び得しといふも、六年にして、其の業を廃しければ、ことごとくには通じがたくて、その通じ得ぬ所々は、かの人いひをしへてのちに、其事を解したりといふ也。）

そののち、長崎よりして、又ここに送り致せし事は、其明年の夏の末に至て、参らせよと仰せ下されしによりして、去年より彼もののいふ事共、聞なれし通事 3 人つけて、9 月 25 日に、長崎を出したてしに、11 月の半に來り着ぬれば、天主の法を禁ずる事、つかさどれる奉行の人々に、仰せて、その庁事の獄舎に按置せられし也。これより後の事共は前にしるせし所にみえたり。奉行の人々のいひしは、彼人日々に食ふ所の物、定れる限等あり。初め長崎に至りし日より、ここに来るに及びて、すこしも相変ぜず。

細字

（よのつねの日には、午時と、日没の後と、二度食う。その食は、飯、汁は、小麦の団子を、うすき醤油にあぶらさしたるに、魚と蘿蔔（らふく：だいこんのことらしい）とひとつもじ（「ねぎ」のこと？）とをゐれて、煮たるなり。酢と焼き塩とを少しく副ふ。菓子には、焼き栗四つ、蜜柑二つ、干し柿五つ、丸柿二つ、パン一つ、その齋戒の日には、午時にただ一度食う。但し、菓子は、その日も両度食いて、其数をくわう。焼栗八つ、蜜柑四つ、干し柿十、丸柿四つ、パン二つを二度食う。その菜の皮実等は、いかにやすらむ、すてしあとも見えず。齋戒の日とても、魚をも食う。またここに来りしより、つみに浴せし事もあらず。されと垢づきけがれし事もあらず。これらの食事の外に、湯をも水をも飲みし事もなしといふ。）

その携持し袋にいれし所は、銅像、画像、これに供養すべき器具、法衣、念珠、此余は、書、凡十六冊また錠のごとき黄金 181、弾のごとくなる黄金 160、我国元禄年製の金錠 18、我国の銭 76 文、康熙銭 31 文等あり。その中、書 6 冊は、つねに身に随へて、手を停めずしてこれを誦ずといふ。

=====

31

細字



(これらの物の形態等、つまびらかにしむ事無用也。故にここに略す。)

正徳五年乙未二月中澣

澣は「かん、がん、あらう」

筑後守従五位下源君美

白石

君美

原印

## 西洋紀聞 中巻

33

大地、海水と相合て、其形圓なる事、球のごとくにして、天円の中に居る。

たとへば鶏子の黄なる、青き内にあるがごとし。其地球の周国九万里にして、上下四旁、皆人ありて居れり。凡そ其の地をわかちて、五大州となす。

一つにエウロパ、(漢に欧羅巴と訳す。其れ、はじめ漢音のごとくによびしを、西人聞いて、これ支那の音、非也という。後に来たオランダ人に問うに、そのいうところもまた然り也。むかし、我俗、ヨウロウハといいしは、漢音の転じ訛れるものなり。俗に奥南蛮という地方、即ち此れ也。)

二つにアフリカ、(漢に利未亜(リウイヤア)と訳せるは、即ち此れ也。)

三つにアジア、(漢に亜細亜と訳するは、即ち此れ也。○オランダ鏤板の図に拠るに、以上三大州、共に一圈の内において、地上界とす。)

鏤(る)：きざみつける。金属に彫るなどの意。

四つにはノオルト・アメリカ、(蕃語ノオルトというは、此れには南という。漢には南アメリカと訳するは、即ち此れ也。)

訳註：この「ノオルト＝南、ソイデ＝北」は間違いで、白石の誤記とされている。

五つにはソイデ、アメリカ、(ソイデというは、此れに北という。漢に北亜墨利加という。○オランダ鏤板の図によるに、以上二大州、共に一圈の内において、地上界とす。)

其のエウロパの地方、南はマーレ、カヌピヨム、(漢に訳して地中海という。)

北は、グルウソランダヤ(漢訳は臥兎浪徳ともいう。)、オセヤーヌス、ツフネンテリヨナーリス、(漢に、ベツルソキヲハイと訳せし地方也)。東は、タナイス、(漢にダナイホリ(大乃河)と訳せり)。ホントスエキシーノス、(漢に黒河的湖と訳す)。西は、マーレ、アットランティウム(漢に翻して大西洋という。)に至る。

○アフリカ地方、南はカアボテボネイスフランサ、(漢にダイランシャン(大浪山)という地方、猶詳に下に見えたり。)北は、マーレ、ニゲーテラーニウム、(すなわち地中海)、東はマーレ、ルーブロム、(漢に訳して西紅海という)、マタカスカ、(アフリカ東南海中の島也。詳なる事は下にみゆ)。

34

西は、ヲセヤーヌス・エテウピークス(利未亜西方の海也。)に至る。ただ、其の東北の地、僅かに一路ありて、アジアの地と相聯れり。

○アジア地方は、東はヲセヤーヌス・ネンシス（漢に訳して小東洋という）の諸島に至り、（ヤアパン、リウキウ、エゾなどの国をさす也。ヤアパンは日本也。リウキウは琉球也。エゾは、野作也）。西はタナイス、（すなわち大乃河）。ホントスエキシーノス、（すなわち黒河的湖）。マーレ・ニゲーテラーニウム、（すなわち地中海、）マーレ、ルーブロム、（すなわち西紅海）。マーレ、ランチードル、（漢に訳して南海という）の諸島、（スマアタラは沙馬大蠟、ロソン等の地をさす）に至り、北は、タルターリヤ、マーリヤ（タルターリヤは韃靼国、マーリヤは北に海という。すなわちこれ、韃靼の北海の事をいう也）に至る。

○ノオルト・アメリカの地、四海のためにかこまれて、其西北僅かに一路ありて、ソイデアメリカの地に相連れり。（其東北、海を隔ててすなわちアフリカ西南の地方に相当れり。其東北海をマーレ・テルノルといい、西海をヲセヤーヌス・ベルヒヤーヌスという。）

○ソイデ・アメリカの地、東南の方、一路僅かにノオルト・アメリカに通じ、其の西南は、マーレ・テルヌルに至り、（これその南海の名なり）北は、グルウンランドデヤに相連れりて、其の西北の地、いずれの所に至ることを詳にせず。（其の西北の方は、すなわち日本、野作等に当たれり。）其の東はすなわち、マーレ・アツトランテイフムにのぞめり。（すなわち、大西洋。）

（按ずるに、大西洋地球地平等の図、其の由り来る所、いまだ詳ならず。大明の呉中明、万国坤輿図に題して、欧羅巴国中。鏤（ちりば）めて旧本有。蓋し其の国の人。及びフランキイ（払郎機）人。皆遠游を好む。時に、絶域を経ては、即ち相伝而して之を誌す。積漸年久しく。稍其の形之大全を得るといふ。我今大西人（シドチ）に遇いて、欧羅巴鏤板の輿地図を出して、其説を問うに、彼其の図を見て、これ七十年前、ヲヲランデヤ人の鏤め（ちりばめ）し所なり。

35

其の精妙いふべからず。今は、西洋地方にも得易からざる所也という。そのヲヲランデヤというは、即ち今我が国に歳々朝貢する阿蘭陀国の事にて、いふべからず。今は、西洋地方にも得易からざる所也という。そのヲヲランデヤというは、即ち今我が国に歳々朝貢する阿蘭陀国の事にて、万国坤輿図に、ヲヲランデヤ・則蘭地としるして、西洋布地、二島最妙と注せしもの、即ち此れ也。（則蘭地は、すなわちヲヲランド、則蘭地はヲヲランドの属州セーランド、即此なり。）かくて、此の事を以て、阿蘭陀人に問いしに、昔本国の人マゴラアンス（Ferdinand Magellan）、もっとも天文地理の学に精しく、また船を操る事を、兼ね善くす。六大船に、衣食器械等の物、ことごとく載せて、大洋にうかび、万国を周流す。其の船の風濤のために敗れしあれば、其の人物を、各船にわかちのせて、敗れしものをば、焚棄つ。かかりしほどに、六年を経し後に、余す所の船、ただ三隻、本国に帰りぬ。此の時に至って、万国山海輿地の説、最も詳らかなる事を得たり。ただ南方一帯の地と、ソイデ・アメリカ（実は北アメリカのこと）の西北の地方は猶いまだ詳ならずという。今其れヲヲランド鏤板の図に拠りて、万国坤輿図、ならびに三才図絵・月令広義・天経或問・図書編等にみえし所の図を見るに、此れ等は、皆其の大略をしるせしのみ也。亦按ずるに、

万国坤輿図に欧羅巴、利未亜、亜細亜、南北亜墨利加の他に、墨瓦刺泥加（メンソアランジェイキヤ）の一州を加えて、六大州とす。

其の説に、墨瓦蠟加（メソリアニイハ）、払郎機国の姓名に係る。前60年、始めて此の峽を過ぎ、ついにこの地に至る。故に欧羅巴の士、其の姓名を以て峽に名をつけ、海に名をつけ、地に名をつけるという。其の墨瓦蠟（メソリアラ）というは、即ち是マゴラの番音転じ訛れるにて、亦謬りてヲヲランド人を以て、払郎機国人となせし也。されど、阿蘭陀鏤板図には、南方一帯の地は、いまだ詳らかならずして、其の地名をたてしにもあらず。また万国坤輿図説に、南北亜墨利加。全く四海の困む所の為に、南北は微地を以て相聯という。今阿蘭陀鏤板図に拠るに、北亜墨利加、其の西北の地方、いまだ詳ならずとす。（注68、参照）強いて其の説を作るべからず。

## 36

エウロパ諸国。（諸国、ことごとくするすに堪えず。ただ、西人の説にあづかれる事を略記す。余、これに倣う。）

イタアリヤ、（漢訳は意大里亜、また意多礼亜という。）エウロパの南地、地中海上にあり。其の国都をローマンという。（ヲヲランドの語に、ローマという也。漢に訳して、羅馬国という。）

此方教化之主（教皇）、都する所にして、周囲僅かに十八里、居るもの七十万人に及ぶ。其俗機巧にして、器を制する事、極めて工緻也。其教化之主は、専らデウスの教を掌る。軍国の

事に至っては、各地ドウクスありて、これを掌る。（ドウクスは、酋長也。詳なることは下に見ゆ。）其地中海に、コラアリウムウブリーを生ずという。（赤珊瑚樹也。其の樹もつとも長しという。）

シシーリア（漢訳西齊利亜という。我俗にシシリヤと言ひし、即此れ也。）エウロバ極南、地中海の一嶋なり。此島二山あり。一山は、常に火を出し、一山は、常に烟を出して、昼夜絶ずといふ。

按ずるに、本朝寛永年間、ここに来る耶蘇の徒に、コンパニヤ・ジヨセフといひしは、此国の人なりといふ。（ジヨセフ、後は正に帰して、字を岡本三右衛門といいし也。）

ポルトガル（漢に訳して、波亦杜瓦亦といい、また波羅多伽児という。むかし我俗、ホルトギスとも、ブルトガルともいい、また南蛮といいしは即此れ也）。（頭注、国都名リスボン又リスボン）。エウロパ西南海上地にあり。此の国、番貨を海外諸国に通じて、つゝめにアジア地方、ゴア、マカーヲ、マロカ等の地に、其の人をわかち置て、瓦市の事を掌らしむといふ。（ゴアは我俗にゴリと言ひ、マカーヲは我俗にアマカワという。マロカ、またマテヤと言う。詳なる事は、下に見ゆ。）

西洋の番舶、我国に通ぜし事、此国をもて始とす。又天主之法東漸せし事も、此国の通ぜしによれる也。

## 37

按ずるに、ポルトガル人、初に豊後国に来れる事は、天文 10 年（1541）7 月也。其後、薩摩国に来れるは、天文 12 年（1543）八月也。慶長元和之間、歳々に来聘せしゴワ、アマカワの人といふは（五和、天川と書く）、皆是此国の人、それらの所において、海船の事を掌れるものの使い也。慶長 18 年（1613）の冬、番船の耶蘇之徒を帯び来る事を禁ぜられ（これよりさき、慶長 14 年、我が国の人、アマカワにゆきて、貿易するもの 3 百人、此国人のために、ことごとく殺さる。明年其の人ここに来れるを、其船と共に焚殺されし事ありき。）

寛永十六年（1639）に及びて、番船の来る事を止めらる。同十七年五月、此国の賈舶来る。其の人を併せて焚かる。正保 4 年六月、此国進貢の舶来れり。八月、これを押還されき。

賈：「あきない」、売買の両方を指す。

（ジョセフ（岡本三右衛門）の説によるに、はじめポルトガルの王妃は、イスパニヤの王の女也。ポルトガルの王、嗣なくして死して、其の妃父母の国に帰る。其の妃はらめる事ありと聞えて、ポルトガルの臣民、追とどめて国に還し納る。かくて男子生まれて、世をつぎ、21 歳にして死す。また嗣なし。先王の弟の、エイズスの徒となりて、ローマにありしをむかえて、嗣（よつぎ）とす。此の人もとより娶らざれば、嗣子もなし。臣民相謀りて、先王の姪女を嗣とし、イスパニヤ王に請ふて、其の国事を治めしむ。そののち、彼姪女、男子をうむ。其の子成人の後、エイズスの法に帰して、国に当らむ事をねがわず。其の子も、また父とひとしく、世をのがる。臣民皆勤め進むれどもきかず。ついにローマの使徒、共にすすむるに、デウス、汝の国を以て、汝の先王にあたえ給えり。しかるを、すてて治めざらむは、しかるべからずという。ここにおゐて、やむ事を得ずして、国に当れり。初イスパニアの王、此国を治めしより、ここに至って 60 年、ポルトガルの王の後、位に復しぬ。これによりて、我が国へも、先王の好を継て、再び礼聘を修められし、今をさる事 78、9 年前の事也。其の王の名、ドンジュアン・クワルという也という。其の事、即ち正保 4 年（1647）6 月、此の国人のここに来れるをさしいう也。）

## 38

貞享二年（1685）三月、此国の賈舶来れり。またこれを押遣さる。此後は来る事絶たり。亦按ずるに、彼方、天主之教、我国に入りし事は、此国のはじめて通ぜし時に、フランシスクス・ザベイリウス（Franciscus Xaverius、漢に訳して仏来釈古者といひし即此れ也）といふ師の、其船に駕して、豊後国に来れるに始るといふ。即是天文年間の事也（天文 18 年、1549）。また彼教、漢に入りし事も、大明神宗萬曆 29 年（1601）の春、大西洋利瑪竇（Matteo Ricci）が来りしに始れりと見えたり。其萬曆 29 年は、本朝慶長 6 年に当れり。さらば、彼教の漢に入りし事は、我国に入りしよりは、相後れたる事、60 年におよべり。

イスパニヤ（ヨランダの語には、イスパンヤともいう。）

ポルトガル、フランスヤ等と、地を接て、其属国十八あり。またソイデ アメリカの地を併せて、新たに国を開き、ノーワ イスパニヤと号す。（ノーワとは此れにいう新也。余皆これに倣う。我俗に、ノヲバイスペンヤといいし、此れ也）

其後、また、アジア地方、ロクソンをも、併せ得たりといふ。（ノヲバイスペンヤ ロクソンの事、等、下に詳也。）

按ずるに、慶長年間、此国始て来聘す。そののち、呂宋、新伊瀨把休憩等の商舶、来る事絶ず。

これら、皆、此国人の来れる也。番舶来る事を止められしに及びて、来らず。寛永元年の春、再び聘を修す。これをしりぞけらる。

カステイリヤ、(カステイラともいう。むかし我が国に聞こえしカस्ताアンという、此れ也)

イスパニヤの東南にありて、共にこれ与国也といふ。

按ずるに、此国、むかしより、我に通ぜし事聞えず。但し、我国に始て天主教を弘めし、フランシスクス・サベイリウスといひしは、此国の人也しといふ。

39

ガアリヤ（またラテンの語に、フランガレキスとも、フランガレギヨムともいう。そのレキス、レンギヨムというは、国というがごとしという也。また、イタリヤの語には、フランスヤともフランガレイキともいい、ヨランダの語には、フランスという。むかし、我俗ガリヤンといいしは、ガアリヤの転訛せしか。）

エウロパ西海上にありて、イターリヤ、イスパニヤ、ヨランダヤ等の地に相接す。またソイデ、アメリカの地を併せ、新たに国を開きて、ノーワ・フランスヤと号すといふ。

按ずるに、此国の商舶、むかしはここに来れりといふ。其国いまだ詳ならず。或人の説に、大明の書に、フランス国と見えしは、(仏狼機とも)、ポルトガル也という。心得られず。漢に訳して、波羅多伽児というがごときは、すなわちポルトガル也。仏郎機は、フランガレイキ、フランガレキス等、を訛訳せしに似たり。ポルトガルを訳して、蒲麗都家といい、カステイリヤを訳して加西郎というがごとし。）

亦按ずるに、西洋人、大明に通ぜし事は、武宗正徳 12 年、仏郎機国の入貢を始とすと見えたり。其正徳 12 年は、本朝永正 14 年（1517）に当たりぬれば、番舶始て我国に來りし天文 10 年（1541）よりは前なる事、24 年におよべり。

ゼルマアユヤ（ヨランダの語には、ホーゴドチイとも、ドイチともいう。）

エウロパ地方の大国にて、国都をば、ビエンナ（ウィーン）といふ。此方諸国相推して、其君をインペラドール（imperator）と称す。これに属せしホルトス（Fuerst）7 人あり。（インペラドール、ホルトスのこと下に見ゆ。7 人のホルトスというは、たとえば 7 諸侯

などというがごとしという。ヲヲランド人に説には、其の君をばケイツルと称して、ホルス9人ありという。孰れか是なる事を知らず。)

## 40

民物富庶にして、兵馬最強し。しかれども、兵を動かすに、たやすからず。ホルトス1人も議合ざれば、事決せざるが故也。また国北に近く、地悪くして、塩硝を産ぜず、常に給る事をヲヲランド人にとるといふ。

ブランデブルゴ(フランデボルコともいふ。この国、いまだ詳ならず) ゼルマアユヤの東北、ホタラーニヤの西北にあり。

ホタラーニヤ ゼルマニヤの東に、ポローニヤの北にあり。

ポローニヤ(ポーランド) ゼルマニヤの東にあり。

サクソーニヤ(ザクセン) ゼルマアユヤに相近しといふ。其のある所をいまだ詳にせず。

モスコビーヤ(今のロシア) エウローパ東北の地にあり。其の地極めて寒し。多時、氷厚きこと、丈におよぶ。人馬共に、其上を往来すといふ。

スウェイチヤ(スウェーデン) エウロパ北地にありて、ノールウェギヤの地に相聯る。(ノールウェギヤはエウロパの極北。氷海に臨める地也。ノールイギともいふ。)

○西人(シドチ)の切に、スウェイチヤの王妃、ローマンに来て、天主に拝せしを見たりき。その輿從最盛なりしといふ。さらば、此の国も彼の教を尊信する所と見ゆ。

ヲヲランデヤ、ヲヲランドともいふ。(大明の書に、和蘭、また紅夷とも、紅毛鬼ともいふ、と見えしものあれども、紅夷国は安南西北にあり。其の人、衣を制らずして、綿布を身に纏い、紅絹を頭に纏う。其の形、回回(ウイウイ)に似たり。国に塩なければ、安南多く塩をもて、其の珍宝を買うと、三才図絵にはしるせり。紅夷、此の国の人をいふべしともみえず。)

## 41

ゼルマニヤの西北にあり。初、ゼルマニヤ人、海上の小島に至て、漁獵し、つみに土地を開きて、国を建る事七州、イスパニヤに属す。其後、イスパニヤの徭役、苛酷なるに堪ずして、其の国と絶つ。其の国つみに兵を挙げてうつ。隣国をのをの相援けて、戦う事80余年、ヲヲランド、つみにイスパニヤの十州を侵し奪ふ。諸国もまた兵に疲れて、両国を和す。ヲヲランド、其の侵せし地を還して平ぐ。其の人、水戦を善くして、これに敵すもものなし。其陸戦のごときは、水戦に及ばず。しかれども、アフリカ、アジア数州の地を侵し取りて、国すでに富み、兵亦強く、今に至ては、エウロパ1方の強国也。其七州といふは、ヲヲブルイツスル・フリイスラント・ラルラント・セーラント・グルーニング・ゲルトラント・ウイトラキト、其侵取りし海外の地は、カアプトポネスベイ、ゴドロール、マロカ、バタアビヤ、ノーワ・ヲヲランデヤ、ゼイラン等、これなりといふ。(西人の此の国の事を説きし所、猶下に見ゆ。但しヲヲランド人の説とは、異同あり。此の国の事は、

別にしるせしものあれば、ここには略しぬ。)

按ずるに、此国始て此に通ぜしは、慶長五年（1600）の事也。エウロパ地方の国、むかしより、其貢聘の絶ざるものは、ひとり此国のみ也。

アンゲルア[イギリス]、(アンゲリアともいう。イタリヤの語にはエンゲルタイラといい、ヲヲランド人は、イングランドという。むかし我が国にてインガラテイラとも、またゲレホロタンともいい、俗にはイギリスといいしは、すなわちこれなり。)

42

エウロパ西北の海中に二大島あり。此国、并にスコツテヤ、一島の地にわかれたつ。(アンゲルアは、其の南にあり) 其一嶋は、イベリニヤの国也。此国海中にあるによりて、其俗、舟を操る事を善くして、また善く水戦に習へり。ヲヲランド人、海外に通ずる等を得しも、初、此国人、をしへみちびきしによりて、つゝに海路に熟せし也。此方諸国の賈舶、其水戦を善する事を、あひ畏れて、此国人を、号して、海賊とす。其君大に辱悪みて、国人みだりに外洋に出る事をゆるさず。また此国、もとより天主を尊信して、其の教を奉ず。近世に至て、其君、正妃を廢して、寵妾をたつ。天主の教、もと他犯を以て大戒とす。此方教化の主、其破戒の故によりて、此国と絶つ。其教を奉ずる諸国も、またこれとたつ。ヲヲランド人を絶しも、また此時の事也といふ。

并：へい、合わせる。並ぶ。

按ずるに、本朝慶長の五年、此国始てヲヲランド人と共に、我国に通ず。十八年の秋、はじめて貢聘す。明年にまた来れり。其の後來る事未詳。延宝元年（1673）五月、我国漂流の人を送り来る。七月に至て、其国に帰れり。

スコツチヤ（ヲヲランドの語に、スコットランドといい、またシコツテアともいう。）エウロパ西北海にあり。アンゲルアと、共に一島の地にわかれたつ。其の国アンゲルアの北にあり。

イベリニヤ[アイルランド]、ヲヲランドの語に、イイルラントという。エウロパ西北海にありて、アンゲルア、スコツテヤ等の国に、相逼（せまりて）近し。

43

グルウンランデヤ[グリーンランド]（漢訳、前に見えたり）。

此国の極南は、エウロパの北海に至り、其北地は、ソイデ（実はノラルト）アメリカにつらなれり。此方、寒凍極めて甚しく、人物を生せず。ヲヲランド人、海鯨を逐ふて、此地に就いて捕るといふ。(ヲヲランド人の説に、むかし、本国の人相識して衣食器械、寒さ



をふせぐべき物どもを備えて、此の地に就いてとどまる。かくて明年に至て本国の人、また至て見るに、其の人、坐するものは坐ながら死し、起つものは起きながら死して、一人も生活するものなく、其の肌肉、乾肉のごとくになって腐爛せず。其の地寒凍の甚だしき、かくのごとくなるに至るといふ。)

大凡、エウロパ地方の諸国、其君を立てるに、其嗣たるべきもの、すでに定まれるは、論ずるに及ばず。もし嗣いまだ定まらざるは、臣民、各共嗣とすべきものの名をしるして出す。其しるせし所の数、多きものを以て、其君とす。君其臣に官を命ずるも、亦これに同じ。臣民薦むるもの多き人を挙用ふ。君みづから一官を命ずる事もあたわず。

(ヨヨランド人の説に、本国には、君をたてずという。たとえば、周の6卿のごとくに、をのをの其の事を掌れる官長をたてて、治めしむ。国人その官長を撰ぶ事は、此の方諸国、君をたつる法のごとし。又ジョセフの説によるに、エウロパ地方、レネサ、ゼヌワのごときは、国こぞりて、一人を撰びて、国事を治めしむる事1年、毎年其の人を代ふるといふ也。レネサ、ゼヌワ等の国、いづれの所にありといふ事は不詳。)

此の方諸国、君長の位号、数等あり。其上等を、ホンテヘキス・マクスイムス (Pontifex maximus) という。これ最第1無上等の義也。ひとりローマン教化之主1人のみ、此号ありといふ。

此方の諸国、天主之教を尊信するが故に、此の号を以て、其の人を推し称ずるとみえたり。其の次はインペラドール (これ、漢に帝というがごとし。ゼルマニアの君のごとき、これ也といふ。)

其の次は、レキス [rex]。 (これ漢に王というがごとし。フランスヤ・アンゲレア等の国君のごときこれ也といふ。)

其の次は、フレンス [prins]。 (レキスに次ぎし所の号なりといふ。其の説をきくに、たとえば漢の大將軍のごときをいうものか。ヨヨランド・イスパニヤ、相戦うときに、アンゲレアのレキス、其の国の兵をひきゐきたりて、ヨヨランドのフレンスとなりて戦いしなど、いう事あり。)

其の次は、ホルスト [前出]。 (これ、フレンスに次ぎし所の号也。ゼルマニアに属せし7国の主に此の号ありといふ。これまた漢の將軍の号あるがごときなるか。)

其の次は、ドウクス [dux]。 (これ、ホルストに次ぎし所の号也。イタリヤのごとき、所在をのをの其の兵をつかさどるものありて、これをドウクスと称ずといふ。部落の酋長を称ずる所なるべし。)

これらに属する所、またをのをの其の位号あり。ことごとくにかぞふべからず。

(万国坤輿図を按ずるに、欧羅巴州の諸国、凡そ官に3品あり。其の上は、教化を興す事を主るといふは、ローマの主をいい、俗事を判理すといふは、インペラドール、レキス等のごとく、其の次は、専ら兵戒 [軍事] を治むといふは、フレンス、ホルスト等のごときを、其の方によりて、称ずる所同じからぬか。)

## 44

此方諸国の俗、大に同じけれども、亦少し異ならざる事あたはず。ただ、其ゼルマニヤ、スウェイチヤ、ヲヲランド等地方の人は、髪黄に縮りて、瞳子白し。ムスコービヤ地方の人は、モゴル人に似たり。此方相尚ぶ所の教は、皆これエイズスの法也。ただヲヲランド人のみ、ルテイルスの徒也といふ。

(エイズスは漢に耶蘇と訳す。むかし、我が俗にゼスといいしこれ也。ルテイルスは、其の法の異端也という。ヲヲランド人の説に、此の方各国、冠制異同あり。皆玉を以て飾れり。ただこれ、国君即位の時に、用いるのみ。よのつねは、皆々被髪を以て礼とす。被服のごときは、皆本国に相同じ。モゴル人といえども、本国の制に、大に異なるにもあらず。地方、北に近くして、気候寒多し。されど土壤肥沃にして、庶物豊饒也。ただ、イタリア、イスパニヤ等の地方、稲に善し。その他は、稲なくして大小麦に宜しという。)

此方諸国の方言、同じからず。しかれども、其大約、三つに出ず。1 つにヘイベレイウス[Hebraeus]、二つに、ラテン[Latin]、三つに、キリイキス、またヘレツキスともいふ。凡そ大事を記すには、必ず此等の語を用ふ。そのヘイベレイウスといふは、ユデヨラの語なり。(ユデヨラとは、ラテンの語にして、イタリアの語にはジュデアという。これ古の国の名。其の国、今は滅びたり。其の国人の子孫諸国に散在してあるもんを、ヨード人[ユダヤ人]と称すというなり。)

ラテンといふは、古の国の名。今はその地詳ならず。キリイキス、またこれに同じ。その中、ラテンに至ては、此方諸音に相通ぜずといふ所なし。されば、諸国の語、これを学ばずといふものあらず。又諸国用ゆる所の字体、二つあり。1 つに、ラテンの字、二つに、イタリアの字、其ラテンは、漢に楷書の体あるがごとく、イタリアの字は漢に草書の体あるに似たり。其字母、僅かに二十余字、一切の音を貫けり。文省き、義広くして、其妙天下に遺音なし。

(其の説(シドチ説)に、漢の文字万有余、強識の人にあらずしては、暗記すべからず。しかれども猶声ありて、字なきあり。さらばまた多しといえども、尽くさざる所あり。徒に其の心力を費やすのみという。)

## 45

其れこれを習ぶの学、ガラアマテイカ[grammatica]といふは、梵に悉曇(しつたん、梵字の字母)あるがごとく、(その声音を習ぶ学なり)。

レトーリカ[rhetorica 修辞学]といふは、漢に文章あるがごとし。

(其の語をつらねて、言語を記するの学なりという也)

此の余、天文・地理・砲撃・方術・技芸の小しきに至る迄、悉く皆学あらずといふ事なしといふ。

アフリカ諸国。

トルカ(イタリアの語に、トルコといい、他邦ではツルコという)

此の国、其の地基だ広くして、アフリカ、エウロパ、アジアの地方につらなり。国都は、古のコウスタンチイの地（現在のイスタンブール）、古の時、ローマの君、地を避けし所也という。（コウスタンチイ、またコンスタンチヤともいう。アフリカの地、バルバアリアの北、マーレニゲーテラーニウムに近き所にあり。）

其の俗、タルターリヤ（すなわち韃靼国）にひとしく、勇悼敵すべからず。兵馬の多き事、1日にして、二百千を出す。（20万をいう）日を歴るにおよびては、其衆はかるべからず。エウロパの地方、その侵凌に堪ずして、各国相援てこれに備ふといふ。

按ずるに、其の説（シドチの説）に、アフリカの地方、ことごとくトルカに属し、また東北は、ゼルマニヤに至り、東南は、スマアタラに至るといふ。また、ヨセフが説によるに、此国、ポルトガルに相隣れりといふ。また、ヲヲランド人に、此の国の事を問うに、其地、東北タルターリヤに相聯る。これ其の種類也という。

さらば、トルカの地、西北はポルトガルの地に相接し、東北は、ムスコビーヤの東に至れり。（ムスコビーヤはゼルマニアの東北にありて、最遠く、タルターリヤに相近し。）

46

ただ、其東南海を越て、スマアタラに至るまで、此の国に属すという事、心得られず。

又其大国たる事かくのごとし。万国坤輿図等の諸説、此の国の事に及ばず。漢訳また詳ならぬ事も、心得られず。

（按ずるに、万国坤輿図に、利未亜州大耳瓦国ありて、馬ル馬利加の地に近し。其の大耳瓦、或いはこれトルカの音転じ訛れるか。また都？の字を注して、其の下の字侵滅せし所あり。善本を得て、考うべき事なるか。）

尔：なんじ、しかり

カアプトポネスベイ[ケープタウン]（イタリヤの語にカアポテポネイス・フランサと言ひ、ヲヲランドの語に、カアポテホース・フランスとも、カアプともいう。漢訳未詳。其の地は、すなわち漢に大浪山角とするせし所也。按ずるに万国坤輿図の仙勞冷祖島の地に、????というあり。カアプの音転じ訛りて、仙勞冷祖島の地名とするに似たり。）

アフリカの極南の地にあり。虎・豹・獅子・禽獸之類最多し。近世ヲヲランド人、其の地を併せ得しといふ。（ヲヲランド人の説をきくに、此の地を併せ得しにはあらず。此の方海船、東南洋におもむく時、必ず経過の地也。これによりて、其の海口に、船をとどむる常所あるなりという。）

マタカスカ、（蕃語サンロレンソ、すなわち此れ也）アフリカ東南海中の大島也。

按ずるに、万国坤輿図、利未亜の地、七百州ありと注して、此方の名山大川、其大略をしるす。ローマ人、ヨヨランド人等の説く所も、此方の土俗人物等、皆詳ならず。おもふに、此方トルカの地に係りぬれば、エウロパ人至るものすくなくして、其事いまだ詳ならぬか。たゞそのカアブ、マタカスカの地、ヨヨランド人説くところは、其の人禽獸にひとしといふ。

(ヨヨランド人、マタカスカに至りて、其の地産をとる。土人畏れ避けて相近づかず。飲食の余をすつるを見るにおよびては、またひそかに来りてぬすみ食う。その痴呆なる事がくのごとしという。)

47

アジア諸国。

ハルシャ[ペルシャ] (漢に巴尔齐亜と訳す。我俗にハルシャという。)

イソデヤの西、アフリカ地方の東につらなれり。モゴルの属国也という。

按ずるに、此国出ず所名産多し。ヨヨランド人の説に、天下良馬を産する地、ただ日本とハルシャとのみ。万国の地、およぶ所にあらずといふ。本朝慶長年間、すいやむ、柬埔寨(かんぽさい)等の国、聘を通じて、しきりに馬を賜らむ事を望み請いし事あり。

さらば、ヨヨランド人のいふ所、誣いずといふべし。

誣：つくりごと。

モゴル(我俗にモウルというもの、すなわちこれ也。)

古の印度の地、地広く人稠く、財物豊衍の大国也。されど殊隣相接して、兵革の事もまた絶ず。ベンガラ・サラアタ・インドスタント等、其属国也。コストゴルモンテールといふは、其海港の名、番舶幅湊の地也といふ。(ベンガラ、下にみえたり。サラアタ、漢訳未詳。或人、錫蘭山即此れ也という。心得られず。インドスタント。コストゴルモンテールは、コストとは、ここに海辺というがごとし。以下は地名也という。漢訳未詳)

按ずるに、其の説(シドチ説)に、天下の宗とする所の教法三つ。キリステヤン[christian](エイズスが法、我俗キリシタンという此れ也。)

ヘイデン[heiden](またこれをゼンテイラ[genntile]とも称すという也。)

マアゴメタン、これ也。そのマアゴメタンは、モゴルの教にして、アフリカ地方、トルカもまた其教を尊信すといふ。おもふに、これ漢に回回の教といふもの、或は是也。

(或人説に、回回すなわちモウルという。心得られず。万国坤輿図を按ずるに、莫臥児(もーる)、回回、其の地相去る事遠くして、阿蘭陀鏤板の図には、回回というものつまびらかならず。)

ベンガラ(ヨヨランドの語はベンカーラという。)

古の東印度の地也。其地、各色布帛・薬物等を出すとすといふ。(即今ヨヨランド人、来たり

て売る所の布帛に、此の国の名に係れる物あり。これ其れ産する所。)

48

インデヤ、(漢に訳して応帝亜という。)

西印度の地也。

(按ずるに、古の印度というものは、五天の総名なり。今いう所のインデヤは、古にありて、西天竺の地方なり。)

ゴアは、其西海の地に在りて、番舶輻湊の所也。ポルトガル人、其地に拠りて、互市の事を管す。(ゴア、漢に臥亜と訳す。我俗にゴワというもの、即此。)

マルバル、チャウル、サントメイ、皆是ここに属する折の地名にて、其俗モゴルに似たりといふ。(マルバル、またはマラバアルともいう。ゴアの南にあり。チャウル、サントメイ等の地、各色布帛を出す。即今、布帛の類、その地名に係れるものあり。はじめこれらの所より来れる也。チャウル・サントメイ、漢訳未詳)

按ずるに、はじめ、ポルトガル人、ゴアの地に拠りて、つゝに広東海港の地を借りて、其の人をわかち置て、海舶の事を管せしむ。本朝慶長元和の間、或は西域国総兵巡海務事と称じ、或は西域国奉行天川港知府事と称じて、歳々に朝貢せし五和天川の人といひしは、即是ポルトガル人のこれらの地にありしものども也。

(五和は、即ゴア也。天川は、即阿嗎港、蕃語マカヲというもの、広東の海口にある地名なり。)

セイラン(また、セイロンとも、サイロンともいう。漢に訳して錫狼島とも、錫蘭国とも、齊狼ともいうもの、此れ也。)

インデヤ南海の中にあり。海に近き山麓に、仏足の跡猶存す。或は仏涅槃(釈迦入滅)の地これ也といふ。其の俗モゴルに同じくして、其地、眞珠・宝石・肉桂・枇榔・椰子等を産すといふ。

按ずるに、此国の南地に、コロンボと称ずる所あり。其の人色黒し。漢にいふ所の崑崙奴、或はこれ也。ヲヲランド人の説に、凡そ赤道に近き地の人、ことごとく皆クロンボにして、其性慧ならずといふ。其クロンボといふは、コロンボの音の転ぜしにて、その人色黒きをいふ也。

(此に、黒色をクロシという。されど、近俗、人の色黒きをクロンボというは、もとこれ番語に出づ。)

49

スイヤム(シヤム、またはシヤムローともいう。漢に暹羅と訳す。これ也。)

古の時、暹(せん)と、羅斛(らくく)と、二国あり。大元[元王朝]至正の比(ころ)(1335-1340)、羅斛人、暹を合せて、1国となれり。

スイヤム、またはシヤムともいふは、すなはち暹番音也。其地、南方にありて、気候熱

甚しく、ただ其冬月に至る時、夜稍涼し。其の人螺髻（らけい：ほら貝型のもとどり）裸体、糸帨（しぜい：手拭）を用いて、腰を束ぬ。其の産する所の物は、薬物皮角の類也といふ。

按ずるに、本朝慶長年間、其の国始て通ず。元和・寛永の間、其王しきりに金葉の書を（我俗に、金札というものこれ也。）奉て、聘問す。今におみては、たゞ其の商舶の来るのみありて、歳歳に絶えず。

（慶長の初め、我が国の人、かしこにゆきて、つゐに其の王臣とれるものどもあり。其の人、また我が国の執政に書聘を通じたりき。それらが子孫、猶今も其の国にありという。）

附

占城（チャンバという。番名いまだ未詳）

カンボサイ、柬埔寨、皆同じ。我俗カボチャという。番名未詳。）

二国、共に暹羅の東にあり。

大泥、（我俗タニという。番名不詳。）

暹羅の南にあり。本朝慶長の初、ともに我国に通ず。ただ占城は、其王の聘せし事聞こえず。柬埔寨（カンボサイ）の歳聘は、寛永の初におよべり。今はただ其商舶の来れるのみなり。

（此れ等の国は、西人（シドチ）いまだ経ざるの地なる故に、其の説を聞かず。されど、昔我が国に通ぜし所なれば、ここに附す。）

マロカ（マラカ、またはマテヤという。暹羅に隸して、いまだ国と称せずという。）

スイヤム西南の方、海にのぞめる地にあり。此地もとポルトガル人拠る所、今はヨランダ人に属すといふ。

按ずるに、本朝慶長十七年（1612）二月、ヨランダ人奉れる書に、当時カステイリア人と、マロカに戦う事を載せたり。さらば、此地もと、カステイリア人の拠りし所を、ヨランダ人戦い、逐ふて、つゐにみづからここに拠りしとみえたり。カステイリアは、すなわちカステイラ、ポルトガルの興国也。

50

スマアクラ（ソモンタラともいう。漢に、須門那・蘇木都刺と訳したり。）

アジア地方、南海の中にあり。わづかにその東北海を隔て、すなはちマロカの地也。此国、直に赤道の下にあたり。春秋の二分には、日影を見ず。春分より秋分に至て、日影南にあり。秋分より春分に至て、日影北にあり。氣候極めて熱く、ただ夏冬には、其熱甚しからず。人皆裸体にして、色黒く、俗また暹羅に似たり。其地黄金を産す。ヨランダ人、これをとるといふ。

ジャガタラ（漢に訳して）

スマアタラ東南海中にあり。此の国すべてジャワという。(漢に訳して) ジャガタラは  
ヲヲランド人拠る所の地名にて、其の治城はバタアビヤにあり。(漢訳未詳)

ここより、南にさる事 14, 5 日程ジャワに至る。即是本国の主、都する所也。其の主を  
ば、ススーナムと称す。其俗、髪をかうふり、薄き布に、糊強くして、頂きに纏い、袖窄  
(せま) き衣に、短き袴を着く。地方暖にして、穀一歳に再熟し、庶物また豊衍(ほうえん)  
なり。これによりて、其の人飢寒をしらず。性また惰なる事甚し。ジャガタラ、もと  
ポルトガル人のために拠らる。前九十余年、ヲヲランド人、これと戦ひて、つゐに其地を  
とる。(本朝、元和9年癸亥の事也。)

今ヲヲランドの治る所に、漢人の来り寓するもの[華僑]、3, 4 万人に至るといふ。

51

按ずるに、慶長の比(ころ)、ヲヲランド人、バンタンに往来の事聞ゆ。バンタンは、す  
なはちジャワの地名、漢に板淡と訳する所也。亦今、毎歳ここに来れるジャガタラの人と  
いふものは、其国人にはあらず、漢人のかしこに寓するものども也。

ボルネヲ(ボルネヨ、またはボルネール。)

スマアタラの東、ジャワの東北にある海嶋なり。土俗スマアタラに同じ。其地水精、竜  
腦等を産すといふ。

マガザアル(漢訳不詳、これセレベスの南地の名也。セレベスは漢に訳して食力百私とい  
う。)

ボルネヲ東南海中にあり。土俗スマアタラに同じ。黄金・檀木等を産すといふ。

附

マカサアルの東北海中、メンダナヲ[Mindanao]といふあり。

此余、海島猶多し。皆これ西人の説きし所にあらずして、其事詳ならざれば、ここにし  
るさず。

ロクソン(ロソンともいふ。漢に呂栄と訳す。我が俗には、ルソンという。ヲヲランド人、  
またルコーニヤともいふ。)

チイナのカンタンの南海にあり。(チイナは支那也。カンタンは広東也。)

其の国の南土をば、マテヤといひ、またマネラともいふ。

(マネラ、我が俗、マンエイラという。)

古の時、其の主あり。近世以来、イスパニヤ人併せ得て、其の人をして、国事を治めし  
む。其西南の地に、銀を産する山あり。イスパニヤ人、これを採らしむ。チイナ人来り探  
るもの 12 万ばかり。

52

またヤアパンニヤ東南海中に、金銀産する島あり。(ヤアパンニヤは日本なり。東南海中  
の島名、未詳)。

またヤアパンジス（すなわち日本人）の子孫、此国にあるもの、すでに三千余人、集り居て、聚落をなす。其の人、本国の俗を変ぜず。土人は、双刀を腰にし、出る時は、槍を執らしむ。其余も皆一刀を帯ざるはなし。イスパニヤ人これを御するに法ありて、妄に国中に出行く事をゆるさず。前4年、ヤアパンジス、風に放されてここに至れるもの十二人、イスパニヤ人彼集落に就て、居らしむ。此国の北は、すなはちフルモーザなり。（タカサゴの事也。即今の台湾）もとヲヲランド人の抛りし所、今はチイナに属すといふ。

按、慶長年間、しきりに我国に聘せし、呂宋国といふは、みなこれイスパニヤ人の、かしこにありしものの使い也。

ノーワヲヲランデヤ、海南にあり。其地極めて濶（ひろ）し。今はヲヲランド人併せ得たり。これによりて、ノーワヲヲランデヤと名づくといふ。

此地の事、ヲヲランド人にとひしに、此地ジャガタラより南にさる事400里許、（これ我が国の里数においていう所也。）

本国の人、はじてここに至る事を得たり。其土極めて濶し。其の人禽獣のごとくにして、言語通ぜず、地気甚熱くして、ここに至れるものども、病ひし死して、生残るものもづかになりて、帰る事を得たり。ノーワヲヲランデヤと名付し事は、其地を併せ得たるの義にはあらず。本国の人、新たにもとめ碍し所なるが故也といふ。

（此の事詳なる事は、阿蘭陀の事しるせしものに見ゆれば、略す。）

註：これはオーストラリアのことらしい。

按ずるに、其の人の言に、チイナといふは、即支那也。タルターリヤといふは即韃靼也。ヤアバンニヤといふは、即日本也。此等地方の事、其經歷せし所に係らざれば、其説のしるべき事もなし。万国坤輿図に拠るに、韃靼の東方、海に至るまでの地を図して、狗国（くこく）、室韋（しい）、野作（えそ）等の図、其地にありと見えたり。阿蘭陀鏤板の図に拠りて、阿蘭陀人の説をきくに、エソ（エゾ、漢に訳して野作という、我が国にて蝦夷という即此。北海道のこと。）の北地、タルターリヤに相聯れるや、否、いまだ詳ならず。本国鏤板の国には、エソ東南海口の地のみを図して、此海口に至て、ここにいふ所のマスに似たる魚、多く食ひし事を、注したりといふ。（こことは、即我が国をいう。マスに似たる魚とは、ここにいう鮭魚の事をいうなるべし。）またヲヲランド人に問ふに、ヲヲランド地方より此に来るには、其北海より去りて西し、アフリカの西を経て、カアブ地方に至て、東に折れ、アジア南海を過て、ジャガタラに至り、ここよりまた北して、スマアタラ、ボルネヲ等の諸島を過て、東北の方、我国に至る。其行程をはかるに、凡そ1万2千9百里に及ぶといふ。（これまた我が国の里数による也）

註：ここの記述をみると、当時は北海道が大陸とつながっていたかもしれないという認



識だったことがわかる。樺太が半島と考えられて、間宮林蔵がはじめて島と確認して「間宮海峡」とみつけたというのは史実だが。[諏訪邦夫]

もしヨランダ地方より、北に去りて、東に転じ、北海を經過て東し、(北海はすなわち、タルターリヤマーリヤというもの、韃靼海の事をさしていう也。)南に転じて此れに来らば、行程3、4千里に過べからず。なにを苦しみてか、此の路にはよらざるやといいしに、其の人のいわく、誠に然也。今より3年の前に、アンゲルア(イギリス人)ウエールム・ダンペイル[William Dampier]というものありて、身みずから北海を越えて、東洋に到りしという。我方の人、其の事を難じて、天地の北日光到らず、海常に暗く、潮甚だ急也。そのいう所信ずべからずという。彼の人これを憤りて、書作りて世に行わんとす。

註：白石のこの議論は面白いが、現在の技術でさえも、北廻りの航路は困難で、商業的には成功していない。[諏訪邦夫]

54

もし其の書成りて、其の言信ずべくば、本国の幸、これに過べからずといいき。(これ正徳2年壬辰[1712]の事也。)

其の後また此の事を問いしに、去年、彼人死して、書もまたいまだ成らざりきといふ。(これ正徳4年甲午の事也)

これらの説に拠るに、万国坤輿国に見えし所、尽くに信ずべからず。

ノラルト・アメリカ諸国。

ノーワ・イスパニヤ、(我が国の俗に、ノラバイスパニヤ、またはノベスパンヤといいし、此れ也)ノラルト・アメリカの南地にあり。ここを過て南する時は、すなはちソイデアメリカの地也。イスパニヤ人併せ得て、新たに国を開き所也。其海口アカプールコといふ地、番船輻湊、人民富饒之地也といふ。

按ずるに、本朝慶長十五年[1610]、此国の船、逆風に放されて、我国に漂い来る。其船を修め整えしめて、還さる。同十七年の夏、其の国入聘して、恩を謝す。此年、我国の商船も、かしこにゆく。今はすなわち絶たり。

註：ここでは北アメリカを正しく書いている。この記述から、ノーワ・イスパニヤはメキシコを指すと解釈できる。

ノーワ・フランスヤ、(漢に訳して新払郎察という。)ノラルト・アメリカ東北の地にあり。其地甚だ潤し。これまたフランスヤ人併せ得て、新たに国を開きし所也といふ。

按ずるに、此方の地、極めて潤く、其俗、木石と共に居り、鳥獸と共に群す。エウロパ地方の国々、その地を併せて、新たに国を開きし多し。ノーワイスパーニヤ、ノーワフラ

ンサ等の外に、

55

ノーワカラナナタ（カラナナタ 漢訳いまだ不詳、其の本国は、エウロパ地方、イスパニヤの南、地中海の上にあるなり。）

ノーワ・アンダルシア、[Nova Andalcia]（アンダルシア、本国はエウロパ地方、カラナナタの西にあるなり。）のごとき、皆これ也。

ヲヲランド人の説に、アメリカの地、六七月の頃、麦を収むといふ。しかれども、各国の風土物産等、いまだことごとく詳ならず。

註：ノーワフランスヤは、ルイジアナあたりか、あるいはカナダ北方のことか。ノーワカラナナタ、ノーワ・アンダルシアは不明。

ソイデ・アメリカ諸国。

バラシリヤ[ブラジル]、（パラシリヤともいう。漢に伯西兕と訳す。）

ソイデ・アメリカ東方の地なり。其の地極めて荒潤にして、東南北の方、ことごとく皆海に至る。其俗、木に棲み、穴に居て、好みて人を食へり。其北海の中、セントヘンセントといふ小島は、タンバコを出す所也といふ。（セントヘンセントは漢訳未詳。タンバコは、すなわちこれ烟草なり。）

按ずるに、秘府にエウロパのクラントあり。ヲヲランド人、此国人と戦ひ、勝ちし事を、しるせし見ゆ。其注する所に拠るに、エイズスの教、此地方にも行はれし也。

（クラントは、エウロパの俗に、凡そ事ある時は、其の事を図注して、鏤板して、世に行うもの也。）

56

附

万国坤輿図に拠るに、南亜墨利加、巴大温（ぱくうん）の地は、長人国也と注せり。ヲヲランド人に此事を問ふに、むかし、本国の人、此方の南海を過ぎしに、そのパタゴースの地に至て、人をして小舟に駕し、水口より遡りて、其地を見せしむ。久しくして帰らず。海岸にのぼりて、はるかに望むに、荒潤にして、見る所なく、ただ沙頭に、大きな屋の内に、火を焼きし跡ありて、其辺に人の足跡あるが、よのつねの人の足、二つを合せしほどにて、両足相去れる間も、これにかなへり。此故に、此地の人、長大なる事をば推し知れり。始つかはせし人も、つみに帰る事を得ず、又此地の人を見しにもあらずといふ。その、パタゴース、すなはち漢に巴大温と訳せし所也。

また万国坤輿図に、此方亭露国（べつるう）、香を産し、巴尔娑摩と呼ぶ、樹上生ずる初、刀を以て之油抽出、劃し、屍に塗ると永久保存できるといふ。すなはちこれ西洋地方より出る折、バルサモといふもの、此樹油也。ヲヲランド人に、此物を産する地を問ふに、ベ

ールイヒヤノムといふ。漢に亭露と訳せし所にしてへバル娑摩、すなはちバルサモ也。

附

当時エウロパ地方、ことごとく戦国となりし事は、初めイスパニヤの君、名はイノセンチウス・トーデーシムス、嗣とすべき子なし。国人は、ゼルマアニヤの君の第二の子、名は、カアロルス・テルチウス、かならず其嗣となるべしとおもひたり。これは、ゼルマアニヤは、此方の大国にして、しかも其君の子は、イスパニヤの君の外姪なるが故也。(イノセンチウスは、イスパニヤの君の名也。トーデーシムスは、ここに12世というがごとく、其の国の大祖より、12代にあたるる君なるをかく称ずるは、此の方の俗也。カアロルスはゼルマアニヤの君の子の名也。テルチウスは、ここに第二子というがごとし。)

57

十年前におよびて(本朝元禄13年庚辰(1700)なり。)イスパニヤの君、死する時に至て、其の嗣いまだ定まらず、其親戚群臣に遺令して、一封の書をとどめ、我死せば、此の書を捧げて天主像前にて至て、披らき見よ。我嗣の事は、これにしるせりといふ。国人基書を捧げて、ローマンに至て、天主の像前にして披き見るに、フランスヤの君の孫、名は、ピリイブス・クイントスを以て、嗣とすべしとししぬ。

(クイントスは、ここに第5子というばごとし。フランスヤの君の嗣子の第五の子也。)

人皆驚きて、敢て言を發せず。されど、其君の命ぜし所なれば、敢てたがふべからず。フランスヤの君の孫をむかへて、君として、其冠をわたす。

(世を繼て、位につく時に、先世より相伝えし所の冠をこうぶる事、此方の礼也という。)

ゼルマアニヤの君悦びずして、其第二子を納むとす。ローマンのホンテヘキスマキシムス・トーデーシムス、

(ホンテヘキスマキシムス、ここに最第一無上等というがごとし。これ此方教化之主の号也。トーデーシムス、これも其祖より第12世なり。)

ゼルマアニヤ、フランスヤの君に説きて、相平がしむるに、ゼルマアニヤの君、其言を用ゐず、つゐにレヲポルースをして、水軍4万の将として(レヲポルースは、其の將軍の名)、其の子をイスパニヤに納る。其の国のホルトス、ことごとく皆兵を發して、これにしたがふ。(ホルトスは、その属国の君号なり。)

イスパニヤ人、兵三万を發し、フランスヤの君、援兵4万を發し、すべて水軍七万これをふせぐ。ヨヲランド人・アンゲルア人、ゼルマアニヤをたすけて、兵を發す。イスパニヤ、フランスヤ等の興国も、またをのの其兵を發し相たすけて、或は陸に戦ひ、或は水に戦ひて、其の戦やまず。すでにして、六年の前、ゼルマアニヤの君死し、(本朝、宝永元年甲申[1704])五年の前、ポルトガルの君も死す。(これ、イスパニヤの興国なり。)

58

両軍水陸の兵、戦ひ死するもの、すでに十八万人に余れり。又ポローニヤの君死して、プランデブルコ、リトアニア・ゼルマアニヤの三国、其国をあらそひ、ポローニヤの兵、

戦死するもの七千人、ゼルマアニアの兵もまた戦死するもの二千人に及びき。(此の戦の事は、其説詳ならず。リトアニアもまた詳ならず。)

また、ムスコービヤ、サクソーニヤ、相くみして、スウエイチヤと戦ひ、ムスコービヤまたトルカと戦ふ。凡十年の間、諸国ことごとくみだれて、此方の人、其の生をやすくせず。我ここに來らむとする始(これ本朝宝永4年(1707))、フランスヤより船にうかび、カナアリアにゆかむとするに、アングルア、ヨヨランダヤ等の兵馬、20万、其戦艦180隻、チビリタイラ[ジブラルタル?]にみちみちて、ゆく事を得ず。ゼルマアニア人に説きて、わづかにまぬかれて、ここを通ぬといふ。(カナアリアは、海島の名。エウロパの海西にありて、フランスヤに属す。チビリタイラは、ポルトガル、トルカの海門にあり。)

(続：前説は、これ庚辰より丁亥に至る(1699-1707)凡そ10年間の事也。それより後の事は、ヨヨランド人の説をここにしるしぬ。)

己丑年(1709)4月ヨヨランド人、フランスヤ、イスパニヤ等の人と戦ひ、1万余人を斬て、フランスヤの地、レイセル、ハルゲ(ベルギー?)、タウルネキの三城を取る。ヨヨランド人戦死するものも一万余におよべり。庚寅年(1710)4月、ヨヨランド人、イスパニヤ人と戦ひ、5千人余を斬て、3千人を虜にす。6月、ヨヨランド人、フランスヤに攻入りて、1万3千人を斬り、4千余人を虜掠す。ヨヨランド人も戦死するもの1万1千人余、つゝにそのドーワイ、ベトーネ、セントマン、センス、4城を降しつ。辛卯年(1711)7月、ヨヨランド人、フランスヤに攻入りて、其国都バレイス(パリ)を去る事40里、プレコム地を取り、つねにゼルマアニア人と共に、イスパニヤ人と戦ふ。

59

此年八月、トルカ、タルターリヤの兵、ムスコービヤと戦ひて、さきにそのために侵し來れしトルカの地を復す。

又此年秋、スウエイデと、デイヌマルカとの戦起れり。これは、さきに、両国地を争ひて、デイヌマルカの戦利なく、ここかしこの地をうしなふ。ヨヨランド人、デイヌマルカを援し來りて、つゝに両国に説てたいらがしむ。此年、デイヌマルカそのうしなひし地を復すべきために兵を發す。壬辰年(本朝正徳2年(1712)なり)、此年の春、アングルア・ヨヨランド人、トルコ、ムスコービヤに説て、相たいらがしむ。4月、ヨヨランド人、ゼルマアニア人と共に、イスパニヤ、フランスヤ人と戦ふ。

その軍、をのをの十万人、敵を斬る事凡そ1万余。ヨヨランド、ゼルマアニア人の戦死するもの、9570人。をのをの軍を引て去る。

7月、ヨヨランド人、フランスヤの地、クイノを攻め取り、つゝにマルセネ[Martinet]の地に入りて戦ふ。敵よく拒ぎ戦ひ、勝つことを得ず、軍を引て還る。

かくて、此年以来、ゼルマアニア・フランスヤのうらみによりて、輿國をのをの其兵につかれ、両国に説きて、相たいらがしめむとす。同国言ありて相したがはず。癸巳年年(本朝、正徳3年の事なり。)九月、両国つゝに和平ぎ、をのをの侵せし所の地、虜にせし所の

人を還す。

按ずるに、ゼルマアニヤ、フランスヤの戦始りし事は、本朝元禄 13 年度庚辰 (1700) に当れり。兵連なる事 14 年にして、事たいらぐ。此年、本朝正徳三年癸巳 (1713) 也。

60

中巻註 (原本頭記せるもの。)

36 頁ポルトガルの上に、〔国都名リスボン又リスボン。〕

39 頁ゼルマニヤの上に、〔国都名ウエンネナ。〕

40 頁ホタラーニヤの上に、〔和蘭、ポウル〕

41 頁アングルアの上に、〔慶長 18 年癸丑 (1615) 8 月 4 日、インカラテイラ国使来る。其の書番字、通事訳し云。おふぶりたんや国、ふらんす国、ゑらんだ国、三国の帝王に 11 年以來なり侯云々。其の名の所に、大ぶりたんや国の王、居城はおしめしきせめし、帝王れいきく。又訳云。いがらたいら又は、げれぷろたんとも申候。いづれも国は一つ名はニツ有之。即いぎりすへの返書つかはさる云々。9 月 1 日事也。〕

一校者(文彦)云、此?上の文は原書中巻の首に付紙となりてありしを、今書込みてここに入れたり。

44 頁披髪の上に〔校者云、披髪は披髪の誤ならむ。〕

45 頁トルカの上に、〔万国全図、都鬼瓦、或此〕

55 頁カラナナタの上に、〔イスパニヤポルトガルの西南なり。〕一校者(文彦)云、此文はこの注の、カラナナタの西に云々といふ所へ旁書せるを、上へ移せるなり。

57 頁ブランデプルコの上に、〔漢訳、肥良的亜、礼勿泥亜〕一校者(文彦)云、此数字、原書ブランデブルクとリトアニヤとの旁書なりしを、ここにあぐ。

59 頁、デイヌマルカの上に、〔漢訳、第那瑪爾加〕一校者(文彦)云、此数字はデイヌマルカの旁に記しありしを、下に出せるなり。

## 西洋紀聞下巻

大西人(シドチ)に問ふに、其姓名称国父母等の事を以てす。シドチ答て、我名はヨワン・バツテイスクシローテ・ローマン・バライルモ人也。

(すべてこの語を聞くに、声音うつし得べからず。その名を称するときも、ヨワンといひ、ギョアンというがごとし、この近く似たるを以てする。余皆これに倣う。そのヨワンというは、ラテンの語也。ポルトガルの語はジョアンといい、ヲヲランドの語には、コヤンというという。バライルモはローマンに隸する地名だという。)

父は、ヨワンニ・シローテ、死して既に十一年、母は、エレヨノフラ、猶今ながらへて世にあらんには、是年六十五歳也。

(父の名と、この名と、相似て、ただニといい、バツテイスタというのみ同じではない。此の事を問うに、昔エイズスの大弟子 12 人の中に、ヨワンニス(ヨハネ)というありき。凡そキリステヤン、各々この法をうけついで祖師の名をみずからの名に加え称ず。ニといい、バツテスタという、皆名也。シローテというは、姓だという。)

兄弟四人、長は女也。幼にして死す。次は兄也。ビリブスという。次は我、是年 41 歳、次に弟あり。11 歳にして死して、既に 20 年。我幼よりして、天主の法をうけ、学に従うこと 22 年、師とせしもの 16 人、(彼方の学、この科多し。師 16 人という事は、この学科につきて、各々師ありしという。)

ローマにありて、サテエルドス[Sacerdos 司祭]に至り、六年前に、一国の薦擧によりて、メツシヨナナリウス[Missionarius]になされたりき。

(サテエルドスは、彼方教化の主よりして、第 4 等の号、メツシヨナナリウスは、彼方弘法の事のために、使たるものを、称ずる所なりという。)

初、本師の命をうけて、此土[日本]に来るべき事を、奉りしよりして、此土の風俗を訪ひ、言語を学ぶこと三年、またトーマス・テトルノン[前出、上巻附録]といひしもの、これも師命をうけて、ベツケンにゆくべし。

三年の前、二人各々カレイ一隻ずつにに乗りつれ、ヤネワを歴て、カナアリヤに至り、ここにてまたフランスヤの海船一隻ずつに乗りて、つゝにロクソンに至れり。これよりして、トーマス・テトルノンは、ベツケンにおもむき、我は此土におもむく。海上忽に風逆し、浪あらくして、船覆らむとせし事、三たびに及びしもの、はじめて此土に至る事を得しという。

(トーマステトルノンは、同門の人の名也。ベツケンは、すなわち大清の北京也。ヲヲランド人は、ペツキンという也。カレイは、小舟をいう。ヤネワ・カナアリヤ、共に西洋海島の名也。)

男子其国命をうけて、万里の行あり。身を顧ざらむ事は、いうに及ばず。されど、汝の

母すでに年老ひて、汝の兄も、また年すでに壮なるべからず、汝の心におゐて、いかにやおもふと問ふに、しばらく答ふる事もなくて、其色うれへて、身を撫していう。初、一国の薦擧によりて、師命をうけしより、いかにもして、其命を此土に達せむ事をおもふの外、また他なく、老母老兄も、また我此行ある事は、道のため、国のため、其幸これに過ずと、悦びあへり。されど、此体挙りて、父母兄弟の身をわかたずという所あらず。いきて此身のあらむほど、いかでかこれをわする事はあるべきという。

我国の風俗語言は、いかなる人に就て、訪ひ学びしにやと問ふに、其懐にせしこ小冊子を取て、これら此土の事を記せし所也。またロクソンに至りとゞまれる時に、此国の人にあひて、訪ひ学びし事どももありきという。其小冊子の名、1つをば、ヒイタサントールムという。これ我国の事を記せし所也。

65

1つをば、デキシヨナアリヨムという。これ我国のこばをしるして、彼方の語を以て翻訳せし所也。

(2冊子共に、長さ5寸許、広さ4寸許、ここに、やまととちというもののごとくにして、この厚さ、各々1寸には余れり。我が国の事を記せしという物には、絵かきしものをさしはさみてありき。)

ロクソンにて、我国の人にあひしとは、もとよりかしこにありし我国人の子孫、すでに多く、また三年前に我国人の風に放されて、かしこに至りし十四人有しにあひて、此土の事ども、たづねとひしという。[中巻、ロクソンの条、参照]

其行囊の中に、ある所の黄金三品、弾のごとくなるあり。錠のごとくなるあり。我国元禄年製の

錠あり。(ここにいう小粒判。) また我国の新銭のあるあり[上巻附録、参照]。此等は、何れの方にて、もとめ得しところなるにやと問ふに、凡そ羈旅(きりよ)の人、行資なくしてかなふまじきは、いうに及ばず。初ローマを去りし時、スクウタアルセンテヤという銀をもち出しを、カアデイキスといひし所にて、イスパニヤの銀に換得て、またそれを、マルバル[おそらく、マラバル(Malabar)：インドの港]に至りし時に、ホンテチリといひし所にて、其国の銀に換え得たりき。これは其地方によりて、各其国の宝貨の形製同じではない。其地方に行はるる物にあらざれば、用ふべからざるが故也。

(スクウタは、この銀の形の名也。アルセンテヤとは、銀ということの番語也。カアデイキスはイスパニヤの地名也。マルバルはインデヤの地名、ゴアの南にり。ホンテチリはマルバルの街の名。人物繁盛の地なりという。)

ロクソンに至りて、また黄金に換たり。これ此の土には、黄金を重貨とするが故也。弾のごとく錠のごとくなるもの、すなはち此也。此土の金銭は、3年の前に、ロクソンに到りし人のもちし所に、換来れる所だという。

其法衣の名を問ふに、ルリチヨ[religio]と答ふ。これを織れる所の布は、我国の産也。いづれの方にて、求得しにやと問ふに、これもマルバルのホンテチリにて買得て、ロクソンに至て、法衣とはなしぬという。

(この法衣、ポルトガルの語には、カッパ[Capa]という。昔我俗この語に倣い、雨衣を作れり。今この製を見るに、今俗にマルガッパという物のごとくにして、くびかみの所、少しく異也。これを身に被きて前襟にて、ボタンという物をもて、左右を鎖す。このたけ長くして、地を曳くこと 3, 4 尺に至れり。本師より以下、この等位の高下によりて、このたけの長短あり。本師の着る所は特に長くして、地を曳く事数尺、侍者して、これをとらしめてゆくだという。)

其同門の人、北京におもむきしは、其国の人、かしこにゆく事の始にやと問ふに、しかるにはあらず、チイナにも、(チイナとは即支那也。)初は我法を禁ず。前八十年、其禁すでに除きて、我法ふたたびかしこに行はる。そのみならず、今の天子、我本国に使して、物を施し入れし、すくなからず。それが中、マルカリイタ七つ迄あり。其大さ、我方にもいまだ見し事を得ざる所也。其報礼には、1 度に鉄弾三十を発するトルメントムをまいらせたりき。

(マルカリイタは、貝の珠也。その大さ、拳のことくなる物ども也。トルメントムは、大砲なりという。)

されば、当時も、本国の人サンデヨルデヨは、ナンケンに居る事、すでに十年、アバットコルテルは、カンタンにある事、また十年、又スイヤムにても、十八年の前に、我法を禁ぜし事ありき。今は、其禁除きしかば、二年の前に、フランシスクスかしこにゆく。この余、トンキンにあるもの三人、クチンチイナ[コチンチイナ Cochinchina、「交趾支那」、今のベトナム南部をいう]にあるもの二人、これらは其名を忘れたりという。

(サンデヨルデヨ、アバットコルテル、フランシスクス、皆これこの徒の名。ナンケンは南京也。カンタンは広東也。トンキンは安南の地也。(安南はベトナムのこと)。コチンチイナは東埔寨(カンボサイ:カンボジャ)の東にあり。漢訳未詳。上記参照。)

むかし、我国に來りて、始て其法を記しもの事を問ふ。今を去る事、百二三十年前、彼方の化人に、フランシスクス・サベリウス[Franciscus Xaverius]といひし、此土に至りて、我法を説く。豊後の屋形、はじめに其教を借受して、つゝに管下の大名して、はるかに我本国に使せしめ、多くの物を施入せらる。其使、いとけなき子を携來て、我徒となし、歸らむとするに及びて、身死したり。この使葬りしところは、猶今にローマにあり。其フランシスクス、サベリウスは、カステーリヤの人にして、ポルトガルの君の師たりしかど、我法の弘通のために東し、此土に來れる事も、再びに至りて、この西に歸れる時、サンチャン[上川島]にして終りき。サンチャンは、チイナ・カンタンの南にある海島だと



いう。

(カンタンは広東、サンチャンは即香山県也。蕃語、香山の音、転じ訛れる也。なお、現在ではサンチェンと仮名読みする)

按ずるに、フランシスコは、漢に波羅多伽兒人、仏采釈古者というもの、即此也。豊後の屋形は、大友左衛門督入道宗麟也。其使せしものは、植田入道玄佐、もとは、美濃の国齋藤の族也。天正十二年に、宗麟がために使いして、ローマに死す。西人懐にせし冊子に、一道人の瓶を持って、童子の頂に水を灌ぐ所を、絵かきし図を指示て、これ豊後の大名の子の、法を受くる図だという。但し豊後の屋形、其使等、の姓名を問ふに、其姓は、つたわらずという。

#### 細字長文

(コンパニヤ・ジョセフ[岡本三右衛門]が説に、むかし豊後国に鬼怪ある家あり。ポルトガル人の来れるを、かしこに按置す。ポルトガル人、この壁上にクルス[Crus]をかきしに、こののちは彼の怪やみぬ。国司此の事をききて、不思議の事におもえり。1年を経し後に、フランシスコ・サビエル[Francisco Xavier : 上記 Franciscus Xaverius と同人]来りしかば、国司やがてその法をうけしという。そのフランシスコ・サビエルというは、ポルトガルの語なり。ラテンの語にフランシスコ・サビエリウスという、これ也。クルスは十字なり。又ジョセフが説に、此の師の神に通ぜし事共をしるせし所多し。西人の説もまたそれに似たる事共あり。この説、皆これ古の神僧の事など、いい伝えし所のごとくにして、ことごとく信ずべからず。されば、ここに記さず。その中、ゴアに此の師の屍を葬おさめし棺あり。水晶をもてつくりしかば、この形あらわれ見ゆるに、なを生ける人のごとしという。此の事をもってヨランダ人に問うに、人すでに死しぬ。この形やぶれざる事を得ず。もしこの説のごとくならむには、必ず是れ薬物のしからしむるだという。この言、誠に然り也。万国坤輿図を按ずるに、曷刺比亜の地に、一葉、名バル刺(ハバルラ)を産す。屍に塗るに敗れず。また孛露(ペルウ)の地、バル娑摩樹(パルサモ)を産す。この油を屍に塗るに敗れずという。

さらば、彼方、古より屍に塗るに敗れざらしむるの物あり。また大西人(シドチ)に、エウロパ地方、幻術ありて、種々この神怪を示す事ありという。この事ありやと問うに、この術ある事を聞かず。デウス時々人間に降る事あり。また古の化人、種々神通を現ぜし事も少なからず。また符呪等の法ありて、この効験ある事よのつね也。我ここに来たらむとして、カナアリアに至りし時、この所鬼怪の事ありて、我に請う。我すなわち符をあたえてたち所にこれをとどめぬ。即今もこれらの事あらむには、この事を試みられば、我が言の誣いざることはしり給うべしという。また此の事をもヨランダ人に問いしに、エウロパ地方、彼の教を尊信する所には、かならず木を以てクルス作りて、関門にたつ。またクルスを小さく作りて、各家の上にたつ。またアンニエスといいて、白蠟にて羊子の類のもの、右の手に、クルスかきし旌(はた)もちしを、造りて、常に身にしたがえ、また凡そ人に遇うに、右手の大指を以て、クルスを己が額と唇と胸とにしるす、これ天雷・鬼神、もろもろの災難をまぬかるべきの法だという。この説のごとくに、デウスよく万物を

つくりて、人を利生せんには、これら攘災の法を、人にをしえんよりは、この天雷・鬼神等を、造り出さざらむには、しくべからず。またそのカナアリアの事は、嶋中の人、ことごとく鬼物也。これはフランスヤにして、兇悪のもの、死刑に至りぬを流し度くる所なるが故也。ヨヤンもし鬼を役するの術あらむには、みづから獄中に苦しむ事を、まぬかるにはしくべからずやといいて、わらいたりき。いにしえより、キリステヤンの徒、この法を説くもの、鬼物の事をば、天狗という。西人の語もまたしかり。これ我が俗のことばによりて、この説をなす事と聞こえたり。）

ここまで注釈。

68

利瑪竇

大明の万暦年間、始に天主の教を唱えし、大西洋の人、利瑪竇(リメトウ:Matteo Ricci)が事を問ひしに、答ふる所なし。ふたたびとふに、我いまだ其事を詳にせずという。

按ずるに、フラソシクス・サベイリウスがごときは、いにしへより此かた、ここに至れる大西の人、其事を説ざるものはあらず。彼利子[利瑪竇]がごときも、明季[明の末期]諸儒の言に拠るに、凡大西の人にありで、シドチを知らずというものなかるべし。しかるに、いまだ其事におよびしものはあらず。心得られず。後に新刻大蔵の闘邪集を見るに、利子は香山巖(ヒアンシアンシアウ)に近き小国に生れしと見えて、其事跡もまた詳也。

69

またヲヲランド人の説を聞くに、エイズスの徒、諸国にゆきて、共幼敏のものを見ては、多方にして其国にひきゐりて、これを教育し、学既に通じぬれば、各々その本国に散じ還して、其法を説かしむ。これ其説の俚耳に入やすからむ事をはかるが故だという。我国のむかし、其教の師たるものも、半は彼国の学に就きし輩也き。さらば、利子がごときも、香山に近き国に生れて、シドチ穎悟、西に去りて、彼学に就き、つゐに中土に入て、始に其数を倡う(となう)。縉紳諸生(しんしんしよせい:)、そのために惑されて、大西の人、此方の声音に通じ、よく三教の書ものを見ては、多方にして其国にひきゐりて、これを教育し、学既に通じぬれば、各々その本国に散じ還して、其法を説かしむ。これ其説の俚耳に入やすからむ事をはかるが故だという。我国のむかし、其教の師たるものも、半は彼国の学に就きし輩也き。さらば、利子がごときも、香山に近き国に生れて、シドチ穎悟、西に去りて、彼学に就き、つゐに中土に入て、始に其数を倡う(となう)。縉紳諸生(縉紳は(しんしん):官位の高い人)、そのために惑されて、大西の人、此方の声音に通じ、よく三教(儒教・老莊・仏教)の書を読み、其説吾儒と合ふ所ありとす。かれもと、東土の人に係りぬれば、大西の人、みなシドチをしらざりしも、また怪しむにたらず。

彼方戦国の事を聞て、其兵いづれか最強きと問ふに、陸戦はトルカに敵するものあらず、

水戦は古には、フランスヤの兵を称ず。其後は、アンゲルアに敵するものあらず。今に至ては、ヨヨランデヤを其最とす。アンゲルアもまた、これに次ぐ。其戦船、高く大きな事、山嶽のごとくにして、其船の旁に、窓を設くる事、三層にして、毎層に八九あり。各窓大砲を架して、敵船の大小・高下・遠近に随ひ、其砲を発す。其速きに及び、堅きを破る事、ヨヨランデヤの制にしくものあらず。我むかしフランスヤにゆきて、近海の所、民物豊富の地を見たりき。ここに來らむとして、其所をすぎしに、ことごとく皆赤地となりて、生草をだにも見ず。其事を問ふに、ヨヨランド人の大砲のために陥りて、方数里の地、忽にかくなりしといひしという。

70

ヨヨランド人に、この大砲の制を問ふに、スランガというは、鉄弾の重さ8斤、カノンというは、鉄弾重さ40斤、半里の外に至る。(我が国の里数をもてはかる也。)。其たけ短かければ、遠きに及ばず。ボンというは、鉄弾の囲み、合抱[一かかえ]、其中を虚にして、火薬を突て、空にむかひて発つ。地に墜る時に、弾、碎けて火発し、土に入る事5,6尺許。方里[一里四方]許は、ことごとくに灰塵となる。此器最遠きにおよぶという。

彼方、火器の始をとふに、ジュデヨラのドオツバルカインの人、始め作れり。其地ダマスキスという所に相近し。スコルペイジウムの始は、今をさる事すでに2千余年だという。(ジュデヨラ、またユデヨラというがごとし。ドオツバルカイン、ダマスキス、皆地名。スコルペイジウムはここにいう銃なり。)

ヨヨランド人に、銃砲等の始をとふに、其始をばしらずという。

イスパニヤ、フランスヤのごとき、海外の国を併せ得て、国を開きし事を問ふに、たとへば、ノーワイスパニヤのごときは、初この国を治むるものもなく、シドチここかしこむらがり聚りて相争ひ、弱きは、強きが肉となりて、人の屍を相食ふに至れり。イスパニヤ人、風のために放されて、此の方に至りて、其衣食の業ををしへ、資財の用を通じて、みちびくにデウスの教を以てす。此方の人、始てこの生養の道を得て、相悦び服し、つゝに其地を納れて、未開の君の治めむ事を望請ひぬ。

71

ロクソンのごときも、俗皆裸体にして、わづかに樹皮を似て、前後を遮る。シドチまた禽獸に相遠からず。イスパニヤ人、こゝに至るに及びて、この生養の道を得るのみにあらず、我数ある事もしりぬ。国人挙りて、本国に内属せむ事を望請う。或人諫て、相去る事万里にして、彼国を治めむ事、我財用もまた給ぐべからず、棄てむにはしかじという。本国の君、海外の人をして、いきてその生を安くし、死してこの苦をまぬかれしめんには、我デウスの恩に報ふる所、すくなからじといひて、つゝに其請う所をゆるされき。此余、ゴア、アマカワのごときは、其地を借て、海舶互市の事に使用する所也。すべて其国を侵し奪ひしなどいう事にはあらずという。

(ノーワ・イスパニヤ、ロクソン、皆国名。ゴアは、インデヤの地名。アマカワは阿瑪港

で広東にあり。皆前に詳也。)

我国、東に僻りて最小しき也。また我に大禁ある事をば、凡そエウロパ地方の人にありて、ことごとくしれる所也。今はた何のもとめありて、此所には来りぬらむ、心得られずとふに、まづ此国の東に僻りて、かつ小しき也と、のたまふ事しかるべからず。凡そ其国を論ぜむに、其地の小大、其方の近遠を以てする事、あるべからず。万国の中、其土壤広く大きなるは、タルターリヤ、トルカにしくものなし。されどシドチのごとき、禽獸にだにもしかざるべし。エウロパ諸国の人のごときも、もし我教化によるにあらざらむには、またタルターリヤ・トルカに異なるべからず。我ローマのごときは、方僅かに十八里にはすぎず。されど、我道のある所なれば、西南諸国尊び敬はずという所なし。これを頭の小しきなるが、四体の上にあるにたとふべし。また試に物を観る

72

るに、其始皆善ならずという事なし。天地の気、歳日の運、万物の生、ことごとく皆東方より始らずという事なく、万国の中、東方に国せしもの、此土の外には、黒子ばかりの地もあらず。さらば、此土の万国にこえずぐれしは、我また多言を費やすにおよぶべからず、次に、我法今は此土に行はれざりし事、遠く前代の事を論ずるにもおよぶべからず。

(その懐にせし小冊子に、豊臣太閤の事をしるして、テイランにして、我法を禁ぜられし由、みえしという。テイランとは、番語に、多く人を殺せる暴悪の人を称ずるといふ。)

今代に至て、我法を禁ぜられしは、初ヨヨランド人、我教を以て、世を乱り国を奪ふの事也と告申せしによれる也。此事、某(それがし)深く弁ずるにもおよぶべからず。我ローマの国ひらけしより凡そ千三百八十余年、寸土尺地というとも、人の国侵し奪ひし事あるや否は、ヨヨランド人に尋問れんには、其事必らず明らかに候はんか。彼ヨヨランドのルテイルスのごときは、

(ルテイルスとはヨヨランド人尊信する所の祖の名也。すなわちこれこの法の異端だといふ。猶下に詳なり。)

地を侵し国を奪ひし事、世々に絶えずして、今その併せ得る所は、前に申せし事のごとし。さらば人の国を誤るもの、其教にはよるべからず。ただその人によれる也。またイスパニヤ、フランスヤのごとき、海外の地を併せしも、前に申せし事のごとく、それらの国は、其君というものもなく、其民歸する所なかりしによれる所也。もし此国のごとくならむには、其民なにを苦しみてか、この君を万里の外にはもとむべき。我今ここに来れるは、此冕を雪られて、国禁を開かれん事、チイナ、スイヤムのごとくならん事を、望請ひ申さむがためだといふ。

73

按ずるに、凡そ国を論ずるに、其土の小大、其方の近遠によらずというは、達論に似たり。又国を誤るもの其教によらず、シドチによるというも、其言また理あるに似たり。されどまた、其教とする所は、天主を以て、天を生じ、地を生じ、万物を生ずる所の大君大父とす。我に父ありて愛せず。我に君ありて敬せず。猶これを不孝不忠とす。いはんや、その大君大父につかふる事、其愛敬を尽さずという事なかるべしという。礼に、天子は、上帝に事ふるの礼ありて、諸侯より以下、敢て天を祀る事あらず。これ尊卑の分位、みだるべからざる所あるが故也。しかれども、臣は君を以て天とし、子は父を以て天とし、妻は夫を以て天とす。されば、君につかへて忠なる、もて天につかふる所也。父につかへて孝なる、もて天につかふる所也。夫につかへて義なる、もて天につかふる所也。三綱の常を除くの外、また天につかふるの道はあらず。

もし我君の外につかふべき所の大君あり、我父の外につかふべきの大父ありて、其尊きこと、我君父のおよぶところにあらずとせば、家におゐての二尊、国におゐての二君ありというのみにはあらず、君をなみし、父をなみず、これより大きなものなかるべし。たとひ其教とする所、父をなみし、君をなみするの事に至らずとも、其流弊の甚しき、必らず其君を？殺拭し、其父を？？拭するに至るとも、相かへり見る所あるべからず。

## 74

我国、ひとり東にあるのみならず、チイナもまた東にありて、其文物声教、古より称じて中土とす。其国またいかにと問ふ。されば此土の人のごときは、たとへば円なる物を見るがごとく、チイナの人は、方なる物を見るに似たり。また此土の人温にして和なる事、かくのごとしといひて、みづから手をもて其衣を把り、又手を似て其榻（とう：こしかけ）を撫で、チイナ人の固くして渋れる、これに似たり、近きを賤しみて、遠きをたつとぶべからずという。

按ずるに、方円の説、其試る所あるに似たり。漢人のごときは、其所謂堯舜以来聖々相傳ふる道ありて、異端の言に至ては、老仏の微言も、なを行はれ難き所あり。我国のごときは、古より此かた、仏氏の学盛にして、宗をたて、派をわかち、其徒各々我教えを倡え（となえる：歌に使うという。）、天下の人、彼に帰せざれば、これに入り、みづから異教を見て、怪しむ事をしらず。かれを転じこれに移すに、其説行はれやすき事、漢人の正を守て、動かしがたきがごとくにあらざれば也。

其ここに來らむ始め、本師命ぜし所、また彼告げ訴ふる事ども、其大要いかにと問ふ。昔フランシスクス・サベイリウス、始て此土に來りて、我法ここに行はれし事七十余年、タイカフサメの時に至て、始て我徒を退け逐はる。（タイカフサメは、太閤様也。この事は、秀吉九州を征されし時に、長崎に住せしバアテレを逐出されしことをいうなり。）

これよりして、我法の師徒、因誅をまぬかるるものなく、つゝにエウロバ諸国の人、此に通ずる事を得ざるに至れり。先師ホンテヘキスマキシムス、イノセンチウス・ウンデイシムス、（ホンテヘキスマキシムスは、ここに最第一無上等というがごとし。ローマ教化

之主の号なり。イノセンチウスは、名也。ウンデイシムスはここに 11 世というがごとし。  
[実は 12 世 Innocentius X I I 1691-1700]。この第 1 祖より 11 世にあたれば也。ウンは  
一つ也。デイシは 10 也。ムスは世というがごとしという。)

( )

75

此事を深く歎きしかど、其志むなしくして、十年前に終れり。今のホンテヘキスマキスイ  
ムス、クレイメンズ・トフヲデイシムス、(クレイメンズは、名也。トフヲデイシムスとは  
12 世というがごとし。) 前志を継ぎて、此事を議せしむるに、衆議決せずして、年を経  
しほどに、カルデナル相議して、(カルデナルは、本師に次ぎしもの。72 人ありとい  
う。)

昔チイナにおゐても、我法を禁じしかども、今は其禁開けしのみならず、其天子の使、  
ここに来る。またスイヤムのごときも、我法を禁ずといへども、これまた其禁を除けり。  
今に至ては、チイナ、スイヤム、すでにかくのごとし。(此の事、前に見ゆ。)

ヤアパンニヤにも、まづメツヨシナリウスを奉りて、告げ訴ふる所ありて、次ぐにカルデ  
ナルを、ヌンシウス [Nuncius] として其好を修めて、我法を、ふたたび東土に行はるべき  
ものかと申す。

(ヤアパンニヤは、日本也。メツヨシナリウスは前に注せり。ヌンシウスは、ここに信徒  
というがごとしという。)

衆議つみに一決して、メツヨシナリウスたるべきものを撰ぶに、衆また同じ某を薦擧し  
かば、其命をうけてここに来れる事は、前に申すがごとし。老大の母と兄とを棄て、万里  
に来る事、法のため、師のため、其他あるにあらず。初、此命をうけし日より、我志を決  
せし所三つ。其一つは、本国望請う所をゆるされて、我法ふたたび此土に行はれんには、  
何の幸いかこれにすぐべき。其二には、此土の法例によられて、いかなる極刑に処せられ  
んにも、もとより法のため、師のため、身をかへり見る所なし。さりながら、人の国をう  
かがう間諜のごとく、御沙汰あらむには、遺恨なきにあらず。それも本師の命ぜしに、国  
に入ては、国にしたがふべし。

76

いかにも其法に違ふ所あるべからずと候ひしかば、骨肉形骸のごときは、とにもかくにも  
国法にまかせむ事、いうにおよはず。其三つには、すみやかに本国に押還されん事、師命  
をも達し得ず、我志をもなし得ず、万里の行をむなしくして、一世の讒(そしり、讒言)  
を胎(のこ)さむ事、何の恥辱かこれにすぐべき。されど、我法いまだ東漸すべからざる  
時の不幸にあひし事、これ又、誰をか怨むべき。これらの外、申すべき事もあらずという。

初、我国に至りし時、長崎にゆかむ事をねがはず、直にここに来らむと望む。其故をとふ。  
我万里にして、此行ある事は、我国命を上達すべきため也。此故に、直にここに来らむ事  
を望請ふ。いはんや長崎のごときは、ヲヲランド人のある所、我またかしこにゆかむ事を

ねがはずという。

聞くがごときは、其国の使命をうけて来れる也。凡は隣国の使人といへども、必ず其信を伸る所あり。我国もとより汝の国と、旧好あるにあらず。もし其信とすべき物なからむには、何を以てか其使たる事を信ずべき。いはんや、汝のここに来る、我国の服を服し、我国の言を誦ず。これ我西鄙[シドチは屋久島に上陸して滞在]の人をまどはずに、我国の人となり、ひそかに其法を説むとするにあり。其計窮しぬれば、初て其国の使と称す。其跡につきて見る時は、そのいう所信ずべからずと問ふ。此国にして我法を禁ぜられしより、凡そ我方の人、長崎に来れる、或は殺され、或は押還され、いまだ一人の国命を達せしものあらず。

77

これ我孤身にして、西鄙の地に至りとゞまれる所也。此国之服を服せし等の事に至ては、長崎におみて申す所、すでに訖り（おわり）ぬ。又本国の議は、前に申せし所のごとく、告げ訴ふる所、もし恩裁の御事あらむには、かさねて信使を奉て、其恩を謝し申して、我法を此土に行はんとするにあり。国に入りては、まづこの禁をとふの礼、いづれの国にかなからざらむ。いはむや、国禁の除かるべき事を望請う使として、いかむぞ其国に入りし初に、禁を犯し、罪をかさね、みづから国命を辱しむる等の事をなすべきや。其義自ら明らかにこそ候べけれという。

天主の教、我いまだ聞く所あらず、其大略を聞かむと問ふ。大凡、物自ら成る事あたはず、必これを造るものを待ち得て成る。今試に一堂の制を見るに、其制自ら成る事あらず、必工匠を待えて成る。一家の政を見るに、其政自ら治るにあらず、必君長を待えて治る。天地万物、これに主宰たるものあらずして、成る事あらず。其主宰名づけて、デウス[Deus]という。（デウス、漢に天主と訳す。）デウス初に天地万物を造らむとするに当りて、まづ善人を住しめむために、諸天の上にハライツ[Paraiso]を作り、

（ハライツとは、漢に訳して天堂という。仏氏いやゆる極楽世界のごとし。）

無量無数のアンゼルス[angelus]を作る。（アンゼルスは、仏氏いわゆる光音天人の類。ポルトガルの語にアンジョ[anjo]というなり。）

其後に、大地世界を作りて、タマセイナを取て、

（タマセイナ、此に清浄土というが如し。）

男を作りて、アダン[Adan]といひ、其右脇の1骨を取て、女を作りて、エワ[Eva]という。すなはちこれ人の始也。彼男女をして夫婦となしテリアリ[terreal]の地に居らしめ、

（テリアリ、ここに安楽国土というがごとし。）

其余の地をば、鳥獸のある所とす。凡そ人物のアニマに、三の品あり（アニマは魂なり。）

草木のごときは、生のみ。（榮枯のみあるをいう。）

禽獸のごときは、動のみ。（飛走のみあるをいう。）

78

此二つの物は、形すでに滅びぬれば、アニマもまた滅びぬ。これを、始あり、終ありとす。人のごときは、最靈にして、其アニマ天地と共に滅びず。(人は靈魂ありて、草木鳥獸に異也という)

これを、始あり、終りなしとす。

これによりて、デウス、アダン・エワに戒むるに、つつしみてマサンを食ふことなからしむ。もしそのこれを食はむには、禽獸の中に墮して、長くその苦をまぬかるる事なからむがため也き。(マサンは果の名だという。仏氏いわゆる地餅の類か。この苦とは、生老病死等の苦だという。)

ここに、ルウチヘルといひしアンゼルス、自ら其智なるにほこりて、称じて、デウスといひ、またこれを信ぜしアンゼルスすくなからず、デウスこれをにくみて、インベルノ[inferno]を作りて、それにくみせし輩と共に、ことごとく皆下界に追下して、インベルノに居らしむ。(ルウチヘルはアンゼルスの名也。インベルノは、ここに火坑地獄とすという。)

ルウチヘルその輩とのみ、インベルノに苦しむ事を恨みて、テリアリに飛び行き、まづエワをすすめて、マサンを食はしむ。アダンまた、エワがす

ゝめによりてこれをくらふ。かくてアダンとエワと、共に天戒を破りて、テリアリを逐れてげれば、其子孫人間に降りて、其苦をまぬかれず。ここにおみて。アダン、エワ、コンチリサンの心を発して(コンチリサンとは、此に懺悔という。)、

ふかく其罪を謝す。デウス其罪の大きにして、自ら贖う事のあたふまじきをあはれみて、自ら人の身と生れて、二人に代りて、其罪を贖はむ事を誓約す。二人は、つみに九百三十歳の寿をたもちて、終りて、ハライツに至りたり。

79

アダンをさる事二千余年にして、ノエ[Noe]というもの、其男子3人あり。父母子婦すべて八人のみ。デウスの教をうけしたがしふ。世の人これを信ぜず。デウス降りて、ノエに教て、船作らしむ。百廿年にして船成れり。デウスまた降りて、彼等を教えて、穀蔬鶏豚の類迄、ことごとく共に船に載せしむ。すでに大雨降る事40日、大水、山をかねて、大地の人物、ことごとく溺れ没す。ノエが父子夫婦のみ、死をまぬかる。其船、猶アルメニヤの山の巔に現存し、また其水に漂来る煤穀の類、エウロバ地方、所在の山岳の上にあるもの、猶あり。ノエを去る事、一千余年にして、(今をさる事、3千余年なり)

デウス、ジュデヨラ[Judaera]のスイナイ[Sinai]に降りて、モイセス[Moises]というものに、マンダメント[mandamento]を授て、世の人にをしへしむ。

(ジュデヨラは、国の名。前出。)

エヂツプト[Egypt]の君、この教を信ぜず、つみにモイセスを殺さむとす。

(エヂツプトは、国の名。ヲラランドの語にはエギツプトという。)

これに随ひて、国を避けしもの数万人、其君自ら兵をひきゐて、マーレプロムに逐至る。海中忽に潮わかれ、路ありてのがれさる。



糊また忽に湧きて、逐ふもの皆溺れ死す。

(マーレプロムは、マーレは海。プロムは、またプルウトという。此にう血也。人死して、この海ことごとく血となれると也。漢に西紅海と翻するもの、即此也。)

モイセスをさる事、凡そ 1800 年 (今をさる事、1 千 7 百年なり)、ジュデロラの国、ナザレツ [Nazaret] に、サントス・マリヤ [Sanctus Maria] という聖女あり。ヘーテレアム [Bethlehem] の君、ダアヒット [David] の後也。

(ナザレツ、地名。サントスは尊称。マリヤは漢に瑪利亞と訳すという。ヘーテレアムは地名。ダアヒットはその君の名。漢訳未詳。)

十六歳の時、夢にアンゼルス降りて、デウスの

命を告げて、デウス其子となりて、名をエイズス・キリストスというべし。またサントスジョセフして、これが父とし、ベイレウエンに産しめて、エヂツプトより、むかへかへすべし、という事を見る。

(エイズス・キリストス、漢に耶蘇と訳す。我俗にゼスといいしは、漢訳の音転じ、訛れるなり。サントスジョセフ、人名。ベイレウエンは地名。)

80

こゝにおゐて、ジョセフをともし、ナザレツを去り、ベイレウエンの駅に至りて、つゐに男女の道にあづからずして、男子を其厩中に産む。夢見し所によりて、エイズス・キリストスと名づく。

(エイズス生まれ氏は、此れ乙丑の年を去る事、1709 年前の 12 月 25 日の夜半だという。さらば本朝人皇第 10 代、崇神天皇 30 年辛酉の年にて、漢平帝元始元年にあたり。)

アラビア、タルソ、サバ、三国の君、エイズスが生れし夜に当て、客星現れしを観て、聖人ありて生れし事をしりて、各々国を出て、この所をもとむ。

(アラビアは、今アジアの地方にあり。タルソ、サバ、共にある所をしらず。漢訳未詳。)

三国の君、同じき所にゆきあひて、共に、ジュデヨラの君エローデスに見えて、此事を問ふ。エローデス其事をしらず。シドチをもとめ得ば、必我がために告知らすべしと約す。ここをさりて、行程 13 日、ペイレウエンに至るに、彼星かしこの上にあたり。つゐに其駅にして、エイズスを拝する事を得ぬ。アンゼルスありて降りて、三国の君を戒むるに、エイズスの事をもて、ジュデヨラの君に告る事あるべからずという。これ彼ころにいむ事あるによれる也。マリヤつゐにここをさりて、エヂツプトにゆく。ジュデヨラの君、三国の君の其事を報ぜざるをあやしみ、明年、国中の幼児、生れて二歳なるもの、数万を索て、ペイレウエンに殺す。七年にして後、其君死す。アンゼルスまた降りて、マリヤに告て、ナザレツに帰らしむ。エイズス生れて、瑞応多く、幼にして、みづから天主の子と称じ、十二歳にして、エルーザレムに説法する事 3 年、この教えをうけしもの 5 千人。

(エルーザレムは地名。)

ジュデヨラの君セイザル、これをにくみて、其罪を断りて、カルワーリエ[Calvaria]におゐて、磔し殺す。

(カルワーリエは、山の名。磔をクルスにかけしという。クルスは漢に翻して十字架というもの也。また黄金を以て、其像を造りしを、イマゼン[imagen]というあり。これエイズスとられゆく時に、まろびしを、女人の幌巾(手拭)にて、この面を拭いしに、この面の形、幌巾にうつりしに生まれりという。又エイズスが像を見しに、銅像の十字架に磔殺せられり所也。)

死して後、三日にして蘇生し、其母マリヤにみえて、弟子のために法を説く事、また四十日。終に上天しつ。これデウス、初の誓約のごとく、人と生れて、アダン・エワがために、其非を贖ふ所也。いく程なくして、ジュデヨラの君、其敵アルテウスのために滅び、国中の人馬城郭、ことごとく火のためにやかれて、すなはち今トルカの地に、其荒城のみ遺れるあり。

(カルテウスは、或いは地名、或いは人名、詳ならず。)

エイズス上天の時、其年三十三、其母マリヤは、六十三歳にして上天せり。

(此の徒の念珠、コンダツという。珠の数 33 なるは、エイズスが年の数にとり、63 なるはマリアが年の数にとる所という。)

エイズスが弟子七十二人、その中十二の上足あり。サントスペートルス、サントスバウルス二人

(12 人の中なりという) エルーザレンをさりて、イタリアの地、ローマに來れり。これらもまた、其君セイザル、アウグストスがために殺さる。其後三百廿余年にして、ローマの君コンスタンチノス、癩疾を患ふ。衆医みな多くの小児を殺して、この血に浴せむ事を請ふ。

其君、身の疾のために、人を殺すに忍びずといひて、其言を用給ず。此夜二神人を夢見しに、シルウエステルという師、ツラツテにあり。かれに就てまみえは、汝の疾癒べしと告ぐ。其君みづからシドチを求るに、夢に見し所の二神人の像、彼師の所にあり。

これすなはち、ペートルス、バウルス也。初ペートルス、ローマのためにころされしより此かた、其法をうけついだもの三十二世、ことごとく皆国誅をまぬかれず、三十四世にして、シルウエステルに至る。其君の請ふによりて、聖水をもて其頂に灌ぐに、其疾たち所に癒えぬ。

(この徒受戒の時、必ず授水の儀礼[洗礼]あり。これ、エイズス殺されし時の血をもて、一切の罪惡を祓除するの義だという。ただし、この事仏氏灌頂の法に相同じきか。ツラツ

テというはシルウエステル隠れ居りし山の名という。)

この君大きに悦びて、やがて其居を避けて、みづから鍬とりて、十二 Fundament をすべて、サントス・ペートルス・エツケレイジャ [Sanctus Petrus Eclesia] を建つ。

(Fundament は、ここにいう礎也。サントス・ペートルス・エツケレイジャは、ここに精舎の名あるがごとし。番語 Tempus というは、ここに寺というがごとし。)

またローマ、シスチイリヤ、ホアポリス、ノワルビイナ、ボノーニヤ、ベラアラ、スタアトスホンテヒイテウス等の地を施入し、国を去る事数百里にして、コースタンチイの地に移り居れり。(今、トルカの国都、すなわちこれなり。)

これより此かた、エウロバ地方の国君宰臣を始て、人非人等に至るまで、悉く皆此法を尊信せずというものなく、凡そローマの地、四面皆石を畳みて基となし、この圍十八里、そのエツケレイジャ始て建しより、此地いまだ火災ある事なく、世々に金銀珠玉をもて莊嚴せし事、天下の寺觀比すべき所にあらずして、ここに聚り居るもの、凡七十余万人、

(この地、8つの山ありという。ヨヨランド人の説には、ローマの周圍 24 里許。その地勢險にして、7 山秀で起こり、樓閣殿堂、金碧相転じ、いはいかりなき壯觀也。この徒を除く他は、多くは工匠、この巧妙天下双なし。諸国の工、また来り学ぶもの多しという。)

はじめ、シルウエステル此地を開きしより、今のクレイメンズに至るまで、二百四十余世。凡そ、1380 余年。其教化之主、相繼でこれを称じて、バアバといひ、またこれをホンテヘキスマキシムス [Potifex maximus] という。

(ヨヨランドひとは、その本主をパウスという。バアバの転語なるか。按ずるに、今の本主は、シルウエステルより 240 余世といい、又 12 世ともいう。これホンテヘキスマキシムスの号ありてよりは、12 世なるの義か。)

83

この徒各々位号あり。この上等は、スムテホンテヘキス、すなはちこれ教化之主也。其次はカルテナアリス、此位にあるもの七十二人。

(これエイズスの 72 弟子に準ず。そのバアバの席をつぐものには、72 人の中を撰びて、各々この名を紙にしるし、これを封じ、エイズスの像前にて、ひらき見て、この名しるせし数、多きをもて、この人とすという。)

其次は、エビスコブス [Epiiscopus 司教]、この次は、サチエルドス [Sacerdos 司祭]、其次は、リヤアコノス [Diaconus 助祭]、其次は、スプテアコノス [Subdiaconus 副助祭]、其次は、エキソルチイスタ [Exorcista 祓魔師]、其次はアコーリトス [Acolythos 侍者]。其次は、ラスデアーウス [Ostiaris 墓掘人]、其次は、レキトラトス [Lectoratus 読師職]、これより以下、其職掌の名号数多し。そのエビスコブスより以下、この数皆定まれる事はあらず。バアテレ [Padre] (漢には巴礼と訳す。日本でバテレンともいうがこれなり。) イルマン [irman] などというは、其位号にはあらず。エウロバのことばに、父を、バアテレといひ、母を、マアテレといひ、兄弟を、イルマンという。

されば、我たつとぶものは、バアテレともいひ、我したしきものをば、イルマンともいう也。此土のむかし、この教の師友を称じて、バアテレ、イルマン等の称ありしは、此義也。

凡そ一世界の内にして、各々其たつとぶ所の教法あり。其宗をわかつに、三つに過ず。一つには、キリステヤン[Christian]（エイズスの法也。我俗にキリシタンというはポルトガルの語。）二つにはヘイデン[Heiden]、またこれをゼンテイラ[Gentile]という。（この法を問ひしに、此の宗には、仏を多く立てて、それにつかふる也といいて、この教とするところは、つまびらかならず。）

三つに、マアゴメタン[Mohomedaan?]（これ、漢に回回の教というものをいう也。）

エウロバ地方にして奉ずるところは、皆是キリステヤンにして、また各々其宗派あり。我うけ傳へし所は、カトーリクス[Catholicus]の派也。そのキリステヤンより出て、別に一法をたつるものを、すべてエレゼス[haereisis]という。

（これその教の異端なりという。）

## 84

ルテールス[Lutherus]、アルリヨ[]、カルビノ[Calvin]、マニケヲ[Manichio]、の類、皆是エレゼスとす。ヲヲランダヤに奉ずる所は、ルテールス、すなはちこれ也。

（ルテールスは、人の名也。ポルトガルの語にはルテロという。もとこれキルステヤンにして、後におのれが宗をたつ。ヲヲランド人の説を聞くに、たとえば祖師禪あるがごとく、この教外の宗と見えたり。）

アジア地方に行はるゝ所、モゴルの教というものゝごとき、これを称じて、マアゴメタンとす。

（アフリカ地方、トルカのたつとぶ所もマアゴメタンなりという。按ずるに、エウロパ地方、ムスコビーア、この俗モゴルのごとしといえは、これもマアゴメタンなるや否や、この説は聞かず。）

又此外、チイナにして尊信する所のごときは、其学称じてコンフウジョスといひ、

（これ儒者自然之学だという。彼の教には、天地万物、みづから成る事なし。皆これデウス造れる所だという。しかるに儒には、大極、両儀を生ず。大極すなわち理也などいうを、しかはあらずというなり。）

其徒を称じて、アディエスという。

（これ儒者の事也。）

これ此土におゐて、周孔の道というもの即ち此だという。

按ずるに、西人（シドチ）其法を説く所、荒誕淺陋、辨ずるにもたらず。しかりといへども、其甚しきもののごときは、また辨排ぜざる事を得べからず。まづ、其番語称じて、デウスというもの、漢に訳して天主とす。これ彼れ此れ声音相近きにとれる事、たとへは、エイズス訳して、耶蘇とするがごとし。番字もと読むべからず。漢字を仮りて、其声音をうつせるのみ。この義番語にありて、漢字にあるにはあらず。然るに明季の諸儒、利瑪竇、初に天主の字を借り用ひて、この番語を訳し、つゝにこの説を附会して、経にいはゆる上帝これ也とす。諸儒其説にまどひて、其非を覚らず、もしデウス訳して天主という、すな

はちこれ天の主宰、経にはゆる上帝なるべくは、エイズス訳して耶蘇という。耶蘇また何の義かあるべき。(この事、我が国にして、日の神の御事を漢字を得るに及び、大日靈貴としるされりによりて、大日如来これ也という説のごとし。)

85

経に所謂上帝の説のごときは、善く書を読むものの、自ら知れる所なれば、今此に論ずる事を待たず。もし天主教法の字、梵典に出し所といはむには、我もとより知れる所にあらず。

(天主教法の字は、最勝王経に出づ。)

今西人の説をきくに、番語デウスというは、此に能造之主というがごとく、ただ其天地万物をはじめ造れるものをさしいう也。天地万物自ら成る事なし。必ずこれを造れるものありという説のごとき、もし其説のごとくならむには、デウス、また何ものゝ造るによりて、天地いまだあらざる時には生れぬらむ。デウス、もしよく自ら生れたらむには、などか天地もまた自ら成らざらむ。又天地いまだ成らざる時、まづ善人のために天堂を造るの説、天地もいまだ生ぜずして、斯の人すでに善悪の相わかれしも心得ず。凡そ其天地人物の始より、天堂地獄の説に至るまで、皆これ仏氏の説によりて、其説をつくれる所なれば、これ又ことごとく諭排するに及ぶべからず。

(まずハライソを作るといふのは劫初の天地、風吹水減じて、次第に沫を結び、化して天空となるというがごとく、アンゼルスの説は、光音天人の事にして、マサンを食ったということは、地味を食って、身体重く、光滅び、また粳米を食って、男女の形分かれたというに似ている。)

其天戒を破りしもの、罪大にして自贖うべからず、デウスこれをあはれむがために、自ら誓ひて、三千年の後に、エイズスと生れ、それに代りて、其罪を岡へ贖えりという説のごとき、いかむぞ、嬰兒の語に似たる。方、今刑をつかさどれるもの、猶よく其情のあはれむべきものを発して、其罪を赦し宥む。其天戒というものも、デウス自ら??試し所也。

自ら其罪を赦し宥むに、なに事のあるべきにや。いはむや其??試しところのごときも、これをし

86

て果を食ことなからむのみ。あやまちてこれを食はむ罪、いかむぞ其食ひしものの、自ら贖うふ事あたはずして、其獄決せざる事、三千余年を経て、デウスそれに代りて、其罪をうくるにはおよぶべき。たとひデウスは、アダムがために其罪をうくるとも、これを磔罪せし所のもの、これまた誰に代りてか、つゝに其国を滅すには至りぬらむ。又デウス盡世界の人を溺殺し、ひとり其教にしたがふもの、海中に路開け、また其??相せし所の船、大水に漂ひ来りし所の蠣殻の類、猶今にありという説のごとき、デウス称じてみづからよく天地人物を生じ養ひて、大公の父無上の君という。さらばなどシドチをして、皆ことごと

とく善ならしめ、皆ことごとく其教えにしたがはしむる事あたはずして、盡世界の人をして、ことごとく皆絶滅せしむるには至れるにや。たとひまた、デウスといへども、人をして皆ことごとく善ならしむる事あたはず、皆ことごとく教ふる事あたはずば、いかむぞまた、天地創造の主とは称すべき。

87

また至愚にして、其教ある事をしらざるもの、何の罪かは深く咎むべき。しかるをつみに盡世界の人をして、ことごとく皆絶滅に至らしむる事、いかむぞまた、これを生じこれを養ふ大父大君とは称すべき。

また怪石の船の形に似たる、断崖に螺の殻ある、いづれの地になかなるべき。我国のある所もまたしかり。いかむぞ、又デウスの事にあづかるべき。この十戒というもの、また仏氏の説によりて、ただその他犯の戒を、二条にわかち出す。今其説をとふに、我教化之主より始て、凡そ其徒弟たるものごときは、ことごとく皆女子に近く事をもゆるさず、其他尊貴の人といへども、一妻の外に、他犯の事ある事なし。此故は、夫婦相和がざるは、必ず其邪淫による。世間父ありて、其生母の故に、其子をにくむあり。子ありて、其生母の故に、父を怨むるあり。この母を同じくするものは相愛し、其母を異にするものは相にくむ。父子兄弟相和らがざるも、もととして他犯による。これによりて、其れ禁特に重しという。又古より以来、彼方諸国戦乱の事をきくに、皆これ共嗣絶ふるが故によれりという。其流弊のここに至れるも、またあはれむべし。

エイズス降生之初、種々瑞応あり。自らデウスと称ぜしというの類、釈迦文生れて、種々瑞応を現じ、自ら称じて天中天といひし事のごとく、其磔殺されし後に蘇生して、其母にみえしというの類、小瞿曇賊せられ、木その身を貫き、立てて以て標となす。大瞿曇その血をとりて、人となせしといひし事のごとく、シルウエステル聖水を以て、国君の頂に灌しは、大梵天王、四大海水を以て、其大子の頂上に灌ぎし事のごとく、其君ローマを施入して、精舎を建てしという類は、びようさ王、からんだ竹園を施して、僧伽藍摩となせり事のごとく、すべてこれらの説、番語ことごとくに通曉すべからずといへども、大約その教の由来る所、西天浮図の説に出づ。

88

陰（ひそ）かに其批糠を竊むの説、鐘子が言ひし所、また我を欺かず。即今其説によりて、ヲヲランド鏤板の地図に拠るに、そのデウス降生の地ジュデヨラのごときは、西印度の地方を相去る事遥からず。又其説に、エイズスいまだ生れざる以前、ジュデヨラのみ、デウスの教ある事をする。この他はことごとく皆仏教を尊信したりという。さらば、西天浮図の説、其地方に行はれし事、エイズスが法のさきにあり。今エイズスが法をきくに、浩像あり、受戒あり、灌頂あり、誦経あり、念珠あり、天堂地獄・輪廻報応の説ある事、仏氏の言に相似ずという事なく、この浅陋の甚しきに至りては、同日の論とはなすべからず。明季の人、この国の滅びし故を論ぜしに、天主の教法、其一つに居れり。我国巖に其数を

禁ぜられし事、過防にはあらず。幾を知るものにあらざらむには、誰かはこれをよくすべき。ただその夷を以て夷を治む。時の権宜には出ぬれども、虎をすすめて狼を駆る、またその畏なきにはあらず。

89

下巻註(原本頭記せるもの。)

67 頁 植田入道玄佐の上に〔玄佐もと清和源氏にて、渡邊の家をつぎ、又斎藤の家をつぐ。家紋巴なり。典子名虎松、時に三歳だという。〕

68 頁 利子の上に、校者(文彦)云、利瑪竇がたしかに意太黒人なる事はききに刊行せし采覧異言の跋欄外に辨ぜり。見合すべし。

西洋紀聞 終

西洋紀聞 原文電子テキスト 終

## 『西洋紀聞』用 干支

本書には、年代の表現に干支が使われているので、その点にちょっとだけ説明を加えます。

干支（十干と十二支）

十干：甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸

音よみ：こう、おつ、へい、てい、ぼ、き、こう、しん、じん、き

訓よみ：きのえ、きのと、ひのえ、ひのと、つちのえ、つちのと、かのえ、かのと、みずのえ、みずのと

十二支：子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥

読み：ね、うし、とら、う たつ、み、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い

## 紛らわしい問題

十干の戊（ぼ、つちのえ）と十二支の戌（いぬ）、および己（き、つちのと）と巳（み）は、字が似ていてまぎらわしく、本書でも OCR が間違えて私が気づかずにいる可能性が否定できません。ある程度、注意はしましたが。

宝永 5 年（1708）戊子は、つちのえね

十干 [編集]十干	音読み	訓読み	日本語の意味
甲	こう	きのえ	木の兄
乙	いつ、おつ	きのと	木の弟
丙	へい	ひのえ	火の兄
丁	てい	ひのと	火の弟
戊	ぼ	つちのえ	土の兄
己	き	つちのと	土の弟
庚	こう	かのえ	金の兄
辛	しん	かのと	金の弟
壬	じん	みずのえ	水の兄
癸	き	みずのと	水の弟

## 十二支

	音読み	訓読み
子	し	ね
丑	ちゅう	うし
寅	いん	とら
卯	ぼう	う
辰	しん	たつ
巳	し	み
午	ご	うま



未	び	ひつじ
申	しん	さる
酉	ゆう	とり
戌	じゅつ	いぬ
亥	がい	い

トップは甲子（こうし、きのえね）、ラストは癸亥（きがい、みずのとい）  
それを使った用語がいろいろあります。

例：

還暦 干支の同じ組み合わせは 60 年に一度だけ回ってくるのを呼びます。

壬申の乱： 672 年が壬申（じんしん、みずのえさる）なので、そう名付ける。

戊辰戦争： 1868 年（戊辰つちのえたつ）から翌 69 年まで続いた戦争。  
新政府軍と旧幕府系との戦いの総称。

辛亥革命： 1911 年 中国で清をたおして中華民国とした革命の年。

甲子園： 1924 年（大正 13 年）きのえねの年に完成。甲子は十干と 12 支の  
トップが組み合わせあって、「縁起のいい年」とする人も多い。

丙午（ひのえうま）： 1906、最近では 1966 年。「その年には〇〇が多い」とか「その年生まれは〇〇」とか、根拠のない迷信に結びつけられる。最近でも、1966 年には出産数が減少し、女兒出産が特に少ないという。前年中に届け、年末に生まれると届を遅らせるらしい。

壬辰と出生： 2012 年は壬辰（みずのえたつ）にあたり、この字はオンナ扁をつけると「妊娠」となり、中国では「妊娠と出産に縁起がよい年」として、2012 年は出産ブームの由。日本では少なくとも広まってはいません。発音は同じだが、「壬申」とは違います。